彼女の恋は……

Y’z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋は……

【Ｎコード】

Ｎ４０６８Ｃ

【作者名】

Ｙ，ｚ

【あらすじ】

五人の女性が出会い、バンドでメジャーデビューを目指す。その女性たちの恋物語。

―1―

左手にそびえる山並みの上の空は、夕焼けに赤く染まっている。そのまま右手に目を向けると、そこには海が広がっている。今日の波は穏やかだった。

いつもは混んでいるこの海岸線を走る国道は、今日はとてもすいていて、松本小梅（まつもとこうめ）は気分よく会社の十トントラックを走らせていた。

小梅がカーステレオの再生ボタンに手を伸ばしたときだった。携帯電話の着信音が鳴った。丁度信号待ちになったので、携帯電話を手に取ると、弟の雅司（まさし）からのメールだった。

『ねーちゃん、誕生日おめでとー』

「よしよし、バースデーメールなんて感心じゃん――。でも二十三か、今度こそ受かるかなー、コンテスト――」

五度目の正直――、と言いかけてカーステレオに手を伸ばした。再生ボタンを押すと、スタンリークラークのファンキーなチョッパーベースが流れ出す。小梅はそのリズムに合わせて右手の親指で、ハンドルを叩いた。

信号が青に変わったのでトラックを走らせた。そしてハンドルを叩く手を止めて窓を開けると、潮の香りをたっぷりと含んだ春の暖かい風が吹き込んでくる。その心地よさに満足しながら、鼻から大きくその風を吸い込んで、今度こそコンテストに受かって、今のバンドでメジャーデビューする――、そう小梅は、五度目の決意を固めていた。

会社の駐車上にトラックを止めると、小梅は真っ直ぐに事務室へ向かって歩き出した。

「お疲れーっす！」と小梅が元気よく事務室へ入っていくと、

「よお、小梅ちゃん、今日は早いねえ」と今年で定年退職を迎える事務の佐々木（ささき）が、帰り支度をしながら小梅に声を掛けた。

「道、すいてたもんで」と小梅が頭に手をやりながら答えていると、後ろから声を掛けられ小梅は振り向いた。先輩の西田(にしだ)が、片手を上げて小梅の方に近づいてきた。
「お疲れっす」
「小梅これ」と西田は小梅にキーフォルダーを差し出した。小梅がそれを手に取り顔を上げると、「名古屋限定だぜ」と西田は自慢げに口元を緩めて言った。
それはハローキティーのキーフォルダーだった。頭に金のシャチホコを被っている。小梅が引きつった顔を上げると、「誕生日プレゼント」と西田は小梅の肩をポンと叩きながら言って、事務室の奥に入っていった。
小梅は仕方なさそうな表情をして、ズボンのポケットにそれを入れると、帰り支度を始めた。

道がすいていたおかげで、小梅はいつもより早く自宅へ向かっていた。
帰る途中小梅は、自宅アパートの近くにあるコンビニエンスストアーに寄って、弁当を買って帰ろうと考えていた。すると携帯電話の着信音が鳴った。電話は実家からだった。
「もしもし？」
『あっ、小梅？』
「ああ、お母さん。なに？」
『ん？　ああ……、誕生日おめでとう……』
「なによ、そんなこと？」
『ああ……』
「なによ……」
小梅の母は、相談したいことがあるので、近いうちに実家へ来て欲しいという用件を小梅に伝えた。小梅は出来たら帰ると、お茶を濁すような返事をして手短に電話を切った。口調から、ろくでもない話だろうと小梅は思って溜息をつくと、コンビニエンスストアー

の前に立った。
店に入り、五百ミリリットル入りの缶ビールとつまみの乾き物と、弁当の棚からお好み焼きを、迷うそぶりも見せずに手に取って、レジに向かった。
（げっ！　シゲちゃん）
レジカウンターの向こうに、隣の部屋の住人の三井繁蔵（みついしげぞう）が立っていた。繁蔵は小梅を見上げて、おどおどした口調で言った。
「い……、いらっしゃい……、ませ……」
小梅は繁蔵をちらりと視線を下げて見て、カウンターの上に品物を置いた。繁蔵はおぼつかない手つきでレジを操作し始める。
（あー、レロレロどんくさい！）
一つの商品のバーコードを読み取るのに、五秒はかかっている。
繁蔵はちらりと上目遣いで小梅を見た。
「なに？」と小梅が睨み付けるように見下ろして言うと、繁蔵は困ったような表情をして俯いた。
「あ……、あの……、お好み……焼き……」
「あっためて！」繁蔵が言い終わらないうちに小梅は答えた。
繁蔵はどぎまぎしながら後ろの電子レンジにお好み焼きを入れて、どのボタンを押そうか迷っている。
（ぐおお！　デロデロどんくさい！　ふぎゃあ！　イライラする！　ノリが悪いのよ、ノリが！　もっと、チャッチャカとファンキーに出来ないの！）
小梅は繁蔵に合うたびに、彼ののろのろとした行動にイライラさせたれていた。去年の同じ時期に今のアパートへ引っ越してきて、隣の繁蔵の部屋に挨拶に行った際には、初めて見た繁蔵の少年のような顔立ちに少しときめくものを感じたが、その後何度か話をするたびに、印象は悪い方向へ向かっていった。
「お……、おまたせ……、しました……」
――ようやく商品を渡された。
「あ……、ありがとう……」

「三井さんておいくつ？」また彼が言い終わらないうちに小梅は訊いた。
「はっ？」繁蔵は驚いたような表情で小梅を見上げた。
「歳よ、いくつ？」
「あ……、あの……、今日で……二十五になります」と繁蔵は俯いて言って、最後に口をほころばせた。
（げげ！　私と誕生日が一緒？　しかも、二つも上？　チビだし、ゼッテー下だと思ってたのに）
小梅は目を剥いて驚いていた。
「あ……、あの……、松本さんは？」
「レディーに歳を聞く気？」
「すっ、すみません！」
小梅がまた睨み付けるように見下ろして言うと、繁蔵はぺこぺこと何度も頭を下げた。
小梅がそんな繁蔵から目を逸らして商品の入った袋を受け取り、ズボンのポケットから取り出したものを、カウンターの上に置くと、繁蔵は不思議そうな表情でそれを見つめた。そして、その表情のまま小梅を見上げて、「あ……、あの……」と声を出した。
「プレゼントよ。誕生日の」
繁蔵は暫く身体が固まったように動かなくなり、その後ゆっくりと震える手でキーフォルダーを手に取ると、それを大事そうに両手で包んで拝むようにしながら何度も礼を言った。
そんな繁蔵を小梅は横目で見ながら、不満そうな表情で店を出た。

夜九時過ぎ、小梅はテレビのコントを馬鹿笑いしながら見ていた。すると玄関のブザーが鳴った。
「へーい、だれ？」とドア越しに訊くと、
「あ……、あの……」と申し訳なさそうな口調の声が返ってきた。
（なんだ、シゲちゃんか）
小梅がドアを開けると、繁蔵はモジモジしながら立っていた。

「なにか？」
「あ……、あの……」
小梅の心にまたイライラする気持ちが沸き起こってきた。そして、繁蔵の背中に大きなぜんまいのねじをブッ刺して、切れ掛かったぜんまいを巻き上げてやりたいなどと考えていた。
「私、テレビ見たいから早くして！」
「すっすいません！」と繁蔵は謝り、慌てた様子で、小さな白い手提げ袋を差し出してきた。
「なに？」
「あっあの！　お返しです」
「は？」
「あっあの、誕生日プレゼントの」
「いいわよ、そんなの」
「いえ！　お願いします！　受け取ってください！」
このときは、繁蔵があまりにも、必死に頼むので、小梅は仕方なさそうにそれを受け取った。すると繁蔵はほっとしたように顔を緩ませた。
「悪いわね」
「いえ！　あの、誕生日おめでとうございます！」
「へっ？」
「それではおやすみなさい！」
「ちょっと！」
小梅が止めようとするのを無視して、繁蔵は自分の部屋に入っていった。
（ええ！　なんで私の誕生日知ってんの？）
小梅はなんとなく不気味に思いながらも、繁蔵からのプレゼントを開けてみて目を剥いた。
「げげ！　ティファニーじゃん！」
おそらくは二十万円は下らないだろうと思えるダイヤがちりばめ

られたピアスだった。
「すっげー！　シャチホコキティーがティファニーに化けちゃったよ」
小梅は興奮しながらピアスを眺めて、先輩の西田に心の中で礼を言っていた。

＊

窓から入る暖かい春の風がカーテンを揺らしている。繁蔵はその窓の下の机に向かって胡坐を組み、原稿用紙にペンを走らせていた。
『小梅さん、小梅さん。あなたはどうしてそんなにも可憐で美しく、それでいて健康的でパワフルで……』
「ぐわああ！」
繁蔵は原稿用紙を思いっきり丸めてゴミ箱に向かって投げ飛ばすと、大きく溜息をついた。そして、机の上に置いてあるキーフォルダーを見つめた。
繁蔵が家族や親戚以外の女性から誕生日プレゼントを貰ったのは、これが初めてだった。それが繁蔵にとって憧れの小梅だったことで、繁蔵はますます小梅への思いを募らせていた。
繁蔵はキーフォルダーを部屋の鍵に取り付けて微笑むと、「よし！」と気合を入れなおすように声を出して、新しい原稿用紙に小説の続きを書き始めた。
繁蔵は小説家を目指していた。今は大手の出版社の新人賞を目指して、ミステリー小説を書いていた。締め切りまで後一ヶ月くらいしかない。
『私……、五郎ちゃんが好き……。俺も……、小梅さんが好きだ……。小梅さ……』
「ぐおお！」
去年の春に小梅が越してきてからというもの、原稿用紙に向かうと直ぐに彼女のことで頭がいっぱいになって、なかなかペンが進ま

ないでいた。繁蔵はペンを放り投げて、ごろりと床に寝転んだ。
『もっしもーし！』
隣の部屋から小梅の声が聞こえてくると、繁蔵は飛び起きた。
このアパートは壁が薄いのか、それとも小梅の声が大きすぎるのか、隣の話し声が聞こえてしまう。
繁蔵は聞いてはいけないと罪悪感を感じる一方で、聞こえてきてしまうのは仕方がないと開き直る一面もあり、ついつい聞き耳を立ててしまっていた。
『小梅でーす！　ラーメンライス一丁よろしく！』
小梅が夕飯の出前を注文する声が聞こえてきた。彼女の休日の夕飯は必ずラーメンライスだった。
（もっと野菜を取らないと）と繁蔵は思いながら立ち上がった。

『小梅さーん！　珍珍軒でーす！』と外から出前が届いた声が聞こえてきた。
「よし！　間に合った」と繁蔵は思わずガッツポーズをして部屋を出た。
繁蔵は小梅の部屋の前に立ち、深呼吸してドアの横のブザーに指を掛けた。そして、唾を飲んで押した。
『へーい、だれ？』
「あ……、あの……」
少し間をおいてドアが開いた。
（ああ……、今日も美しい……）
繁蔵は思わず心の中で溜息を漏らした。
「なに？」という小梅の怪訝そうな表情を見て繁蔵は我に返った。
「あっ！　あの、これ作りすぎてしまって」
繁蔵は小梅に野菜を取らせるために、サラダとサトイモの煮っ転がしを差し出した。
「ああ、いつも悪いわね。一人暮らしで自炊すると、そうなのよね」と言いながら、小梅は繁蔵が作った料理を受け取った。小梅が出前

を注文するたびに彼女に料理を作って食べてもらう。それが最近の繁蔵の、ささやかな楽しみになっていた。
部屋に戻ると、（ああ……、小梅さんも今これを食べているのか……）などと思いながら、繁蔵はサトイモを口に入れた――。

＊

今日は近くの中央公園で花見をやっていた人達が多かったらしく、酔っ払った客で店の中がごった返していた。繁蔵がくたくたになった足を引きずるようにアパートに帰ってきて部屋の鍵を開けていると、突然小梅が何かに怒りながら部屋から出てきた。
「あ……、あの……」
「ん？　ああ、三井さんこんばんわ」
「こ……、こんばんわ。ど……、どうかされたんですか？」
「風呂が壊れちゃってさ、入れないのよ」と小梅は自分の部屋を睨みながら言った。
「あ……、あの……」
「ん？　なに？」
「あの……、よかったら、ウチのお風呂使ってください……」
繁蔵は言い終わると、心臓がバクバクしている胸を押さえた。
「ほんと！　悪いわね、助かるわ」
あっさりと受け入れた小梅に、繁蔵はひっくり返った声で礼を言った。
「はい！　ありがとうございます！」

繁蔵はぜんまいが電動モーターに変わったかのような勢いで必死に風呂を磨いて、湯を沸かした。風呂が沸く間に部屋を片付け手際よく掃除をした。そして、風呂が沸いて小梅を呼びにいくと、暫くして彼女が部屋に来た。
小梅が部屋に入ってくると、繁蔵は目を潤ませていた。

「覗いたりしたら、ボコボコだからね。私、空手五段だから」
「そんなこと、しません！」と繁蔵が真っ赤な顔で言うと、小梅はにこりと口元を緩めて脱衣所の中に消えた。
風呂の中から音が聞こえてくるたびに、あらぬ妄想が繁蔵の頭の中に沸き起こってきて、繁蔵はそれをかき消すのに必死になっていた。
「ああ、さっぱりした！」と言いながら小梅は風呂から出てきた。
湯上りでほんのりと色づいた小梅の頬を、眩しそうに見つめた後繁蔵は、「あ……、あの……、今、ビールをお持ちします」と言って立ち上がった。すると、「あら、悪いわね」と言って、小梅は部屋のテーブルの前に胡坐を組んで座った。
「テレビつけていい？」
「はい！　どうぞ！」
小梅はリモコンでチャンネルと色々と変えて、音楽番組のところで止めた。
繁蔵は小梅の横に正座すると、ぼんやりとテレビを見ている彼女の前にグラスを置いてビールを注いだ。それを小梅は一気に飲み干して、口の周りについた泡を首に掛けていたタオルで拭った。繁蔵は直ぐに黙ってビールを継ぎ足した。
「三井さんて、小説かなんか書いてんの？」
小梅はグラスを持った手の小指で、窓際の机を指差して言った。
「は……、はい……」
「へえ、本とか出してんの？」
「いえ、まだです。いつかは出せたらいいと思うんですけど……」
「ふーん、どんな小説？」
「今は、ミステリーを書いています」
「ふーん」と言って小梅はまたテレビに目を向けながらグラスに口をつけた。
すっぴんにもかかわらず、きめの細かいやわらかそうな透き通った肌の横顔を、繁蔵は眩しそうに目を細めて見つめた。

「松本さんは、楽器がお好きなんですね」
「えっ？」小梅は不思議そうな顔を繁蔵に向けた。
「あ……、あの……、ベースって言うんでしたっけ……」
「えっ？　ああ、聞こえる？」
「はい……」
「ごめんなさい、うるさくて」
「いえ！　そんなんじゃないです。大丈夫ですから……、はい……」と言って俯いた繁蔵を見て小梅はにこりと微笑むと、残りのビールを一気に飲んで立ち上がろうとした。
（もう、帰ってしまう……）と繁蔵ががっかりしていると、小梅の携帯電話が鳴った。
「はい、もしもし？」
小梅はまた胡坐を組んで電話に出た。
「えっ！　はい！　松本です！」と小梅は突然はきはきとした口調になって正座した。そして、「はい！　あっ！　ありがとうございます！」と何度もお辞儀をしながら礼を言っていた。
電話を切ると彼女は、携帯電話の液晶画面を見つめながら小さく震えていた。そんな小梅に繁蔵は、心配そうな表情で声を掛けた。
すると、小梅はゆっくりと繁蔵に顔を向けた。きつく閉じた口元が微かに震えているようだった。目が少し潤んでいる。
繁蔵はますます心配になって、事情を訊こうすると、「やったー！」と小梅は万歳をして叫んだ。
繁蔵が度肝を抜かれて唖然としていると、
「シゲちゃん！」と言われて、繁蔵の心臓はバクンと大きく動いた。
「へっ？」
「やったのよ！」
「へっ？」
「通ったの！」
「へっ？」
「コンテストの一次審査！　パスしたのよ！」

「ほんとですか！」
繁蔵には何のコンテストなのか分からなかったが、彼女の尋常じゃない喜び方をみて、繁蔵の心にも嬉しさがこみ上げてきた。
「本当よ！」と小梅が叫んだかと思った次の瞬間――。
（ひええ！　彼女が僕を抱きしめて――。顔がおっぱいの間に――。刺激が……、強すぎる！）
繁蔵は小梅に抱きしめられて、全身の力が抜け、へろへろになってしまった。
「シゲちゃん！」と小梅は腰抜けになっている繁蔵の両肩を掴んで、ブンブンと身体を揺すりながら叫んだ。
「ひゃ……、ひゃい……」
「お祝いよ！」
（お祝い……、彼女と二人でお祝い……）
繁蔵の身体にみるみると力がみなぎってきた。
「はい！」と繁蔵は返事をして、勢いよく立ち上がった。
「小梅さん！　お酒買ってきます！」
「おー！　買ってこい！」
「はい！」とまた繁蔵は元気よく返事をして部屋を飛び出した。

繁蔵が両手に酒やつまみが沢山入った袋をぶら下げて帰ってくると、繁蔵の部屋の中がなにやら賑やかだった。
恐る恐る繁蔵がドアを開けてみると、小梅意外に女性が一人と男性が三人部屋の中にいて、わいわいと雑談していた。
「おー！　シゲちゃん！　早く！」
玄関でぼんやりしていた繁蔵に、小梅は手招きしながら声を掛けた。
「はっ、はい！」
繁蔵は慌てて部屋の中に入り、酒の準備を始めた。
酒が手元に渡されると、繁蔵を無視して宴会が始まった。
一体全体ここに集まっている人達がどういう人達なのか、繁蔵は

不思議に思いながら酒やつまみを振舞っていると、玄関のブザーが鳴った。
繁蔵がドアを開けると、「お待たせしました、特上寿司十人前でーす！」と寿司の出前を渡された。
繁蔵が思わずそれを受け取ると、
「シゲちゃんご馳走様！」と言って、小梅は寿司を奪っていった。
繁蔵が呆気に取られて寿司に群がっている皆を見ていると、
「一万八千円になります」と後ろから言われた。繁蔵は顔を引きつらせながら金を支払った。

結局繁蔵には何の集まりか分からないまま、皆酔いつぶれて雑魚寝を始めた。時刻は深夜の二時を過ぎていた。
繁蔵は皆に毛布やタオルケットを掛けてあげ、洗物を始めた。
いびきと歯軋りと寝言を聞きながら、洗物をしていると、誰かが後ろから抱き着いてきて繁蔵はハッとした。
背中にやわらかいものが二つ押し当てられている。繁蔵の心臓はバクバクと激しく打ち始めた。
「シゲちゃんて……、いい人だね……」
（こ……、小梅さん……）
繁蔵は声が出せなかった。
「夢だったの……」
「夢？」耳元で囁いた小梅の言葉に繁蔵は訊き返した。
「今回でもう最後にしようって、みんなと決めてたの……」
今日繁蔵の部屋に集まったのは、小梅のバンドのメンバーだそうだった。小梅たちは毎年行われている大手レコード会社主催のコンテストに、五回目にしてようやく一次選考のデモテープ審査に合格したということだった。
有名なミュージシャンを何人も発掘しているそのコンテストのことは、あまり音楽に興味のない繁蔵も知っていた。
小梅たちの夢はプロのミュージシャンになることで、そのコンテ

ストで全国大会まで進み、ある程度の評価を得られるかどうかで、自分たちがバンドを続けていくかどうか、決めようとしていた、ということだった。
「松本さんだったらきっとプロになれます」
繁蔵がそう言うと、「ありがとうシゲちゃん」と小梅は繁蔵の耳元で呟いて離れ、部屋の隅に寝転んでいびきをかきはじめた。
繁蔵は小梅に毛布を掛けてあげ、愛おしそうに彼女の寝顔を見つめていた。そして、自分が小梅の夢の実現のために出来ることは何もないけれど、せめてその夢が叶うように、毎日祈り続けていこうと考えていた――。

＊

午後八時、小梅はアパートの横の階段を、手すりに手をついてだるそうに上っていった。
「あー、やっと家に着いたー」
昨晩から長距離の配達を終え、ようやくの帰宅だった。
部屋の鍵を開けていると、繁蔵の部屋のドアが開いて、「三井さん、それじゃあどうもご馳走さま」といいながら、母親が出てきた。
「えっ？　お母さん、そんなところで何してんの？」
「あんたがなかなか帰ってこなくて、外で待ってたら、三井さんが夕飯を作りすぎちゃったから食べていきませんかって言うからさ」
「ええ！　何ずうずうしく夕飯なんかご馳走になってんのよ！」
「だって、三井さんが……」
「いいから、入んなさいよ！」
小梅はぷりぷりと怒りながら母親を自分の部屋へ押し込んだ。
母親は部屋の中へ入ると、ちゃぶ台に向かって座り、部屋の中をしげしげと見渡している。小梅は台所でお茶を入れながら、久しぶりに会った母親の背中をじっと見つめた。一年前に家を飛び出して、一度も家には帰っていなかった。母親はなんだかやつれているよう

で、家のほうがうまくいっていないんじゃないかと心配しながら、突然母親が自分に会いに来たことに、不安な気持ちがよぎっていた。
小梅は母親にお茶を出すと、向かい側へ横を向いて座り、テレビをつけた。
「三井さん、お料理が上手でね」
「やめてよね、恥ずかしい」
小梅はテレビを見ながら言うと、ちらりと母親を横目で見て、「で、何の用？」と訊いた。
「ああ……」
「……なによ」
「あの……」と母親は上目遣いで小梅の表情を探るように見てから、持って来た手提げ袋の中に目をやった。
「これなんだけどね」
「嫌よ！」母親が手提げ袋の中から取り出したものを見た途端、小梅は母親に背を向けて膝を抱えた。そして、嫌な予感が的中したと思った。
「ちょっと、ちゃんと見てから言ってよ」
「冗談じゃないわよ！」
「いや、ほんといい話なんだよ」
「ふざけないでよ！　私、まだ結婚なんてしたくないから！」
「お願いよ小梅、見るだけでもいいからさ」
「見る必要なんてないわよ！　私、絶対お見合いなんてしないから！」
「別にお見合いしなくてもいいのよ。小梅も知ってる人で、相手の方もね、小梅のことをよく知ってて、小梅なら是非にって言ってくれてんのよ」
「知ってる人？」小梅は顔を母親に向けた。
「そう、ほら！　池辺（いけべ）さんの息子さん」
「えっ！　池辺って、まさか、おさるのこと！？」
「おさるなんて、そんな言い方するもんじゃないよ！　勝（まさる）さんでし

ょ！　社長さんの息子さんなのよ！　あそこの会社の跡継ぎなのよ！」
「冗談じゃないわよ！　誰があんなヤツと――。絶対、嫌だから」
小梅はまた母親に背を向けた。
「なんで……、小梅……、お願いよ……」と母親は小梅の背中に拝むように手を合わせていた。
「なんで、そんなに必死になるのよ」
母親は小梅の言葉に答えずに俯いた。
「なんでよ！」
「あの……、お父さんがね……」
「……、お父さんがなに？」
「もう、すっかり落ち込んでてね……」
「それと私の結婚と、何の関係があるのよ」
「その……、工場が大変なんだよ……」
「そんなの今に始まったことじゃないでしょ？」
「だから、もう限界なんだよ」
「だから、工場と私の結婚と、何の関係があるのよ！」
「だから、あそこの社長さんがね、ウチの借金を肩代わりしてくれるって言うんだよ」
母親の言葉を聞いて、小梅はゆっくりと母親に身体を向けた。
つりあがった小梅の目を見ると、母親は身体を横に向けて俯いた。
「私はね、いい話だと思うんだよ。だって、社長さんの息子さんだよ。将来は社長婦人だよ」と言って母親はちらりと小梅を見ると、また俯いた。
「あんた……、娘を売る気……」
小梅はわなわなと震えていた。
そんな小梅を見て母親は、「お願いだよ、小梅！」と何度も土下座をして言った。
「小梅……、お願い……、工場をね……、お父さんをね……、助けてやって……」

母親は涙を流しながら、手を合わせて小梅に言った。
「何でよ……」
「お願いだよ、小梅……」
「私より……」
「小梅、お願い……」
「ふざけんじゃないわよ！」
小梅は母親の傍へ立ち睨み付けた。
母親は小梅の足に手を添えて、必死に小梅に頼んでいた。
「帰ってよ！」
「小梅！」
「帰れ！」
小梅は母親の腕を掴んで立たせると、外へ押し出した。
小梅が背にしているドア越しに、母親が必死に小梅の名前を叫んでいる。
――暫くして、母親の声が聞こえなくなると、小梅はその場に崩れ落ち、必死に鳴き声を押さえつけていた。

小梅は繁蔵の部屋側の壁際に膝を抱えて座っていた。
直ぐ横のテレビでは、小梅が好きなお笑い芸人がコントをやっている。いつもならその番組を見ながら笑い転げているはずだったろう。でも今の小梅には、そのコントなど全く耳に入っていなかった。
（なんでよ……。信じられない……。いつも私のことなんて何にも考えてない……。もう少しで……。やっと夢が叶いそうなのに……。なんで諦めなきゃいけないの？）
気がつくと母親が帰ってからかなりの時間が立っていた。小梅は携帯電話を取って、弟の雅司に電話を掛けた。
「雅司？」
『ああ、ねーちゃん、どうしたんだよ、こんな時間に』
「あの……」
『何だよ、気持ちわりいな、いつもの元気、ねえじゃん』

「うるさいわね……」
『どうしたんだよ』
「あの、お母さん……、帰った？」
『ああ、帰ってるけど、ねえちゃんのとこ、行ったの？』
「ん？　うん……」
『ふーん――で、なんの用で？』
「ん？　うん……、別に……、帰ってるならいいから……、じゃあ」
『ねーちゃん？』
「えっ？」
『気にすんなよ』
「えっ？」
『どうせ工場のことだろ？』
「えっ？」
『工場なんて、潰しちゃえばいいんだよ、俺、継ぐ気ないし』
「なに言ってんのよ……」
『ねーちゃん、ずっと我慢してたんだからさ、いいんだよ、こっちのことなんて気にすんなよ』
「生意気なこと言ってんじゃないの、じゃあ切るから……」
『んじゃ、元気だせよ』
何か言い返そうと思っていると、雅司のほうから電話を切られた。
　正直に言って雅司のことが気がかりだった。今の状態では、実家は雅司を大学まで行かせることは無理だろう。雅司も音楽好きだ。高校のブラスバンド部で、パーカッションをやっている。雅司は音大に進学して将来はオーケストラで演奏したいと夢見ている。自分は音大に行くことを諦めて就職したが、雅司にはその道に進んでもらいたかった。
『こっちのことなんて気にすんなよ』
　弟の言葉が蘇ってきた――。
雅司は工場を継ぐ気はないと言っていたが、弟はきっと自分の夢のことより親のことの方を心配しているはずだ。雅司はそういう弟だ

と、小梅はよく分かっていた。
（ごめん……、おねえちゃん、何にもしてやれなくて……）
小梅はその晩、膝を抱えたまま一夜を明かした――。

＊

翌日配達を終え会社の事務所に戻ると、先に西田が帰り支度をしていた。
「西田さん今日は早いっすね」
「おう、今日は近場だったからな。ほれ、お土産だ」
西田は例によって小梅にキーフォルダーを渡してきた。
「静岡限定だぜ」
それは茶摘み姿のハローキティーのキーフォルダーだった。
小梅が引きつった顔を上げると、「コンテストの地区大会出場祝いだ」と西田は言って立ち上がり、小梅の肩をポンと叩いて事務所を出て行った。
「これはこれは、愛しい小梅さんのお帰りだ」
小梅はその声を聞いてぎくりとした。
「恥ずかしがってないで、こっち向けよ」
「小梅ちゃん、池辺さんのお坊ちゃまにご挨拶しなさい」
後ろから社長の声が聞こえて、小梅はしぶしぶと振り向いた。
「うーん、相変わらずいい女だ」
小梅よりも二十センチは背の低い池辺は、いやらしい笑みを見せ、顎を撫でるように指を動かしながら、小梅を上へ下へと嘗め回すように視線を動かしていった。
「こんなとこで、なにしてんのよ」
「おいおい、睨むなよ。もうじき婚約する仲じゃないか」
小梅がどなりつけようとすると、池辺は振り向いて、「じゃっ」と、社長に手を上げて挨拶した。そんな池辺に社長はぺこぺことお辞儀をしている。

横を通り過ぎようとする池辺を小梅が横目で睨んでいると、「工場のことは俺に任せろ」と言いながら、彼は小梅の尻を撫で回した。
小梅は目を剥いて拳を振り上げて、怒鳴りつけた。
「さわんじゃねえよ！　このチビザル！」
それを見た社長は慌てて、小梅を後ろから羽交い絞めにして止めた。
池辺はその光景を見ながら、「うきき」と気味の悪い笑い声を漏らし、事務所を出て行った。
（ふざけんじゃねえよ！　誰があんなチビザルと結婚なんかするか！）
小梅がむかむかしながら帰り支度を始めていると、社長が呼ぶ声がした。顔をそちらへ向けると、応接室から社長が手招きしていた。
「あの、そこに座ってもらえる？」
小梅は社長に言われて、ソファーに座った。
「なんすか？」と向かい側に座った社長に、小梅はふて腐れた表情で訊いた。
「あの……、今後のことなんだけどね……」と社長は小梅の表情をちらりちらりと伺うように見ながら言うと、額の汗をハンカチで押さえた。
「はっ？　なんのことです？」
「いや、いつまでもウチに置いておく訳にもいかないもんでね」
「えっ？」
「いやっ！　あの、やっぱりね」
社長は視線を落としてまた額の汗を拭った。
「なんだって言うんすか？」
「いや、あの、池辺さんのところにお嫁に行くとなると、それなりに、その、あの、お料理の勉強だとか、礼儀作法の勉強だとか、いろいろとこれから大変でしょ？」
「ちょっと待ってください！」
「いや、あの、異例なんだけどね、退職金のほうもそれなりに出し

てあげるつもりでいるんでね、あの、本当に小梅ちゃんがいなくなるのは残念なんだけど、やっぱり池辺さんのところにお嫁に行く人を、いつまでもウチみたいなとこでトラックの運転手をやらせている訳にもいかないもんでね」
「クビですか？」
「いや違う！　全然クビじゃない！」
「じゃあ！　なんなんですか！　いっときますけど、私、あんな男と結婚なんてしませんから！」
小梅はそう言うと立ち上がった。
「そんな！　それじゃ困るんだよ！」
「はっ？」
「小梅ちゃんが池辺さんと結婚してくれないと、ウチもちょっと……、あのね……」
「あいつに脅されてんですか？」
「いや、あの……」小梅の言葉に社長はうろたえ始めた。
「そうなんでしょ！？」
「いや、あの……」
言葉に詰まっている社長を見て、小梅は下唇をかみ締めた。
池辺の会社はこの会社の大株主だった。融資も沢山受けていることを小梅は知っていた。おそらく池辺は、自分に花嫁修業をさせるため、社長に圧力を掛けて会社をやめさせようとしているに違いないと小梅は思った。そして、本当に卑劣なヤツだと思った。むかしからそう男だった。この辺りの小さな会社で、池辺の会社の息のかかっていないところはない。池辺の父親は金の力でこの辺りの中小企業を束ねていた。その父親の力を利用して、池辺自信も学生時代は学生たちを束ねるようなヤツだった。池辺は金の力でいうことの聞かない人間はいないと思うような男だった。
しかし、小梅だけは違った。池辺がどれだけ金を使って、小梅を自分のものにしようと企んでも、小梅は池辺の思うがままにはならなかった。高校三年のときに池辺は、一度自分が束ねている不良た

ちを使って、力ずくでものにしようとしたことがあったが、付近の凄腕の女子高生が集まって作った、不良相手に戦う女集団のリーダーをやっていた小梅を、結局ものにすることは出来なかった。とにかく小梅は、池辺のような男が大嫌いだった。

（図々しい、私がいつ結婚するなんて言ったのよ）

「あの……、小梅ちゃん？」わなわなと震えている小梅に社長は声を掛けた。

小梅は目を閉じて大きく息を吸い込み、ゆっくりと目を開けると、社長に視線を向けた。社長は懇願するような目で小梅を見ていた。

「分かりました……」

小梅は社長に向かって静かにそう言った。

社長は小梅の言葉を聞いて、ほっとした表情をすると、小梅の手を取り、何度も礼を言った。

「じゃあ、今月いっぱいと言うことで、いいね？」

「はい」と小梅は頷いて部屋のドアを開けると振り向いた。

「どうしたの？　小梅ちゃん」

「でも私、あいつとは結婚しませんから」

「ええ！」

社長が驚いて小梅の傍へ近づこうとすると、小梅は部屋を出てドアを閉めた。

小梅が出て行った部屋の中で、社長はおろおろしながら手を揉んでいた。

弟の雅司から、父親が首をつって自殺したという電話を受けたのは、小梅が憂さ晴らしに酒でも飲んで帰ろうと、馴染みの居酒屋の暖簾をくぐろうとしたときだった。

小梅はその電話を受けると、直ぐに父親が運ばれたという病院へ、タクシーを使って駆けつけた。

父親の病室のある階へ階段を駆け上ると、廊下の長椅子に弟の雅

司がうな垂れるように座っていた。
「雅司！」と叫んで小梅が駆け寄ると、雅司は顔を上げ、ほっとしたような目を小梅に向けた。
「ねーちゃん……」
雅司の目に涙が滲むのが分かった。
「お父さんは？」
雅司は目を擦りながら鼻を啜ると、小さな声で答えた。
「病室……、今寝てる……」
「お母さんは？」と小梅は、くしゃくしゃになっている雅司の髪の毛を、整えるように撫でてあげながら訊いた。
「家……、ショックで寝込んじゃって……、ゲンさんが付き添ってくれてる……」
「そう……」
小梅は雅司を優しく抱きしめると、背中をぽんぽんと叩いてから振り向いて、父親の病室の前に立った。ゆっくりとドアを開くと、中にはベッドが四つほどあった。どのベッドもカーテンで目隠しされている。
小梅は中へ入り、直ぐ左手のベッドのカーテンを少し開けて中を覗いた。
父親は寝ていた。首が動かないようにギブスで固定されている。
小梅が父親の顔をじっと見ていると、父親はゆっくりと目を開けて、その目を小梅のほうに向けた。
小梅はカーテンの中へ入り、ベッドの横のパイプ椅子に腰掛けた。
父親は真っ直ぐ天井を見つめながら、苦しそうにかすれた声を出した。
「迷惑……掛けたな……」
「喋んなくていいよ、首が痛いんでしょ？」
父親は微かに頷いて、右手を上げ字を書くような仕草をすると、左手でベッドの横のテーブルのほうを指差した。
小梅はテーブルの上に置いてある、メモ帳とボールペンを取って

あげた。
父親はメモ帳に何か書き、小梅に手渡した。
『色々とすまなかった。工場は潰すことにした。小梅は何にも心配することはない。俺は小梅を池辺にやるつもりはない。母さんを許してやってくれ』
小梅が目を向けると父親は、「寝る……」と呟いて目を閉じた。
（お父さん……）
閉じた父親の目から、涙が滲み出るのを見て小梅は、口を押さえて病室を飛び出した。

雅司を連れて実家へ帰ると、居間で工場の職人である、小泉源五郎（こいずみげんごろう）が出迎えてくれた。
「ゲンさんすいませんでした」
小梅は手を突いて、小泉に頭を下げた。小泉は工場の一番古い職人で、父親よりも五歳上だった。
「いやあ、なんてことない……。ほんじゃ、俺もそろそろかえるだに」
小泉はそう言うと、「どっこらしょ」と声を出して立ち上がった。
小梅は玄関で小泉を見送ると、庭の梅の木に目を向けた。
小梅が生まれた年に父親が植えた木だった。一番下の枝が一本折れている。父親の体重を支えきれずに折れたのだろう。
小梅はそのまま庭の向こう側の工場に目を向けた。それほど大きくはないが、金属加工部品の製作を主な仕事とする工場だ。
特に特殊精密加工が得意で、以前は大手メーカーからの注文が絶えることはなく、従業員も大勢いた。
そんな工場を経営していた父親は、この辺りでは、池辺と肩を並べるほどの実力者で、小梅はその父をずっと尊敬していたし、ピアノや琴、クラシックバレーや空手など、小梅がやりたいと言ったことはなんでもやらせてくれる父親が、本当に大好きだった。
ベースを始めたのも父親の影響で、小梅が初めて弾いたベースは、

父親が若い頃に使っていたベースだった。
母親は後妻だった。小梅の本当の母親は、小梅が二歳のときに病死した。父親が再婚したのは、小梅が五歳のときで、突然赤ん坊を抱いた女性を父親が家に連れてきて、今日からお前のお母さんになる人だと父親に言われた。
今の母親をそのときそれほど抵抗なく受け入れることが出来たのも、本当の母親の記憶が殆どなかったことと、赤ん坊の雅司が可愛かったからだ。雅司は父親の子供だった。雅司ができたことで、父親は再婚することを決めた。
小梅が高校に入学するまではよかった。工場の経営も順調で、家族も円満だった。しかし、高校に入学して暫くして、事件は起きた。工場が火事になり全焼したのだ。
火事は火の気のないところから出火していて、出火直後に工場付近で不振人物が目撃されていたことから、放火と断定されたが、犯人は捕まらなかった。
工場の建て直しは直ぐに行われたが、金属の特殊精密加工用の機械を揃えるのに手間取り、営業開始までに時間がかかってしまった。ようやく営業の目途がついた頃には、得意先を池辺の息のかかった工場に奪われてしまっていた。
その頃になってようやく容疑者が浮上した。容疑者は、得意先を奪った工場で働いていた、ブラジル人男性だった。
その男は、容疑者とされて直ぐに、海岸で水死体として発見され、結局いまだに真相は解明されていない。
そして工場のほうは、得意先を奪われ仕事は減り、優秀な職人も、次々に池辺の関係の工場へ引き抜かれていった。
その頃から小梅は池辺に恨みを持つようになり、勝が仕切る不良グループとの対立を深めていった。
それから工場の経営は落ちていく一方だった。小梅の家の家計のほうも悪化していき、不良グループとの喧嘩を繰り返す小梅と、両親との間の亀裂は深まっていく一方だった。

小梅は結局、大学進学を諦めざるを得なくなり、バンド活動に夢を託すようになる。
高校を卒業して一年ほどフリーターをしていたが、その後運送会社へ就職してからは、さすがに暴力事件を起こすようなこともなくなった。しかし、両親とのギクシャクとした関係は改善することが出来ず、結局小梅は一年前に家を飛び出した――。

両親が悪いことは何もしていない――。
小梅は、庭に面した縁側に腰掛けて、梅の木を見つめながら、そんな風に思っていた。
「小梅？」後ろから母親の声がした。
小梅が振り向くと、静かにサッシを開け母親は廊下に正座した。
「具合は？」
「もう……、大丈夫」
母親はそう言うと俯いた。
母親は、先日会ったときよりも、さらにやつれているようだった。
母親が顔を上げてすまなそうな目を向けると、小梅は顔を逸らして立ち上がり、口を開いた。
「私――、結婚するから」
「えっ？」
母親の意外そうな表情をちらりと見て、小梅は、「会社もクビになって、やることないから、いいわ、結婚してあげる。それで、工場もなんとかなるんでしょ？」と言った。
「でも……」と言って母親が立ち上がると、
「そういうことだから、話、進めといて」と言って、小梅は実家を後にした。
小梅が立ち去ると、庭の梅の木折れた枝から、葉っぱが一枚はらりと落ちた――。

＊

繁蔵がアパートの脇の階段のところで、泥酔して寝転んでいる小梅を発見したのは、小梅の父親が首をつって小梅が実家へ帰ったあくる日の夜だった。
「小梅さん！　大丈夫ですか！？」
「だー！　うるせえ！　誰だ！　こらー！」
「ぐるじい……、はなじで……」繁蔵は小梅に首を締め上げられて、顔を真っ赤にしながらもがいた。
繁蔵が白目を剥いて落ちそうになると、ようやく小梅の手が緩み、繁蔵は苦しそうに肩で息をした。
下で仰向けに寝転んでいる小梅を見ると、小梅はいびきをかいて寝ていた。
繁蔵は小梅を担いで、必死に自分の部屋に連れて行った。
部屋の真ん中に布団を敷くと、小梅をその上に寝かせて、毛布を掛けようとした。すると、突然小梅に下から抱きつかれた。
「フガ！　小梅さん！」
繁蔵は今度は、小梅の大きなおっぱいの間に顔を押し付けられて、またじたばたと苦しそうにもがきだした。
繁蔵が必死に顔を上げて息を吸い込むと、
「シゲちゃん……、抱いて……」と小梅は呟いた。
「へっ！？」
「シゲ！」と小梅は叫んで、繁蔵を布団へ押し倒すと、繁蔵のシャツのボタンを外し始めた。
「ちょちょちょちょ！」
繁蔵は驚いて、うつ伏せになって身を硬くした。
「なによ！　意気地なし！　チビ！　インポ！」
「小梅さん……、一体どうされたんですか？」繁蔵がちらりと小梅を見て言うと、小梅はわあわあと泣き出した。
「小梅さん？」繁蔵は慌てて起き上がり、小梅の前に正座すると、小梅の顔を心配そうに覗きこんだ。

繁蔵は小梅が泣き止むまで、静かに小梅を見つめていた。
「小梅さん？」小梅が少し落ち着くと、繁蔵は優しく声を掛けた。
「私……、結婚したくない！」と小梅は叫んで繁蔵を抱きしめると、またわあわあと泣き出した。
小梅の大きな胸の間に顔を埋め、繁蔵は小梅が気が済むまで泣かせてあげた。
「シゲちゃん？」小梅は泣き止むと、繁蔵を放して、彼の顔をじっと見つめた。
（小梅さん……）
小梅のとろんとした目で見つめられ、繁蔵は胸の奥がぐっと締め付けられるような感じがした。
小梅の顔がだんだんと近づいてくる。
（ああ……、憧れの小梅さんの唇が……）
と思った途端、小梅は目を剥いて口を押さえた。
（まさか！）繁蔵は慌てて立ち上がった。
「吐く！？　気持ち悪いんですか！？」
小梅はうんうんと頷いている。
繁蔵は慌ててゴミ箱を取り、小梅に差し出した。
繁蔵は、こんなにも荒れている小梅を心配しながら、その晩、小梅が眠りにつくまで優しく介抱してあげた。

＊

小梅は昨日で運送会社を退職し、引越しの準備をしていた。実家へ戻るため、アパートを引き上げるためだ。しかし、その作業は全くはかどらないでいた。溜息をついて窓から見える空を見上げた。空は突き抜けるような青空だった。
また溜息をつく――。
（みんなになんて言おう……）
まだ、バンドを辞めることを告げていなかった。ようやくコンテ

ストの地区予選に出場が決まったのに、もうバンドを続けることが出来なくなってしまった。
小梅の心の中は、今日の天気に反して、どす曇だった――。
小梅がまた溜息をついたときだった。玄関のブザーが鳴った。小梅が玄関のドアを開けると、繁蔵が立っていた。
「ああ、三井さん何の用？」
「あの……、僕……、今日で引っ越すことになりまして……」
「あら、そうなの？」
「はい……、もう荷物も運び終えまして……」
「そうなんだ、私も明日引越しなのよ」
「はい……」と言って、繁蔵は俯いたまま黙ってしまった。
「どうしたのよ」と小梅が呆れたような表情で言うと、「あの……、これ……」と言って繁蔵はお守りを差し出した。
「なにそれ？」
「あの……」
「なによ、私、忙しいから早く言って」と小梅が少しきつい口調で言うと、繁蔵は小梅にお守りを握らせ、そのまま小梅の手を握り締めて真剣な眼差しを小梅に向けた。そして、
「小梅さん！　諦めないでください！」と叫んだ。
繁蔵の剣幕に小梅は身を硬くして、思わず後ずさってしまった。
「へっ？」
「小梅さんなら、絶対にプロになれます！　夢を……、夢を諦めないでください！」
小梅が唖然としていると、繁蔵は走り去っていった。
小梅は暫く呆然とした後、繁蔵が手渡したお守りを見た。
（なんで、合格祈願？）
繁蔵の気持ちがよく分からなかったが、それをポケットに入れてドアを閉めた。
部屋に戻ってＣＤを整理していると、ＣＤに混ざってコンテストに応募した曲を録音したＭＤが出てきた。

小梅はＭＤを置くと、ベースを手に取った。
部屋の中に、小気味よいチョッパーベースの音が鳴り響いた――。
（駄目だよ……、シゲちゃん……、もう、諦めるしかないのよ……）
小梅はベースを床に置いて、膝を抱えた。

＊

小梅が実家へ帰って数日が立っていた。丁度五月の連休が終わった、最初の平日の昼過ぎだった。
小梅が居間でぼんやりとテレビを見ていると、母親が横に座った。
「池辺さんも忙しい人でね、結納は今月の最後の日曜日にして欲しいって言うんだよ」
小梅は母親の言葉を聞くと、壁のカレンダーに目を向けた。
五月の最後の日曜日、その日はコンテストの地区予選の日だった。
小梅はカレンダーから目を逸らし、溜息をつくと居間を出て、庭へ出るサッシを開け、縁側へ腰を下ろした。
もう、メンバーにはバンドをやめることを話していた。メンバーは皆残念がったが、小梅の事情を察して理解してくれた。
小梅は代わりのメンバーを見つけて地区予選に出場して欲しいと、必死に皆に頼んだが、メンバーたちは小梅意外のベーシストとはやる気がないと言って譲らなかった。
「もともと、無理だったんだよ。俺らじゃプロでやってけない。今回はたまたまラッキーだっただけだ。小梅がやめるなら、俺もやめるよ」
バンドのギターの男の言葉に、他のメンバーは皆頷いていた。
そんなことを思い出しながら、うな垂れて地面を行進している蟻の行列をぼんやりと見つめていると、父親が息を切らして駆け込んできた。
「どうしたのよ、お父さん」
目の前で、膝に手をついて肩で息をしている父親に小梅は訊いた。

「大変だ……」父親は暫くしてようやく口を開いた。
「なに？」
「これ……」と言って、小梅に一枚の紙を手渡した。
何だろうと思いながら小梅が見ると、それは小切手だった。金額を見て小梅は目を剥いた。
「五千万円て、なによこれ、どうしたの？」
「東京の医療機器メーカーがウチに仕事をくれるって言うから、会いに行ったら直ぐに契約してくれて、それで前金としてそれをくれたんだ」
「うそ！」
「本当だ！」
小梅は顔をほころばせながら、小切手を見つめた。
「小梅！」父親に呼ばれて、小梅は顔を上げた。
父親は小梅の両肩を掴んで、
「もう、結婚のことはなしだ！　池辺のヤツのところにも、婚約解消するって言ってきた！　あんなヤツのところには、お前をやらないからな！」
小梅は黙って頷いた。嬉しさのあまり、声が出せなかった。
涙を堪えている小梅の頭を、優しく包み込むように父親は小梅を抱きしめた。

―2―

春は欲情の季節。盛りのついた雄と雌は、ただひたすらに相手を求め、一つになろうとする。

人間だって例外ではない。路地裏で猫が交尾をしている光景をちらりと見て、佐山（さやま）しおんはそんなことを考えながら、彼氏の腕をしっかりと抱きしめて歩いていた。

彼氏の名前は渡辺悟（わたなべさとる）。学校は違うが、二人とも高校三年生だ。

日曜日の夕方、バイトを終え、二人でファミリーレストランで食事をしているときだった。熱々のドリアをスプーンですくって、ふうふうと息を吹きかけて冷ましていると、

「ラブホテル行かない？」と彼氏が言った。

しおんはふうっとやった口のまま暫く固まっていたが、徐々に照れた表情に変え、小さく頷いた。

彼氏とは、高校一年生のときから付き合っている。もうセックスも経験済みだ。だから、ラブホテルへ行くことには抵抗がない。でも、実際に行くのは初めてだった。彼氏の両親は共働きで普段家にいないので、いつもは彼氏の家でしていた。

（ラブホかあ……）

つい先日、クラスメートからラブホテルへ行った話しを聞いて、それから自分も一度は行ってみたいと、しおんは思っていた。でも自分からは言い出しづらかったので、彼氏のほうから誘ってもらえてよかったと思った。

「ここでいい？」

ラブホテルが数件立ち並ぶ道に入って暫くすると悟が言った。

しおんはホテル街への道に入ってから、ずっと俯いて歩いていた。彼女は悟が指差すホテルを見ようともせずに、うんうんと二度ほど頷いた。

「二つしか空いてないなあ」
悟は部屋の様子を写した写真付のパネルを見ながら言った。その中の二つの部屋だけが、裏からライトがついて照らし出されている。
「ここでいい？」
悟が指差したのは、部屋の真ん中に丸いベッドがある部屋だった。
いかにもラブホテルらしい部屋を見て、しおんは唾をごくりと飲み込むと、
（あのベッドって回転しちゃったりするんだろうなあ）
などと考えながら頷いた。
部屋に入ると、ホテルへ入るまでは大人しかったしおんが急にはしゃぎだして、ガラス張りで中がすけすけの風呂場や、ベッドの上の天井が鏡張りになっているのを見ては、きゃあきゃあと声を上げながら、興味しんしんといった感じで、部屋の中を見て回った。
ベッドに乗って、沢山ついてるボタンを操作してベッドを回転させたり、照明の明るさを調整したりして遊んでいるうちに、だんだんと二人ともその気になってきたようで、どちらからともなく服を脱ぎだし、回転するベッドの上で二人とも裸で絡み始めた。

悟が自分の中を行ったり来たりするたびに、しおんはどんどんと高ぶっていく。そして、彼がしおんの中でびくびくと小刻みに動いた途端、しおんは腰を痙攣させながら悟にきつくしがみついた。
（何て素敵なんだろう）
最近になってようやく、彼と一つになれる喜びが分かってきた。
「大好き。好きよ、悟……」
「俺も……」
終わってから暫く抱き合っている時間が、しおんはたまらなく好きだった。

その後、ガラス張りの風呂場に入り、泡まみれになりながら二人でお互いを洗い会っていると、悟がまた興奮してきて、そのまま し

おんの中に入ってこようとした。
「だめよ、ゴムつけなきゃ」
悟は不満そうな顔を見せたが、しおんに泡まみれの手で擦り上げられると、辛そうでもあり、嬉しそうでもある、複雑な表情を見せた後、うっ！　と低く呻いて達した。

悟はバンドをやっていた。パートはドラム。しおんも悟に影響されて、学校のブラスバンド部へ入り、パーカッションを担当している。主なパートは小太鼓だ。
悟は将来ミュージシャンになることを目指している。そんな悟をしおんは、彼の妻になることを夢見ながら応援している。
学校が違うので、平日は殆ど会うことが出来ない。その代わり、土曜日の夕方からと日曜日の午前から夕方まで、ＣＤやビデオのレンタルショップで一緒にアルバイトをしている。
春休みが終わった最初の土曜日、しおんはバイト先近くのハンバーガーショップで悟と落ち合って昼食を一緒に取ると、そのままデートを楽しみ、二人でバイト先へ向かった。
春休みは終わっているのに、この日は家族連れの客が多かった。子供向けのアニメのＤＶＤの貸出を終えて、しおんが次の客を案内しようと思った時だった。
「松本君！？」
次の客が、同じブラスバンド部員で同級生の松本雅司で驚いた。彼もパーカッションを担当していて、主なパートはティンパニーだ。
「よう、ここでバイトしてたんだ」
と言いながら、雅司はしおんの前にクラシックオーケストラのＣＤを三枚置いた。
「おっ！　雅司じゃん、久々だなあ」
横からの悟の声に、しおんは驚いて訊きかえした。
「えっ！？　知り合い？」

「中学が同じだったんだよ。俺、こいつにドラム教えてもたったんだぜ」と悟は雅司を指差しながら言った。
「そうなんだ」としおんは頷いて言うと、雅司の方に顔を向けた。
「松本君もドラムやってんだ」
「今はそんなに叩いてないよ。たまに、ねーちゃんのバンドの練習見に行ったときに、ちょっと叩いてるだけ。俺の生きがいはティンパニーだから」
雅司はそう嬉しそうに言い、貸出を終えたCDが入ってる青いレンタル袋を持つと、店を出て行った。

バイトを終え、桜の咲き誇る川沿いの道を、しおんは悟と手をつないで、ぶらぶらとゆっくり歩きながら家に向かっていた。
悟は夜桜を眺めながら言った。
「今度のコンテストは、結構自信あるんだ」
「うん。あの曲なら絶対受かるよ」
しおんが悟の手を、少し力を込めて握って言うと、悟はしおんに目を向けて微笑んだ。
「ねえ、コンテストに受かってプロになったら、東京に行っちゃうの？」
悟は顔を正面に向け、暫くしてから頷いた。そして、「どっちにしろ、卒業したら東京に行くから」と言った。
（行かないで……）
そう、しおんは言いたかったが、口をきゅっと閉じて悟の手を放し、彼の腕にしがみついた。
「しおんもこいよ」
悟るの言葉を聞いて、しおんは顔を上げた。
切なさが滲み出ているような表情のしおんを見つめ、「東京で一緒にくらそ？」と悟は言った。
しおんは悟の腕を強く抱きしめて、何度も頷いた。そうしながら嬉しさをかみ締めていた。ずっと悟と一緒にいたい――。それ以外、

今のしおんの心の中にはなかった。

＊

放課後の音楽教室の中から、タラタタ、タラタタという、小気味よい小太鼓の音が聞こえる。

雅司は感心したような表情を見せると、教室のドアを開けた。

小太鼓の練習に励んでいるしおんに、雅司は声を掛けた。

「お姫様、なにかいいことありました？」

しおんは太鼓を叩く手を止めると、「まあね」と言いながら、右手のスティックをくるくると器用に回した。

「おっ！　スティック回し、上手くなったじゃん」

「まあね」と言いながら、しおんはまた自慢げな表情を見せてスティックを回した。

雅司は悔しそうな表情をして、スティックを手に取ると、彼は両手で回し始めた。

どうだ、という表情でスティックを回している雅司を見て、しおんはむっとした表情を見せると、右手のスティックで雅司の脇腹を軽くついた。

「だあ！」と声を上げて、スティックを落とした雅司を見て、しおんはげらげらと笑い転げた。

雅司はむっとした顔をして、落としたスティックを拾うと、にやりと嫌らしい笑みを漏らして、しおんの胸にスティックの先を近づけていった。

「やめて！　エッチ！　セクハラよ！」

しおんは胸を両手で隠して逃げ惑った。

「で、なに、いいことあったんだよ」

雅司はしおんを追うのをやめると言った。

「ちょっとね」としおんは一言だけ言って、また小太鼓に向かった。

雅司はつまらなそうな表情を見せると、しおんの後ろで、ティン

パニーの準備を始めた。
「松本君はさあ、卒業したらどうするの？」
ティンパニーに耳を近づけ、軽く叩きながらチューニングをしている雅司に、しおんは訊いた。
「ん？　うーん」と雅司はティンパニーのチューニングをしながら言っただけで答えなかった。
「別に関係ないか」としおんが呟いて、小太鼓に向きを変えた。
「今、家が結構大変でさ……」
雅司はしおんの背中に向かって呟いた。
「家？」しおんは雅司のほうに振り返って、怪訝そうな表情を見せた。
雅司はティンパニーを何度か叩いてみせると、しおんに愛想笑いのような表情を見せて、「家の工場がつぶれそうなんだ……」と言った。
「そうなの……」しおんは雅司の言葉を聞くと、寂しげな表情を見せて俯いた。
そんなしおんを見て雅司は微笑んだ。
「でも俺、工場継ぐ気ないから、どうでもいいんだけどさ」と言って、ティンパニーを力強く叩き始めた。
楽しそうにティンパニーを叩いている雅司を見つめ、しおんの表情も次第に明るさを取り戻し、雅司のリズムに合わせて小太鼓の音を刻んだ。

週が変わった月曜日の放課後、雅司が部室のドアを開けると、しおんがの奥のドラムセットに座ってぼうっとしているのが見えた。
「今日は全然元気ないじゃん」
雅司がしおんの横に立って言うと、しおんはゆっくりと雅司の方に顔を向けていき、そして俯いた。
「へっ？　どうしたの？」

しおんは小さな声で呟いた。
「悟のバンドが、コンテストの一次審査に受からなくて……」
「そうか……」と雅司が呟くと、しおんは小さく頷いた。
肩を落としているしおんを見て雅司は微笑むと、彼女の肩をぽんぽんと叩いて、「悟のほうが落ち込んでんじゃないの？　あいつのこと励ましてあげられるの、佐山だけじゃないの？」と言った。
しおんはハッと目を見開くと、雅司を見上げて力強く頷いた。
部室を飛び出していくしおんを見て雅司は微笑むと、彼女の変わりにドラムセットに向かい、激しくドラムを叩き始めた。

＊

悟はしおんを寂しそうな表情で出迎えた。
悟の部屋に入っても、悟は好きなバンドのライブビデオをぼんやりと見ているだけだった。
「悟……、あのさ……」
悟にはしおんの声など届いていないようだった。
しおんはそんな悟を見て寂しそうに俯いた。
「俺ら……、才能ないんだよ……」
悟の言葉にしおんは、驚いたような表情をして顔を上げた。
「そんなことないよ！」
「そうなんだよ！」
悟は顔を歪めてテレビを消すと、リモコンをテレビに向かって投げつけた。
床に落ちたリモコンから零れ落ちた乾電池が、ころころと床の上を転がっていくのを、しおんは寂しそうな目で見つめていた。
あいつのこと励ましてあげられるの、佐山しかいないんじゃないの――。
雅司の言葉が蘇ってきた。
しおんはすくっと立ち上がると、うな垂れて床を見つめている悟

の前に立った。
悟が見つめている床の前に立つしおんの足元に、彼女の制服のスカートがばさりと落ちた。
悟が驚いた顔を上げると同時に、制服を脱ぎ捨てたしおんが悟に抱きついた。
「抱いて……、悟……」
ブラジャーを取り去った白い乳房に、悟は顔を近づけていく。
子供のようにしおんの乳首に吸い付く悟の頭をしおんは優しく抱き、
「悟……、忘れるのよ……、嫌なことは全部、私が忘れさせてあげる……」と囁いた。

＊

駅前の中央公園の中の、野外音楽堂の回りの林は、新緑の若葉に覆われていた。
もう直ぐゴールデンウィークだった。
しおんはその林をすがすがしそうな表情で眺めながら、悟との連休の過ごし方をウキウキとした気持ちで考えつつ歩いていた。
しおんは公園を出ると、真っ直ぐ駅のほうに歩き、駅ビルの中に入っていった。
エスカレーターで三階まで登ると、目の前にある『サニーレコード店』の中へ入っていった。
「レインボーなんて渋いじゃん」
一枚のＣＤを手にとって見ていると、後ろから突然話しかけられて、驚いて振り向いた。
「松本君！」
雅司はにっこりと微笑むと、しおんの手からＣＤを取って眺めた。
「俺、レインボーなら『ＳｉｎｃｅＹｏｕＢｅＧｏｎｅ』が好き」
と雅司はしおんにＣＤを返しながら言った。

「悟はアイサレンダーが一番好きだって」
「ふーん、ひょっとしてあいつにあげんの？」
「そう！　誕生日プレゼント。私と悟って誕生日が同じ日なんだよ」と、しおんは嬉しそうな顔で、ＣＤを雅司に見せながら言うと、「へえ、じゃあ俺とも同じ日じゃん」と雅司は言った。
「うそ！」と、しおんが目を丸くして言うと、「ほんと。じゃあ、俺は『のだめオーケストラ』がいい」と、雅司はしおんに手を差し出して言った。
　しおんは口を尖らせてぷいっと顔を横に向けると、「早く誕生日プレゼント買ってくれる彼女が出来るといいね」と言って、レジに向かった。

今日、五月三日の憲法記念日は、しおんと悟の誕生日だった。この日は動物園でデートをした後、久しぶりにラブホテルへ行って誕生日会をやることになっていた。
「そういえば、松本君も今日が誕生日だっけ」
　早起きして弁当を作りながら、しおんは思い出したように呟いた。

待ち合わせ場所の中央公園の野外音楽堂の裏のベンチに座って、しおんは悟が来るのを待っていた。
　大きなセントバーナードを連れて散歩をしている男性が通り過ぎると、しおんは腕時計を見て時刻を確認した。
　約束の時間を二十分過ぎている。
　しおんは目の前の高い木を見上げ、はあっと溜息をついた。
　さらに五分ほど過ぎるた。しおんは悟の携帯電話に電話を掛けたが、つながらなかった。
　留守番電話サービスへつながるメッセージを聞くと、しおんは口を尖らせて携帯電話の蓋を閉じた。すると、突然後ろの林から不気味な鳴き声を上げて、カラスが飛び立った。

しおんは身を硬くしてカラスの行方を追うと、急に不安な気持ちが沸き起こってきて、悟の自宅の電話番号へ電話を掛けてみた。
自宅の電話にも誰も出なかった。しおんはとりあえず悟にメールを出すと、もう暫く待つことにした。

結局一時間待ったが、悟は待ち合わせ場所へ現れなかった。
今までに悟が約束を破ったことは一度もなかったし、待ち合わせに遅れたことすらなかった。しおんは何か悟の身に起こったんじゃないかと不安でたまらなくなってきた。
（悟の家に行ってみよう）と思ったときだった。後ろから肩を叩かれて、はっとして振り向くと、そこに立っていたのは雅司だった。
「なんだ」と言って、しおんは口を尖らせると正面を向いた。
「なにそれ」と言いながら、雅司はしおんの横に座った。
「私、忙しいの」と、しおんが雅司を見ずに言うと、「思いっきり暇そうに見えたけど」と雅司が言った。
（違うもん！）としおんは言いたかったが、代わりに涙が溢れ出た。
「ちょっと、待ってよ。ごめん、俺、変なこと言った？」
しおんは口を押さえて、首を振った。
雅司がポケットから赤いバンダナを取り出してしおんに差し出したが、彼女は受け取らず、手で涙を拭って笑顔を作った。
「ごめん……」としおんは震える声で言った。
「どうしたんだよ……」と雅司は心配そうな表情でしおんに訊いた。
「悟が来なくって」と言った途端、しおんの目から涙がこぼれた。
「電話した？」と雅司はしおんの顔を覗きこみながら訊くと、しおんは頷いた。
「なんか、あったんじゃないかと思って……」しおんは震える声で呟いた。
雅司は暫く考え込むように辺りを見回すと、「あいつんち、行ってみよう」と雅司は言って立ち上がった。そして、しおんの手を取って彼女を立たせた。

自分の手を握ってきた雅司の手の感触に、しおんはハッとなって、思わず彼の手を見つめた。
「なに？」と雅司に訊かれたが、しおんは小さく微笑んで首を横に振った。
雅司の手のスティックだこの感触が、悟と同じだと、しおんは思った。

＊

横を歩いているしおんの表情を見ていて、雅司まで不安な気持ちになっていた。いつの間にか、歩く速度が上がっている。
自分もつい先日、父親を失いかけたばかりだった。だから今のしおんの気持ちを、雅司は理解出来るような気がしていた。
でも、自分の場合は父親だ。彼女がそこまで悟のことが好きなんだと知って、雅司は悟のことを羨ましく思う気持ちも感じていた。
悟とは中学のときには仲のいい友達だった。二人とも音楽好きだしミュージシャンの好みも同じだった。しかし、別の高校へ行ってからは、ほとんど会うことはなかった。しおんと悟が付き合っていたことを知ったのも、つい先日のことだった。
そうこうしているうちに、彼の家の近くまで来ていた。次の角を曲がって直ぐのところが悟の家だ。その角を曲がると、丁度悟の家の前から灰色のライトバンが走り去っていくところだった。家の前には何人かの人が集まっていて、心配そうに悟の家を覗きこんでいる。
「どうしよう……、やっぱなんかあったのかも……」しおんは不安そうな表情で雅司の腕に手を添えた。
「とにかく行ってみよう。あそこに知ってるおじさんがいるから聞いてみるよ」
雅司が顔見知りの男性に近づいていくと、男性は直ぐに雅司に気がついて、手招きして雅司を呼んだ。

「大変だよ、雅司ちゃん」
「どうしたんですか？」
「悟君、知ってるだろ？」
雅司は悟の名前を聞くと、振り向いてしおんを見た。彼女は胸元で手を握り、顔をこわばらせいてる。
雅司は不安な気持ちを拭いきれず、ごくりと唾を飲み込んでから訊いた。
「悟がなにか？」
男性は潜めるような声で話し出した。
「あのね……。亡くなっちゃったんだよ。交通事故で」
言葉を出そうと思ったが、雅司はそれをすることが出来なかった。そして、直ぐにハッとして、振り返った。
しおんの顔から血の気が失せ、視点が全く定まっていないようだった。今にも倒れそうなしおんを見て、自宅の庭で倒れている父親を発見したときの母親の顔を、雅司は思い出した。

悟が死んでから五日が過ぎていた。
しおんは学校をずっと休んでいた。悟の通夜に来ると思っていたが、彼女の姿を見つけることは出来なかった。
彼女と仲のいい友達が見舞いに行ったが、会ってもらえなかったと、その友達は雅司に話した。
雅司はしおんのことが心配で仕方がなかったが、友達が行っても会ってもらえないのに、自分なんかが行っても無駄だろうと思うと、たまらない無力さを感じていた。
「おい！　どうした？　可愛い弟君！？」
縁側に座って、ぼうっと庭の梅の木を眺めていると、小梅が肩を叩きながら話しかけてきた。
つい先日まで、したくもない結婚をさせられそうになっていて、どん底まで落ち込んでいたくせに、結婚しなくてよくなると見違え

るように元気を取り戻し、全く能天気といった感じの姉の表情に嫌気がした。
「ねーちゃん好きなひとととかいる？」と雅司は訊いて横目で小梅の顔を見ると、小梅は口を押さえて笑いを堪えているようにしていた。
「もういい！　あっちいけ！」
「どんなこ？　あんたの好きなこって。学校のこ？」
「そんなんじゃないよ！」
「嘘だね、悩んでないでコクッちゃいなよ。男でしょ？　決めるときはビシッとさ」
「もういい！」と言って雅司は立ち立ち上がり、自分の部屋へ向かおうとすると、居間から母親に呼ばれた。
「雅司、電話よ。悟君のお母さん」
「悟の！？」雅司は驚いて母親からコードレスフォンを奪った。
「もしもし、お電話変わりました」
『あの、悟の母ですけれども』
「はい」
『松本君に教えてもらいたいことがあるんだけれども……』
「何でしょう？」
『悟とお付き合いしていたこが、松本君と同じ高校だと聞いてね』
「はい……」
『松本君、知ってるかしら？』
「知ってますけど、なにか？」
『そう……、あの、そのこにお渡ししたいものがあるんだけども……』
雅司はしおんを悟の家に連れて行くと約束して電話を切った。

しおんの家に行ったが、彼女に会ってもらえなかった。彼女の母親は申し訳なさそうに、雅司を見送った。
雅司は、悟の母親の用件をメールに打ち、会ってもらえるまで家の前で待っていると付け加えてしおんにメールを送信した。

しおんを待ちながら、不安な気持ちが増していた。彼女の母親に彼女の様子を聞いたからだ。しおんはろくに食事も取らず、完全にやつれていて、あと数日このままの状態が続くなら、医者に診せようと思っていると母親は雅司に話した。

（佐山に渡したいものってなんだろう……）

そう雅司が思ったときだった。後ろで玄関のドアが開く音が聞こえた。

「さっ……」

雅司は思わず息を呑んだ。母親に支えられるように立っているしおんは、相当にやつれた表情をしていた。

「佐山……、大丈夫か？」

雅司がしおんの傍へ近づき、優しく声を掛けると、しおんはぼうっとした目をしたまま、こくりと一度頷いた。

雅司は彼女の母親に会釈すると、代わりにしおんを支えるように腕を回し、ゆっくりと歩き出した。

「ごめんなさいね、あなたにも辛い思いをさせてしまって……」

悟の母親の言葉に、しおんはゆっくりと首を振った。

「佐山……、お線香上げよう……」

雅司がしおんの肩をに手を掛けて言うと、しおんはゆっくりと仏壇の前に身体を向けた。

しおんは線香を上げ終わっても、ずっと悟の遺影を見つめたまま、動こうとしなかった。雅司は何か話しかけたかったが、掛ける言葉が思いつかないでいた。

そうしているうちに悟の母親がお茶を持って現れて、雅司はほっと息を吐いた。

「佐山さん？」

悟の母親が声を掛けると、しおんはゆっくりと、身体をこちらに向けた。

悟の母親はしおんの前に、綺麗に折った赤い包み紙と、その上に

一組のスティックを置いた。
「悟は事故に会って意識をなくしても、それをきつく握ったままだったそうよ」
しおんは目の前のスティックを、じっと見つめていた。
「それと一緒にこれが入っていたわ」と悟の母親は、一枚のカードをしおんに手渡した。
カードを見ていたしおんの目に、涙が溢れてくるのを見て、雅司はグッと奥歯をかみ締めた。
「悟はあなたと出会えて、幸せだったと思うわ……」悟の母親はしおんに向かって、穏やかに声を掛けた。
しおんの目から大粒の涙が落ちた。
「ありがとうね、しおんちゃん……。悟の分までしっかり生きてあげて……」
しおんはスティックを抱きしめるように持ち、苦しそうにすすり泣きながら、何度も頷いていた――。

＊

悟の家に行ってから二日が過ぎていた。
しおんはまだ学校へ姿を見せない。
三日目の朝、雅司が溜息をつきながら教室へと向かう渡り廊下を歩いていると、校舎の裏の部室の方から、ドラムの音が聞こえてくるのに雅司は気がつき立ち止まった。
今日は朝練がないはずだった。雅司が耳を澄ましてドラムの音を聞くと、手足が上手く噛み合っていない、へたくそな演奏だった。
雅司は一年生が勝手に叩いているのだと思った。一年生はまだドラムを叩いてはいけない規則だったので、雅司はドラムを叩いている後輩を注意しに行こうと思い、部室の方へ歩いていった。
雅司はへたくそなドラムの音に顔をむっとさせながら、部室のドアノブを力いっぱい引いた。そして、ドラムセットに向かっている

生徒を睨み付けた途端、驚いたように目を見張った。
「さっ――、佐山！」
ドラムを叩いていたのは、しおんだった。
しおんは、ドラムを叩くのをやめ、額の汗を拭いながら、雅司のほうに身体を向けた。
「おはよう！　松本君」
しおんはやつれた顔つきをしているが、目だけはキラキラと、なんだか力がみなぎっていると雅司は感じた。
「な……、なにやってんの？」と雅司が言うと、しおんは嬉しそうに立ち上がり、雅司の傍へ来て、「ねえ、松本君！　ドラム教えて！　私、ドラムがやりたいの」と元気よく言った。
どういう心境の変化か雅司にはよく分からなかったが、とにかく彼女が元気になってくれたのが雅司は嬉しかった。
雅司は微笑んで、力強く頷いた――。

―3―

暗い部屋の中で、ぎしぎしとベッドのきしむ音と、女の喘ぎ声がしている。

「ああ！　凄い！」と下になっている女が叫んで、身をよじりながら腰を痙攣させると、その女の股間から頭を起こし、ふうっと静かに息を吐いてから、もう一人の女はベッドの傍らにうな垂れるように腰掛けた。

ベッドに腰掛けた女は沢田恵梨香（さわだえりか）。下で絶頂を迎えた女が橋本（はしもと）カンナ。二人とも同じ音楽大学へ通う、二十一歳の女子大生だった。

カンナは長い髪を気だるそうにかきあげながら起き上がると、恵梨香に後ろから抱きつき、恵梨香の首筋にキスをした。

「よかったよ。恵梨香……。今度は私がしてあげる……」

「いいよ……」と言って、恵梨香は立ち上がり、バスルームへと向かった。

（いつまでこんなこと続けていくんだろう……）そう思いながらシャワーを顔面で受けていると、カンナもバスルームへ入ってきた。

カンナは自分の身体を泡まみれにすると、

「恵梨香、洗ってあげるよ」と言って、恵梨香に後ろから抱きつき、自分の身体を擦り付け始めた。恵梨香はカンナのしたいようにと、ただ黙って立っていた。

二人ともバスローブだけを身につけ、缶ビールを片手にリビングのローテーブルに向かい合って座った。

恵梨香は缶ビールのプルトップを空けると、「とりあえず、一次審査は通ったね」と言って缶ビールに口をつけた。

「当然よ。地区予選なんて、眼中にないでしょ？」カンナはビールを一口飲むと言った。

恵梨香とカンナは二人でジャズ系インストゥルメンタルの曲を演

奏するユニットを組んでいる。恵梨香はギター。カンナはピアノを担当している。

二人は、アマチュアミュージシャンの登竜門的なコンテストである、大手レコード会社主催の『ゾニーミュージックコンテスト』に応募していた。その一次審査合格の連絡を、今日受けたところだった。

昨年そのコンテストに応募したときは、地区予選で、二人の人並み外れた演奏テクニックに、観客および審査員も皆舌を巻いていた。二人は本選の全国大会へと駒を進めたが、その本選前夜、泊まっていたホテルのベッドの中で恵梨香がカンナの肉体的要求を拒んでしまうと、カンナはへそを曲げ、その翌日の本選で怠慢な演奏を行い、二人は落選してしまった。

恵梨香はカンナとの肉体関係を持ってしまったのは、ほんの弾みだったと思っている。丁度前の彼氏と別れたばかりで落ち込んでいたときに、カンナが優しくしてくれた。酒に酔っていたせいもあったかもしれないが、知らず知らずのうちにカンナと唇を合わせていた。カンナの舌が口の中を暴れまくり、初めての同性とのキスに、そのとき恵梨香は我を忘れるほど興奮してしまった。

そういう趣味があるのかと、恵梨香は暫く悩んだが、今でははっきりと同性愛者ではないと自覚している。でも、カンナとの関係をやめることが出来ないでいた。カンナとの肉体関係をやめるということは、バンドを辞めるということだったからだ。カンナと別れて、別の人とバンドを組むことも、もしくはソロで活動することも考えたが、どうしてもカンナのピアノを捨てることが出来なかった。カンナほどのピアニストは自分の周りでは見当たらない。でも、彼女との肉体関係はもうやめたい。恵梨香は大きく溜息をつくと、残りのビールを一気に飲み干した。

＊

五月の連休が過ぎ、今日の講義を終えた恵梨香は、大学のラウンジの窓から外の風景を眺めていた。下に広がる桜並木は青々と葉を茂らせている。

「恵梨香！」

恵梨香が顔を正面へ戻すと、カンナが嬉しそうな顔をして恵梨香のテーブルの向かい側に腰掛けた。

「恵梨香、今晩ウチに来るでしょ？」

恵梨香は顔を俯かせ、「ごめん、今日はちょっと……」と呟いた。そしてちらりと上目遣いでカンナの表情を伺うように見ると、カンナは口を尖らせて、窓の外を見ていた。

「あっ、あの……、ほんとごめん。今日だけはちょっと」恵梨香は手を合わせて言った。

「なんで？」カンナはむっとした表情で訊いた。

「あの……、高校の時の友達と会うことになっていて……」

「高校の？」カンナは怪訝そうな表情で、恵梨香のほうに顔を向けた。恵梨香はまた俯くと、こくりと小さく頷いた。

「じゃあ、仕方がないわね」と言ってカンナは立ち上がると、視線だけを下げて恵梨香を見て、「浮気したら、――分かってるわよね」と言ってプイッと体を横へ向けると、ラウンジを出て行った。

恵梨香は顔を窓の方へ向け、大きく溜息をついた。

今年の冬にスキー場で知り合った田沢健司（たざわけんじ）から、一緒に誕生日会をやろうとメールをもらったのは先週のことだった。今日はそれでカンナの家に行くことが出来ないのであった。カンナに健司のことは話していなかった。もう会うことはないと思っていたので、話す必要もないと思っていたからだ。でも今は、絶対に知られるわけにはいかないと恵梨香は思っていた。

健司と知り合ったのは今年の冬にスキーサークルの友人に誘われて、スキーへ行ったときのことであった。スキー場で恵梨香が右の板の裏に雪がこびりついて困っていると、健司が声を掛けてきて、

板の裏にワックスを塗ってくれた。ワックスを塗り終えた健司に恵梨香が礼を言おうとすると、健司は「よし、これで大丈夫」と一言言って、そのまま滑っていってしまった。その日はそれっきりだったが、その翌朝、ロッジの食堂の券売機の前で健司と居合わせた。

「あの……、昨日はありがとうございました」と恵梨香が礼を言うと、健司は爽やかな笑顔を見せ首を振り、「たいしたことじゃないよ」と言った。その笑顔に好感を持った恵梨香は、健司を誘い一緒に朝食を取ることにした。名前や年齢を知ったのもそのときだった。健司は六歳年上だったが、恵梨香には二つか、三つくらい上にしか思えなかった。健司は、恵梨香が住む町にある中学で教師をやっていて、恵梨香と誕生日が同じだと知ったのも、そのときだった。

恵梨香はそのとき、なんとなく恋の予感を感じたが、結局その後健司と会うことはなく、彼のことは忘れかけていた。そこへ突然彼からメールが来たのだ。恵梨香は舞い上がり、何度もカンナの前で口を滑らしそうになっていた。

恵梨香が住む町の、東山といわれる小さな山の頂上にあるホテルの最上階のレストランで、恵梨香と健司は窓際の席に案内され、向かい合って腰を下ろした。

「じゃあ、乾杯」ワイングラスを持つと、健司は言った。

「お誕生日おめでとうございます」

「恵梨香さんも」

カチャリとワイングラスを重ね合わせ、恵梨香は健司と一瞬見つめあった後、はにかんで俯いた。

フルコースのディナーを堪能し終え、二人の前にコーヒーの入ったカップが置かれた。

「これ、誕生日プレゼント」

「わあ！　ありがとうございます！」

健司がくれたのは、シルバークロスのネックレスだった。

健司が恵梨香の後ろに回りネックレスをつけてあげると、恵梨香

は嬉しそうに銀の小さな十字架を指で撫でながら、何度も礼を言った。
「これ、健司さんに」
恵梨香が上げたのは、ネクタイだった。
「ありがとう」健司は嬉しそうにネクタイを眺めた。
「恵梨香さん、バンドやってるって聞いたけど」
「バンドって言うか、ギターとピアノだけなんですけど」
「ふーん、聴きたいなあ……」
「今度、ゾニーのコンテストの地区予選に出るんです」
「ほんと！　凄いね。あのコンテストに出るんだ。地区予選ていつ？」
「今月の最後の日曜日です」
「日曜日か、休みだ。観にいってもいい？」
「はい！　ぜひ来てください！」
健司が嬉しそうに頷くと、恵梨香はテーブルの下で小さくガッツポーズをした。そして、カンナとの肉体関係を何とか終わらせなければいけないと考えた。
（でも、どうやって……）
「どうしたの？」と健司に言われて、思わず恵梨香はハッとして顔を上げると、愛想笑いを浮かべて首を振った。

＊

健司と会った数日後の夜だった。
恵梨香はカンナに呼ばれ、彼女のアパートへ来ていた。
「ねえ……、恵梨香……、しよ……」
カンナはローテーブルに向かっている恵梨香の後ろから抱きつき、首筋に何度もキスをして恵梨香の胸を揉みあげながら言った。
「あの……、カンナ……、話しがあるんだけど……」恵梨香は自分の胸を揉んでいる、カンナの手をどかしながら言った。

「やだ、したい……」カンナはまた恵梨香の胸を揉み始める。
「ちょっと、お願いだから話を聞いて」
「だめ、してから……」
「お願い！」恵梨香は身体の向きを変え、カンナを両手で押さえて言った。
「なんなの？」カンナは睨むような目つきで言った。
「あの……」恵梨香はカンナの目を逸らすように俯いて呟いた。
「なに？」
「あの……、もう……」
「……」
「もう、やめたいの」と恵梨香が顔を上げ、必死の表情をして言うと、カンナはフッと笑みを漏らし、「なにを？　バンドを？」と言った。
「あの、バンドじゃなくて、その……」
「じゃあ、なによ」
恵梨香は俯いた。そして、
「あの……、もう……、エッチするのはちょっと……」と呟いた。
「それって、バンドを辞めたいってことでしょ？」
「違うよ！　私はカンナのピアノが大好きなの！」
「でも、私は嫌いなんだ」カンナは、怒っているような、寂しそうな微妙な表情をして、微かに震えていた。
「嫌いじゃないよ！　カンナは大好きよ！」
「嘘よ！　じゃあなんで私とエッチするのが嫌なのよ！」
「だってそれは……」恵梨香は困ったように俯いた。
「だってなによ」
「あの……」
「出てって！」
「えっ！」カンナの叫び声に驚いて、恵梨香は顔を上げた。
「私がいやなら出てって！」
「そうじゃなくて」

「もう、おしまいよ！　コンテストなんかでない！」
「ちょっと待って、ちゃんと話を聞いて！」
「話なんかすることないわ。エッチするかしないかよ！」とカンナは言って、恵梨香に背を向けた。
小さく震えているカンナの肩を見て、恵梨香は小さく息を吐くと、ゆっくりと立ち上がり、部屋の明かりを消して、カンナの後ろに跪き、服を脱いだ――。

＊

コンテストの地区予選を一週間後に控えた日曜日。恵梨香は健司とのデートのため、待ち合わせ場所の中央公園に向かっていた。首には健司から貰ったシルバークロスが輝いている。
恵梨香は健司と映画を見た後、映画館の近くにある『ハーモニー』という恵梨香のお気に入りの喫茶店に来ていた。
中学生くらいにしか見えない女の店員が、注文したコーヒーを出して立ち去ると、「ここって前はおじいさんが一人でやっていて、ジャズ演奏とかしてたんだよね」と健司はコーヒーカップを手にとって言った。
「そうなんですか！？」と恵梨香が驚いたように目を丸くして言うと、健司は微笑んで頷いた。そして、「学生時代はよくこの店に来てたから」と懐かしそうに店の中を見回して言った。
「ジャズとか好きですか？」恵梨香は期待を込めたような目をして訊いた。
「うん。どちらかというと――、よく聴くほうかな……」と健司が答えると、恵梨香は嬉しそうな顔をした。
「もう直ぐ地区予選だね。調子はどう？」
「ええ、全然問題ないです。最初から目標は本選で最優秀賞だから」と恵梨香が自信たっぷりに言うと、彼女の携帯電話の着信音が鳴った。

「もしもし？」慌てて電話に出ると、「恵梨香？」とカンナの声がして、恵梨香の心臓はバクンと大きく動いた。
恵梨香が声を失っていると、「今から会える？」とカンナは言った。
「あ……、あの……」
『今、会いたいの』
「えっと、ちょっと、今は……、あの……」
『直ぐに着て！』
「いや……、えっと……」
『どうしたの？』
「今はちょっと……」
『なんで？』
「えっと、明日……、明日いくから……」
『そう……』
「えっと、カンナ？」
『……』
「もしもし？　カンナどうしたの？」
『私より……』
「えっ？」
『私より、その男のほうがいいのね？』
恵梨香は絶句した――。そして、自分の背後にただならぬ気配を感じた。
強張った顔で恐る恐る振り返ってみると、二つほど後ろの席にカンナが座っていた。
恵梨香は目を疑った。そして、全身の毛穴から汗が噴出してくるのを感じた。
ゆっくりと立ち上がって振り向いたカンナの目を見て、恵梨香は暫く息をすることが出来なくなってしまった。
「恵梨香さん？」恵梨香は健司の声を聞いてようやく息を取り戻した。そして慌てて立ち上がると、健司に謝り店を飛び出していった

――。

暫く辺りを探したが、カンナを見つけることが恵梨香は出来なかった。その足でカンナのアパートへ行っても、彼女はいなかった。仕方なく、恵梨香はアパートの前でカンナの帰りを待つことにした。

三時間ほどが過ぎ、夜の九時近くになって、ようやくカンナが帰ってきた。カンナは酔っ払っているようで、千鳥足でアパートの脇の階段を上ってきた。

「か……、カンナ？」

「あん？　誰？　あんた……」

「あの……、カンナ、あの……」

「なによ！　触んないでよ！」

「お願い！　話を聞いて！？」

「いやよ、あんたなんか知らないわ。もう二度と顔も見たくない」

「どうして！」

「あんたが私を裏切ったんでしょ！　とにかくもう終わりよ！　じゃあね！」

（どうして……）

恵梨香は暫くカンナの部屋の前で蹲り、肩を震わせていた――。

―4―

もう直ぐ五月も終わろうとしていた。
東の窓から差し込む朝の光が、食卓の上を明るく照らし出している。
食卓の上には焼きたてのトーストを乗せた皿とサラダを盛り付けた器。そしてハムエッグの皿の隣のカップからは、入れたてのコーヒーの香りが漂ってくる。
こんな朝の食卓の中に、アコースティックギターをかき鳴らす音が満ちている。
「つくし！　食事のときくらいギターを弾くのやめなさい！」
「お父さんだって、食べながら髭剃りするの、やめてくれる！？」
どこにでもある、父と娘の会話――？
とにかく、父親の名前は石田栗雄（いしだくりお）、自宅でカレー専門店を経営している。年齢は今年四十歳。娘の名前は石田つくし。現在高校二年生で、十七歳になったばかりだ。
「仕方がないだろ！　朝は忙しくて髭もそる暇ないんだから」
「私だって、もう直ぐ地区予選なんだから、もっと練習しなくちゃいけないの！」
「父親の言うことは、イテッ！」
髭剃りで深剃りして痛がる父親。
「ほらいわんこっちゃな、あっ！」
父親を呆れ顔で見ながら、弾いたギターの弦が切れて、がっかりする娘。
「それでは！」
親子口を揃えて言う。
「いただきます！」
ようやく食事が始まる。
「でも、いよいよだな」父親がコーヒーをかき混ぜながら言った。

「はには？」トーストを頬張りながら、つくしは訊きかえす。
「地区予選だよ。なんか、お父さん緊張しちゃうなあ……」
「なんで、お父さんが緊張するのよ」
「だって、娘の晴れ舞台だぞ！　優勝したらお父さん泣いちゃうかも」
「やめてよねってゆうか、お父さんまさか見に来る気じゃないでしょうね？」
「行くに決まってんだろ」
「だめよ！」
「なんで！」
「来たら絶好だからね！　絶対、口利いてあげないから！」
「ええ！　なんでだよ！　お父さん、新しいスーツ買ったのに！」
「馬鹿じゃないの？　お父さんがめかしこんでどうするのよ」
「だって、優勝したら、父親のインタビューとかあるだろ？」
「ないわよそんなの。あるわけないじゃん」
「……」
がっくりとうな垂れる父親。
呆れ顔で見つめる娘。
食卓の隣の台の上に置いてある写真たての中で、つくしの母親は微笑んで二人を見ていた――。

＊

栗雄は店のカウンターの中で、競馬新聞の予想記事に目を走らせていた。すると、店の入り口のドアの鈴が来客を知らせた。
栗雄が顔を上げて入り口を見ると、隣で豆腐屋を経営している、岩田豆造（いわたまめぞう）が片手を上げて挨拶した。
「今日はポークにするわ」豆造はカウンターに座ると言った。
「毎日カレーなんか食って、よく飽きねえな」栗雄は皿にライスを盛りながら言った。

「おいおい、カレー屋が言うセリフかよ」
栗雄はフッと笑みを漏らして返した。
「おまち」と栗雄がポークカレーを出しながら言うと、豆造はスプーンを手にとって、
「むかしのバンドのメンツには声を掛けといたからよ」と言って、熱そうにカレーを口に入れた。
すると栗雄は人差し指を口元で立てて、「しっ！」と言った。
「なに？」豆造は不思議そうな顔で訊いた。
栗雄は身を乗り出して、豆造に顔を近づけると、「つくしには観にいかないことにしてるんだよ」と小声で言った。
「なんで？」豆造も小声で訊いた。
「観にいったら、口利かないって言うもんでよ」
「でも、行くんだろ？」
「当たり前だろ、すみっこで見てりゃわかんねえよ」
豆造は栗雄の言葉にうんうんと何度も頷いた。そんな豆造の肩をぽんぽんと叩きながら、栗雄はにやりと口元を緩めると、つくしがコンテストに応募した曲を店のコンポで再生した。
ファンキーなアコースティックギターのリフが店の中に流れ出す。
「ほんと、思い出すよなあ……」つくしの歌声が流れ出すと、豆造は溜息混じりの声で呟くように言った。栗雄はフッと笑みを漏らした。
「春香（はるか）ちゃんの生まれ変わりだよな。ほんとに……」と豆造が言うと、少し寂しげな目をして栗雄は、店の片隅に置いてある亡き妻の写真に目を向けた。
そんな栗雄の表情を見て豆造は、気まずそうな表情をしてコップの水を一気に飲み干した。そして、「この歌なら間違いないだろ」と言った。
「まあな」栗雄はコーヒーをカップへ注ぎながら答えると、微笑んでそのカップを豆造の前に置いた。
「ほんとにいい声だよなあ……」豆造は出されたコーヒーに砂糖を

入れながら呟いた。
「でもあいつの場合、歌よりギターを誉めてやんなきゃ駄目なんだ」
「えっ？」豆造は不思議そうな顔を上げた。
「あいつに言わせると、この曲が一次審査を通ったのは、ギターのアレンジが絶妙だからだったらしい」
「曲と歌がよかったからだろ？」と豆造が目を丸くして訊き帰すと、栗雄はカウンターから身を乗り出して顔を豆造に近づけ、「いいか、曲と歌を誉めるのは構わないが、最後にこのギターカッコいいねって忘れずに言わないと、暫く口利いてくんなくなるぞ」と栗雄は真剣な表情で言った。
豆造は引きつった笑顔で頷くと、コーヒーを一口啜った。
「あいつの言葉を借りると、自分はギターを弾くために生まれてきたんだそうだ」
「まあ――、ギターもそれなりに上手いと思うけど、歌が良過ぎてなあ……」と豆造が呟くと、「今の、禁句だぜ」と栗雄に言われて、豆造は顔を引きつらせた。
そんな豆造の顔を見て栗雄は微笑むと、腕を組んで少し視線を上げ、「まあ、自分の歌がどれだけ凄いか分かってないのが、あいつの凄いところだ。それにしても心配だなあ……」と言った。
「んっ、なにが？」
栗雄は目を瞑って暫く考え込むような表情を見せてから、「最優秀ギタリスト賞が取れなかった場合のこと……」と呟いた、そして「なんつって慰めればいいかなあ……、絶対無理だよなあ……」とぼやくように言った。
栗雄と豆造が腕を組んで考え込んでいる様子を、店の片隅に置かれた写真たての中から、つくしの母親は微笑んで見ていた――。

＊

五月最後の日曜日。朝方ぐずついていた天気は一変し、窓から見

える空は真っ青だった。
つくしは、目を今日のコンテストの出場者でごった返す控え室の中へ戻した。
華やいだ衣装、奇抜な衣装、緑色に染め上げた髪の毛を、必死に真上に固めている人。
つくしの今日の衣装は、胸に大きくゴシック体で、『ＲＯＣＫ！』と書かれた白いＴシャツにジーパン。彼女のおしゃれの決め手は、愛用のピックをぶら下げた首飾りだった。朝、出掛けに「もっと、他に着るものないのか！」と栗雄に言われて、むっとして喧嘩になって、思わず電車の時間に遅れそうになったのをつくしは思い出した。
控え室をもう一度見渡してみると、女性の殆どは鏡に向かって化粧を気にしているようだった。つくしはなんとなく不安になって、バックから小さな手鏡を取り出した。
（女は顔じゃないわ。ギターの腕よ！）とつくしは心の中でぼやきつつ、リップクリームを塗りなおした。
つくしがプルプルになった自分の唇に満足して顔を上げたときだった。目の前をすらりとして背の高い女性が通りすぎた。つくしはその女性に目が釘付けになり、彼女を目で追っていた。
つくしが釘付けになっていた女性は、松本小梅だった。
小梅を見てつくしは、まるでテレビか映画か、ファッション雑誌でしかお目にかかれないような美人だと思っていた。
つくしが小梅を見ていると、彼女はパイプ椅子に腰掛けて、ベースを構えた。
（へえ……、ベースやるんだ……）
小梅がベースを弾きだそうとしたのを見て、つくしがごくりと唾を飲んだときだった。
「小梅！」とどこからか男性の声が聞こえて、小梅はベースを弾くのをやめ、顔を上げてしまった。
つくしががっかりしていると、小梅の傍へ茶髪を長く伸ばした、

これまたイケメンの男性が急ぎ足で近づいて、「小梅大変だ」と彼女に言った。
「なに？」
「去年本選までいった二人組み、棄権したんだってよ」
「えっ！？　それって、めちゃくちゃすっごいギターとピアノ弾く、あの二人組みでしょ？」
「そう！」
「うそ！　まじ！　あの二人が出ないんじゃ、ひょっとして私たちにもチャンスあるかもよ！」
（去年の本選出場者のめちゃくちゃすっごいギターを弾く人？　えー、出ないんだ……、なんだ聴きたかったなあ……）と、つくしががっかりしている向こうで、小梅たちはガッツポーズをしていた。

＊

コンテストは淡々と進んでいった。
そのコンテストを栗雄は、二階席でむかし一緒にやっていたバンドのメンバーたちと見ていた。その中には豆造もいる。
「つくしちゃんは最後か」豆造がパンフレットを見ながら言うと、栗雄はステージをじっと見つめながら頷いた。
「今まで見た感じじゃ、つくしちゃんの相手になるようなのは出てないと思うけどな」と豆造が言うと、栗雄は視線を動かさずに黙って頷いた。
「緊張してんのか？　栗雄？」
「うるせえな、黙って見てろ！」
「お前は昔から緊張しいだからな」豆造はそう言って、ステージに目を向けた。

＊

「石田つくしさん、準備してくださーい」
スタッフの声を聞いて、つくしはギターを磨いていた手を止めた。
（きた！　いよいよ来たわ！　私の運命の時間）
つくしは首飾りにしているピックをぐっと握って、祈るように目を瞑り、心の中で三度自分を励ますと、パッと目を開いてギターのネックを握った。
（よし！　みんなに私のギターを聴いてもらおう）つくしはそう思いながら、真剣な表情で立ち上がった。
高鳴る胸を押さえつつ、舞台の袖からステージを見ると、小梅たちが演奏の準備をしていた。つくしは、小梅の姿に注目した。
つくしには大きすぎるであろうベースを、ピンと背筋を伸ばした姿勢で構えている姿に、つくしは思わず見とれていた。
（かっこいいなあ……、どんな演奏するんだろう……）
スティックを叩いてカウントを取る音が聞こえると、つくしはごくりと唾を飲み込んだ。そして演奏が始まった途端、つくしは目を見開き、ギターを構えた。そして、小梅のファンキーなチョッパーベースを全身で感じ、自然とステップを踏んでいた。
（あのお姉さん、ちょーカッコいい！　でも、ギターが駄目よ。私ならこうするわ、こうよ！）と、つくしは小梅の演奏に感動しながら、舞台の袖でギターを弾き始めた。
つくしは自分の出番のことを忘れて、小梅のベースに合わせてギターを弾くことに夢中になっていた――。
小梅たちの演奏が終わるのと同時に、つくしも『ジャン！』とコードを鳴らしながら、ポーズを決めた。客席から拍手が沸き起こる。つくしは額の汗を拭いながら、客の拍手を自分へのものと勘違いして、満足気な表情で額の汗を拭った。
「石田さん、スタンバイお願いしまーす！」
つくしはハッとした。
（ブヒ！　私って、これからだった）
つくしは慌てて、タオルでギターのネックについた汗を拭い、そ

のまま顔面の汗を拭いた。
（やーん、リップ取れちゃう。顔もテカテカかもー。喉もからからじゃん）
つくしはとにかく、持ってきたペットボトルの水をごくごく飲むと、ステージに出て行った。
二階席のほうから、ぱちぱちと拍手の音と「待ってました！」という聞き覚えのある男性の声が聞こえた。つくしが二階席を見上げて目を凝らすと、人影が二つ身を隠すように伏せた。
つくしは不思議そうな顔をして、視線を一階の席に向けた。
（やばい……、みんな見てる……）
つくしは客席に背を向け、気持ちを落ち着かせようと、一弦のチューニングをチェックした。これは、つくしがギターを弾き始めるときの癖だった。
「それではエントリーナンバー十八番。石田つくしさんの演奏です」
司会者のアナウンスを聞くと、つくしは大きく息を吸い込んだ。
そして、客席に向かい、目を閉じた――。

ステージの上には今日の出場者が勢ぞろいしていた。つくしは下手側の一番端に立ち、隣に立っている小梅にさっきからずっと見とれていた。
「それでは、各賞の発表を行いたいと思います」
（ついに……、私の運命が……）
つくしはごくりと唾を飲んだ――。

「次に最優秀ベーシスト賞です！」ドラム部門の受賞者の発表が終わり、司会者がそう言った。
「最優秀ベーシスト賞は――、松本小梅さんです」
「うおお！」と、つくしの隣で小梅がガッツポーズをとった。
「おめでとうございます！」と、つくしは思わず叫んでいた。

「おー！　サンキュー！」と小梅は言って、ステージの前に出た。
賞状と小さなトロフィーをもって戻ってくる小梅を、つくしは羨ましそうに見ていた。
「次に、最優秀ギタリスト賞です！」
（来たー！　これよ！　このために私は来たのよ！）つくしは俯き加減で目を瞑り、顔の前で手を握って、必死に祈った。
（ギターの神様お願いします！　私！　一生懸命、練習してきました。毎日毎日家にいるときはギターを手放すことはありませんでした。ギターが大好きです！　お願いです！　私にこの賞をください！）
「最優秀ギタリスト賞は――」司会者の言葉に続いて、お決まりのドラムロールがホールに響いた。
（お願いします！　石田つくしを、よろしくお願いします）
「エントリーナンバー――、五番」
（えっ？）
「ケロルのギタリスト、ジャック大蔵さんです！　おめでとうございます！」と司会者が言った途端、つくしの耳には何も聞こえなくなった。
『私はいったい何のために～、生まれてきたのでしょう～』
つくしは今の心境を無意識のうちに曲にして、心の中で口ずさんでいた。

つくしは肩をぽんぽんと叩かれてハッとした。
「あんた呼ばれてるよ」隣から小梅が言うと、「石田さん前へどうぞ」と司会者の声が聞こえて、つくしは不思議そうな表情でステージの中央へ向かった。
前へ出ると、「おめでとうございます」と賞状を手渡された。
（最優秀ボーカリスト賞？）つくしは賞状に書かれた賞の名前を心の中で呟いた。
（全然嬉しくない……）と、おそらく今日の出場者のボーカリスト

たちが聞いたら激怒しそうな言葉を、つくしは心の中で呟いていた。
そして、最優秀ギタリスト賞の受賞者の持っている、ギターをかたどったトロフィーを羨ましそうに見つめながら、元の場所へとぼとぼと歩いていった。
（ケロル……、ジャック大倉……、ゆるさん……）
その後つくしの曲は、最優秀楽曲賞を受賞した。これにはつくしは満足していた。
（やっぱ、ギターのアレンジがよかったからでしょ。むふふ……）
「それでは、最終選考会への出場者を発表いたします」と司会者が言うと、ステージ上の照明が落ち、ドラムロールが始まり、そしてスポットライトが、ステージ上の緊張した面持ちの出演者たちの表情を、順繰りに浮かび上がらせていく――。
「エントリーナンバー十八番、石田つくしさんです！」
ファンファーレとともに、つくしはスポットライトを浴びた――。

「おめでとう」控え室へ戻ってギターを片付けていると、後ろから女性の声が聞こえて、つくしは振り向いた。
（あっ、ベースのお姉さんだ）
「ありがとうございます」つくしは立ち上がって、深々と頭を下げた。
「あんたの歌、最高だったよ。ギターも上手いじゃん。結構練習したでしょ？」
「はい！」つくしは今日一番の笑顔を見せた。
「あたしたちは今日で解散しちゃうけどさ、本選観にいくから頑張ってよ。あたしたちの分まで」
つくしは、真剣な目をして頷いた。
（きょうでバンドやめちゃうんだ……、もったいないなあ……、あんな凄いベース弾くのに……）
小梅が差し出した手を見てつくしは、大きな手だなあ……と思い

ながら彼女と握手を交わした――。

＊

家へ帰ると、食卓の上には物凄いご馳走が並んでいた。
「お帰り、つくし！」
「すっごいご馳走じゃん」
「早く座って、乾杯しよう！」栗雄はビールのジョッキを掲げて、つくしを手招きしながら言った。
「なんなのいったい……」つくしは怪訝そうな表情で食卓に着いた。
「じゃあ、本選出場を祝って」
「えっ？」
「乾杯！」
「ちょっと待ってよ！」
「なに？」栗雄はジョッキを口元へ運ぼうとしていた手を止めた。
「なんで知ってんの？」
「へっ！？」
「なんでよ」
「えっ？」
「まさか、お父さん？」
「えっと、うーんと、えー、なんでかなあ……」と栗雄が視線をそらして考え込んでいると、「まあ、いいわ」とつくしは言って箸を取ったので、栗雄は額の汗を拭い、ビールをぐいぐいと煽った。
「でも、取れなかった……、最優秀ギタリスト賞……」つくしはエビフライを食べ終わると、最優秀ボーカリスト賞のトロフィーを寂しげに見つめながら言った。
「あのな、つくし……」
つくしが泣きそうな顔を上げると、栗雄はどぎまぎして、「あの、地区予選の賞なんて、おまけみたいなもんだから、なっ！　とにかく、本選で賞をとらないと意味がないんだから、なっ！　お前には

そのチャンスがあるんだから、なっ！」と、つくしに言い聞かせるように言った。
つくしは俯いて暫く考え込むような表情をすると、「そっか……」と言って顔を上げ、笑顔を見せた。
その顔を見て栗雄はほっとした表情をして頷いた。
「そうだね、地区予選なんて眼中ないわよ。あんなのケロルのやつにくれてあげるわ。私には本選があるんだから」
「そうだぞ！　つくし！　ほれ、食え食え」
「おー！　食うぞ！」
美味しそうにエビフライを頬張るつくしを見て、栗雄はほっとしながら亡き妻の写真に目を向けた。写真の妻は、栗雄を微笑んで見ていた――。

＊

七月も終わろうとしていた。蝉時雨が響き渡る駅までの道を、つくしはギターケースを右手に持って、旅行バックを左肩へ掛け歩いていた。
（まったくお父さんはいつまでも子離れしないんだから、ほんとにウザったい。もう、十七よ！　一人で東京くらい行けるわよ！）
東京で行われるコンテストの最終選考会へ出場するため、つくしは駅に向かっていた。出掛けに栗雄が一緒にいくといって聞かないので、喧嘩してきたばかりだった。
むっとしながら信号待ちしていると、足元にミニチュアダックスフンドが寄ってきたのに気がついた。
「きゃあ！　可愛い！」と言いながらその犬の頭を撫でてあげると、犬は気持ちよさそうに目を閉じた。
「ワンちゃん、ひとりなの？　ご主人様は？」つくしが話しかけると、犬は切なそうな目をつくしに向けた。
「やーん！　めちゃめちゃ可愛い！」と、つくしがその犬の目にい

ちころになりそうになっていると、その犬は車道の方へ目を向けた。
「えっ？」
その犬が車道へ飛び出していく様子が、スローモーションのようにつくしの目に飛び込んでくる。
そして、車の急ブレーキの音が、つくしには悲鳴に聞こえた――。

蝉時雨の中に、父親の声が聞こえるような気がしていた。少しずつ目の前に光が差し込んでくる。
「つくし、気がついたか？」
視界はぼんやりしている。目を少し右に傾け、何度か瞬いてみると、父親が自分を覗き込んでいるのが分かった。
「お父さん……」
「よかった。ほんとによかった……」栗雄はつくしの右手をしっかりと握って言った。
「私……」つくしは視線を動かして、病院のベッドに寝かされていることに、ようやく気がついた。
「なんで……」つくしは記憶をたどり始めた――。
（そうだ、ワンちゃんが寄ってきて……）
つくしはハッと目を見開いた。そして、左手を握ろうとしてみた。
心臓の音がバクンバクンと大きく鳴り始めた。
（やだ……、うそ……、うそだ……）
つくしは怖くて左手を見ることが出来なかった。
「つくし……、あのな……」
つくしは父親に顔を向けた。栗雄はつくしに顔を向けられると、すっと視線を逸らしてしまった。
「お父さん……、私の手……」
栗雄は横を向いてグッと奥歯をかみ締めているようだった。目を閉じて小さく震えている。
つくしは意を決して、恐る恐る左手を上げた――。

外の廊下を向こうから、豆造がつくしの病室へ向かってこようとしていた。
そして、豆造がつくしの病室の中を覗こうとした途端、つくしの悲鳴がとどろいた――。

＊

店に置いてあるテレビ画面に、昨日の台風十号の被害の様子が映し出されていた。
栗雄はそのニュース番組を店のカウンターの中からぼんやりと見ていた。
そんな栗雄の姿を伺うように、窓の外から人影が覗いている。
人影はドアの方に進み、カランカランと、ドアのベルを鳴らした。
「今日はビーフにしようかな」と豆造はカウンターに座ると言った。
反応のない栗尾を見て豆造は溜息をつくと、彼の顔の前に手をかざした。
「ん？　なんだ、まめっち来てたのか……」
「その様子じゃ、歌姫は相変わらずって感じかな？」
「あれ以来、外に出ようともしねえ……。夏休みだったのが、せめてもの救いってとこかな……」
「でも、もうじき休みも終わりだろ？」
「そうなんだけどよ……」
栗雄は大きく溜息をついた。
「もう……、抜け殻みたいでよ……。俺の声なんか耳に入らない感じなんだよ……」
「でも、なくなったのは小指と薬指だろ？　親指と人差し指があればピックは持てるんだから、左利きでやらせてみたらどうなんだよ」
「そんなの言われなくても試したみたいでよ、ギターの弦……、逆

に張り替えてあったから」
「だめなのか？」
「今更ゼロからやり直す気に、ならなかったんじゃねえのかな？
よくわかんねえけど、とにかく部屋にこもって、ぼうっとしたっきりなんだ……」
豆造は福神漬けのらっきょをぽりぽりかじりながら、「もったいねえなあ……、歌だけでも十分なのになあ……」と呟いた。
それを聞いた栗雄は（春香がいてくれたら……）と心の中で呟いた。

「つくし！　朝だぞ、起きろ！」
栗雄に身体を揺すられて、つくしは布団からむっくりと身体を起こした。
――食卓に着いたつくしの前にコーヒーを入れながら、頬がこけて目の下に熊を作っているつくしの顔を見ると、栗雄は思わず目を逸らした。
そして、ふと思い出したように「あっ！　そうだ！　つくし？　今日って何の日だ？」と言って、つくしの顔を覗きこんだが、直ぐに目を逸らしてしまった。
そして、咳払いを一つつくと、「今日はお父さんの誕生日！」と必死に笑顔を作って言ったが、無表情のつくしの顔を見ると、どぎまぎしながら「お……、お母さんの誕生日も今日って……、知ってるよなそんなの……」とぼそりと呟いた。
つくしは相変わらず無表情だった。
「なあ、つくし？　今日の晩めし、外に食べに行こうか？　何でも好きなもの食べさせてやるぞ！　そうだ！　そんでもって、カラオケでも行こうか？　お父さん、つくしの歌聴きたいなあ……。お父さん、ＹＵＩでも歌っちゃおうかな？　こ～い～しちゃったんだ、多分～、なんてね……」

「ごちそうさま……」つくしはそう言うと、ゆっくりと立ち上がって、自分の部屋のある二階へと階段を上っていった。
栗雄は自分の椅子に座ると、がっくりと肩を落とした――。
食卓の上には、手付かずの朝食が二つ、残ったままだった――。

＊

交通事故に遭って以来、数週間ぶりにつくしは家の外へ出た。まだ、真夏の暑さが続いている。どこかへ行こうと思って家の外へ出たわけではなかった上にこの暑さだ。つくしは、家の近くの中央公園まで行くと、木陰を求めて、その公園内にある野外音楽堂を囲む林の中へ入って行った。空いているベンチがひとつだけあった。つくしは、気だるそうにそこへ進み、腰掛けた。
自分でもいつまでも落ち込んでいる訳にはいかないとつくしは思い続けているが、ふと沸き起こってくるフレーズを弾きたくなる衝動をどうすることも出来ず、それを弾くことが出来ない自分が悔しくて悔しくて、その悔しさをどう発散してよいのか分からずに、落ち込んで悩んで苦しむ日々をつくしは送っていた。
今、また曲のイメージが浮かびかけて、つくしは目を閉じて頭を抱えた。
（もう！　どうにかして！）
ちりんちりんと、つくしは鈴の音を聞き、目を開けてどきりとした。
つくしの足元から、ミニチュアダックスフンドがつくしの顔を心配そうな目で見上げていた。
（えっ？　このワンちゃんて……）
あのときの犬だとつくしは思った。そして、後ろ足の方を車輪のついた台車に乗せているのを見て、不思議に思った。
なんだろうと思いながら、後ろ足の方をよく見て、つくしはぎくりとした。

その犬は、後ろ足と尻尾が切断されてなかった。
つくしは思わず、親指意外が一つになっている、赤い毛糸の手袋をはめた左手を握り締めた。
（このワンちゃんも、こんな風に……）
つくしが足元の犬と見つめ合っていると、「ヘレン！」と声が聞こえて、つくしと犬は同時に視線を声の聞こえた方向へ向けた。
（せ……、先生！？）
「おっ！？　石田じゃないか」
声の主は、つくしが中学二年と三年のときの担任の教師だった、田沢健司だった。
中学時代、つくしは健司に憧れていた。そして、つくしがギターを始めるきっかけになったのは、健司が中学には珍しい、軽音楽部の顧問をやっていたからだった。つくしは中学時代、軽音楽部に入り、健司に誉められたくて、必死にギターを練習した。そして、いつしかギターという楽器が本当に好きになり、プロを目指すようになっていた。
「久しぶりだなあ……」健司がそう言いながらつくしの横に腰掛け、懐かしそうにしげしげと見つめてくると、つくしは思わず顔を背けて俯いた。
「ん？　どうした？　なんか、具合悪そうだな」
つくしは健司の方を見ることが出来なかった。
「そうだ！　石田、コンテストの最終選考会、どうした？」
つくしはハッとして、健司の方を見た。
健司はつくしが顔を向けると、にっこりと微笑んで、「先生な、地区予選見たんだよ。本当は先生の知り合いの人が出るはずだったんだけど、その人は突然出れなくなったみたいで、でもパンフレットに石田の名前が出てて、先生びっくりしたぞ」
健司はそう嬉しそうに言うと腕を組み、少し視線を上に向けて、思い出すように話し出した。
「ほんと凄かった。久々に石田の歌聴いて、なんか感激した。ギタ

ーもあの頃よりずいぶん上手くなったな」
健司はつくしに視線を戻した。そして、目を丸くした。
「ど、どうしたんだ？　石田……」
つくしは堪えきれずに、声を上げて泣き出した――。

「そうだったのか……」
健司がそう呟くと、つくしは外した手袋をまた左手にはめた。
健司は視線をヘレンに向けた。
「石田がヘレンを助けたのか……」
健司はそう呟いて、足元で大人しくしていた、ミニチュアダックスフンドのヘレンを抱き上げた。
「石田？」
健司に呼ばれると、つくしは真っ赤になった目を健司に向けた。
「ヘレンを恨んでるか？」
つくしが黙って首を振ると、健司はほっとしたような表情を見せた。
「ヘレンはな……」
つくしは健司に顔を向けた。
「本当は先生のウチの犬じゃなかったんだ」
「えっ？」つくしは不思議そうな表情を見せた。
「事故に遭って先生のウチの動物病院に運ばれてきて、先生のお父さんが手術して助けたんだけど、元の飼い主が後ろ足を切断したヘレンを見たら、安楽死させてやってくれって言って……」
「そんな……」つくしは寂しそうな目をヘレンに向けた。
「でも、ウチの父はそんなこと出来ないから、ヘレンをウチで引き取ることにしたんだ」
「そうなんだ……」つくしはヘレンを見つめながら、ほっとした表情をした。
「本当は死んでもおかしくなかったのに、必死に頑張って、こんな

に元気になった」
　健司はつくしに真剣な目を向けた。
「後ろ足がなくなっても、頑張って生きようとしている。だから、三重苦でも必死に生きたヘレンケラーの名前を貰って、ヘレンに名前を変えたんだ」
　つくしは頷いた。
「先生はな……」健司はそう呟くと、左手でつくしの肩をしっかりと掴んだ。
　つくしは真剣な目を健司に向けた。
「ギターが弾けなくなったのは残念だと思う。でも、石田にはまだ歌があると思う」
「歌？」と、つくしが不思議そうな表情で呟くと、健司は真剣な目のまま頷いた。そして、「大好きなんだ」とその目のまま言った。
（ええ！　だ、だ、だ、だ、大好き！？）
　つくしには健司がその後に『石田の歌が』と言ったのが耳に入らなかった。ずっと、健司が言った『大好き』が頭の中でこだましていた。
「石田？」と健司に肩を揺すられてつくしはハッとした。
「なあ石田？　元気出せ、お前にはまだあんなに凄い歌があるんだから、なっ？　先生、石田が復活するの、待ってるぞ！」
　つくしの表情はみるみると明るくなっていった、そして健司の腕からヘレンを取り上げると、しっかりと抱きしめて、
「ヘレン！　私、頑張る！　今度は歌で勝負よ！」と叫んだ。
「こ～い～しちゃったんだ、多分～」と、つくしはウキウキした表情で口ずさみ、スキップしながら店の前まで来ると、勢いよく店のドアを開けた。
「ヤッホー！　お父様～！？　あら～、まめっちおじさんこんにちわー」
「へっ？」とカウンターの中の栗雄と、その前に座っていた豆造は、

目を丸くしてつくしを見た。
「お父さん！」
「へっ？　なに？」
「食事に行くわよ！」
「えっ？」
「パーティーよ！」
「へっ？」
「そんでもって、カラオケよ！」
「えっ！？」
「歌うわよ！」
「は？」
「ガンガンに、歌って歌って、歌いまくるわよ！」
栗雄と豆造はどうなっているんだといった表情をして顔を見合わせた。
「早く、いくわよ！　お父さん、レッツゴー！」
栗雄と豆造が唖然としながら、つくしをみていると、また「こ～い～のはじま～り、胸が～きゅんとせま～くなる～」とＹＵＩの歌を口ずさみながら、つくしは店を出て行った。

―5―

陽はもうすっかり暮れ、昼間の暑さは少しだけ和らいでいる。
駅前ロータリーの先にある中央公園に、この夏、新たに噴水広場が出来た。
昼間は小さな子供を連れた母親たちが、子供に水浴びなどをさせたりしている。真ん中の大きな噴水の周りには、小さな像やイルカの石造があり、子供たちはその石造から、時折吹き出てくる噴水に、きゃあきゃあと声を張り上げながら楽しそうにそこで遊ぶ。
夜になるとその噴水は七色にライトアップされ、幻想的な雰囲気を漂わせる。その頃には若いカップルたちが寄り添う姿が多くなる。
今もそんな夜の時間だ。
幻想的なこの噴水広場に、アコースティックギターの音色が満ちている。
ギターを弾いているのは、沢田恵梨香だった。
恵梨香はカンナとのコンビを解消し、結局コンテストを棄権しなくてはならなくなり、その後暫く落ち込んでギターを弾くことをやめていたが、やはりプロミュージシャンになる夢を諦めきれず、最近になって一人でこの噴水広場で演奏するようになっていた。
恵梨香が演奏を始めると、直ぐに人だかりが出来て、皆食い入るように恵梨香の演奏に耳を傾けるが、恵梨香のほうは未だに満足して演奏を終えることが出来ないでいた。
カンナと一緒にやっていた頃のような演奏が出来ずに、いつも演奏を終えるたびに溜息をついていた。
（やっぱ、カンナと一緒じゃないと駄目かも……）
今日の三曲目の演奏を終え、観客の拍手を背に溜息をついた。
何度もカンナと仲直りしようと考えたが、またカンナと肉体関係を持たなければならないかと思うと、とてもじゃないけれども出来なかった。自分には本来そういう趣味はない。かといって、他に一

緒にやりたいと思う人間も見つからず、結局一人で不完全燃焼する演奏しか出来ないでいた。
ギターのチューニングを確認しながら、また溜息をついた。実は今の溜息の原因は、一人での演奏に不満だからではなかった。
横目でその原因の方をちらりと見た。
ずっと恵梨香をうっとりとした表情で見ている女の子がいる。それは、石田つくしだった。
（なんなのよ、一体あのこは……、さっきから変な目つきで私のこと見てて……、それに何なの？　あの手袋は、まだ冬でもないのに、しかも左手だけなんて……）
恵梨香は次の曲を演奏しようかどうしようか迷い始めた。
（なんか、あのこが見てるとやりづらいわね……）
恵梨香はやはり気分が乗らず、今夜の演奏を止めることにした。
恵梨香がギターを片付け始めると、集まっていた人たちは残念そうな顔をしてその場を立ち去り始めた――。
「さて、ハーモニーでお茶でもしよっと」と振り向いた途端、恵梨香はぎくりとして一歩後ずさった。
つくしが、直ぐ後ろに立っていたのだ。
「あの……」と、つくしは言った。物凄く切羽詰った表情をしている。
「な……、なに？」恵梨香は身を硬くして訊き返した。
「あの……、私……、あの……、す、凄く好きになっちゃって……」
つくしは、またさっきのようなうっとりとした表情になった。
（す……、好き？）冷たい汗が、恵梨香の背中を伝った。
（冗談じゃないわ！　なんで、私って女からそんな風に、思われちゃうのかしら！？　簡便してよ！　私はそういう趣味はないの！）
恵梨香が無視して立ち去ろうとすると、つくしが前に立ち、切羽詰ったような表情を見せた。
「あの……」
「なによ、どいてくれる？」

「すいません、あの、お願いが……」
「なに？」恵梨香が不機嫌そうな表情で訊くと、つくしは俯いてモジモジし始めた。
「私……、あの、私と……」
（まさか、私と付き合ってほしいなんて言うんじゃないでしょうね？）と恵梨香が考えていると、「あの、私と一緒にやっていただけないでしょうか？」と、つくしは呟くように言った。
「はっ？　やるって何を？」
「あの、私、歌がやりたいんです」
「歌？　なに言ってんの？　歌なら勝手にカラオケでも何でも、歌えばいいじゃん」
「そうじゃなくて、あの、自分の歌を……」
「はっ？　ひょっとして、私にあんたのバックでギターを弾けっての？」
「はい……」と、つくしは申し訳なさそうに言って、上目遣いで恵梨香の様子を伺うように見た。
「冗談じゃないわ」と恵梨香は吐き捨てるように言って歩き出そうとしたが、思わず立ち止まった。つくしが両手で、恵梨香の腕を掴んだからだ。
「お願いします！」
「なに言ってんの、離してくれる？」
「お願いします！　私、一人じゃ出来ないんです！」
「知らなっ！　……」つくしの手を振りほどこうとして、恵梨香はぎくりとした。強く腕を引いた途端、つくしの左手から手袋が外れてしまったのだ。
　つくしは慌てて手袋を拾ってはめなおしたが、恵梨香はしっかりと彼女の手を見てしまった。
　つくしは左手を後ろに隠して、俯いている。
「あなた……」恵梨香は言葉に詰まった。
「私……、本当はギターが弾きたいんです……。でも、もう弾けな

いから……」
つくしはそう呟くと、顔を上げて恵梨香に必死な表情を向けた。
「お願いです！　私と一緒に！　お願いします！」
「分かったから、ちょっと待って」
必死の表情で迫ってくるつくしを、なだめるように恵梨香は言うと、「分かったけど、そんな簡単には私だってやる気にならないわよ。あなたのこと、何にも知らないんだから、とにかく、せめてあなたの歌を一回聴かせてくれないと」と言った。
つくしはバックからポータブルＭＤプレーヤーを取り出した。
「これ……、ゾニーのコンテストに応募した曲です……」
「えっ？　あなた、あのコンテストに応募したんだ」
「はい……」
「そう……」と言って、恵梨香はＭＤプレーヤーを手に取り、イヤホンを着けた。
再生ボタンを押して暫くすると、軽快なアコースティックギターのリフが流れ出した。カッティングを交えたリズミカルなアコースティックギターのイントロに、恵梨香は思わず耳を集中した――。
つくしが心配そうな表情で恵梨香を見ていると、恵梨香は突然目を見開いた。そして、睨むようにつくしの方をじろりと見ると、直ぐに視線を逸らして目を閉じた。
恵梨香は身体で小さくリズムを取っている。目を瞑り、必死に耳に集中しているようだった――。

恵梨香は突然イヤホンを外すと、ＭＤプレーヤーをつくしに突き返した。
「えっ！？　あの……」つくしがおろおろしていると、恵梨香はつくしを無視して、ギターをケースから出し始めた――。
自分に背を向けてチューニングをしている恵梨香を、つくしは心配そうに見つめている。
チューニングを終えジャラーンとＧのコードを恵梨香は鳴らすと、

つくしの方に向き、にっこりと微笑んだ
「やるわよ」と恵梨香は言って、つくしの曲のイントロを弾き出した――。

（凄い！　凄い、このこ。何なの一体）
恵梨香はつくしの歌に感激しながら、ギターを弾くことに夢中になっていた。恵梨香一人で演奏していたときよりも、遥かに沢山のギャラリーが二人の回りに集まっていることにも気づかずに――。
そして、今まで一人で不完全燃焼しか出来なかった分を取りもそうとするかのように、何度も繰り返し、つくしと二人で演奏を繰り返した――。

＊

道端には落ち葉が多くなってきた。明けて間もない薄暗い道を、つくしは健司の家へと向かっていた。
「先生！」
健司の家の前の道に出ると、ポストから新聞を取り出している健司の姿を見つけて、つくしは走り出した。
「よう、石田」
「先生、おはようございます！」
「毎朝ご苦労だなあ」
「いえ、全然平気でーす！」
（だって、先生に会えるんだもーん）

健司からヘレンを預かると、つくしはヘレンを連れて朝の散歩へと向かった。行き先は近くの中央公園だ。
車椅子に乗って必死に進むヘレンを、つくしは愛おしそうに見つめた。後ろ足を無くしても、懸命に生きているヘレンを見るたびに、つくしは励まされる思いを感じていた。

中央公園の野外音楽堂の裏へ差し掛かると、トレーニングウェアに身を包んだ、つくしと同じ歳くらいの女性がストレッチをしていた。つくしがヘレンの散歩を始めるようになって、ここで毎朝見かける人だった。

つくしは思い切って話しかけてみようと思い、彼女に近づいていった。

つくしが近づくと、その女性はストレッチをやめ、つくしの方に振り向いた。

「おはようございます」とつくしが挨拶をすると、「おはよう」と、彼女は笑顔で答えた。額には汗が滲んでいる。

「毎朝会いますよね？」

「そうね、そのワンちゃんとも」

「ヘレンて言うんです。私は石田つくしって言います」

「私は佐山しおん。よろしくね」

「はい。――佐山さん、高校生ですよね？」

「ええ、南高の三年」

「私は東高の二年です。でも、三年生でもまだ、部活とかやってるんですか？」

「えっ？」しおんは不思議そうな顔をした。

「あの、陸上部かなんかで、毎朝トレーニングしてるんじゃ……」

しおんはにっこりと微笑んで、首を振った。

「私は吹奏楽部。でも、部活はもう引退してるわよ」

「そうなんですか……。でも……、運動が好きなんですね？」

しおんはまた、にっこりと微笑んだ。

「本当は、運動は苦手なんだけど。でも、どうしても体力つけなきゃいけないから」

「はあ……」つくしは不思議そうな顔を見せた。その顔を見てしおんはまた微笑むと、「私、ドラマーになりたいのよ」とドラムを叩く素振りをしながら言った。

「へえ、ドラムですか。バンドとかやってるんですか？」
「ううん、まだ。でも、一緒にやってもいいって言うベースの人だけいるんだけど、その人に言われちゃったのよ。ドラム叩く以前に体力とパワーを付けなきゃだめだって。だから、毎朝ランニングして、放課後はジムで筋トレとかしてるのよ」と、しおんは二の腕の力瘤を見せながら言った。
（すごっ！）つくしはしおんの力瘤を見て、目を丸くした。
「あの、私も歌をやってるんです」
「そうなの。一人で？　それもと、バンドで？」
「あの、ギターの人と二人で」と、つくしはピースサインを見せて答えた。
「最近、ここの噴水広場でライブとかやってるんで、よかったら見に来てください」
「分かったわ」と、しおんは言って手を軽く上げて見せると、走り始めた。

＊

夜の噴水広場には沢山の人が集まり、人垣が出来ていた。その人垣の向こう側では、つくしと恵梨香が演奏している。
二人がエンディングを決めると、大きな歓声と拍手が起こった。
「今日はありがとうございました。今晩はこれで終わりです。みなさん気をつけてお帰りください」つくしは観客に向かってそう言うと、深々とお辞儀をした。
「大分サマになってきたわね」恵梨香はそう言うと、ペットボトルに口を付けた。
「はい」つくしは汗を拭きながら、満足そうな顔で答えた。
「でも、最近バンドとかもいいかなあって思うんですけど」
「そうねえ……、でもなかなかいい人がいないのよね。私たちのレベルについてこれる人が」恵梨香は上目遣いで考え込むような表情

で言った。
「つくしちゃん！」
「しおんさん！　あっ！？」つくしは、しおんの隣に立っていた女性を見て驚いた。
「ヤッホー、久しぶり」その女性は言った。
「小梅さん！？」
「びっくりしちゃった。つくしちゃん凄いんだもの。小梅さんから聞いたんだけど、ゾニーのコンテストで、本選まで行ったんだってね」しおんは興奮した口調で言った。
「あんた、本選どうしたのよ。私、観にいったのに」
「すいません……」つくしは、左手を後ろに隠して言った。
そんなつくしを、小梅は不思議そうな顔で見た。
俯いているつくしに、恵梨香は「誰？」と小梅を指差しながら訊いた。
「あんた、知ってるわ。去年のコンテストで、本選まで行った人でしょ？」
「ええ、そうですけど」恵梨香は小梅に顔を向けた。
「私は松本小梅。今年の地区予選で、そこのスーパーボーカリストに負けちゃったけど」
「はあ……」恵梨香は生返事を返した。
「つくしちゃん、つくしちゃん。ねえ、一緒にバンドやらない？」しおんはつくしの手を取って言った。
「ええ！？　バンド！？　わあ！　やりたーい！」つくしもしおんの手を取り、軽く飛び跳ねながら答えた。
「ねえ、恵梨香さん。いいでしょ？　小梅さん、最優秀ベーシスト賞取ったのよ。めちゃめちゃカッコいいんだから」
「最優秀ベーシスト賞ねえ……」恵梨香は腕組みしながら考え込んだ。
「別に無理にとは言わないけどさ、一回やってみない？」小梅は恵梨香に向かって言った。

「そうね、やってみてから考えましょう」と恵梨香が言うと、つくしとしおんは手を取り合って、きゃあきゃあと嬉しそうに喜んでいた。

＊

初めての練習は、商店街の外れにある『柏屋楽器店』のスタジオを借りてやることになった。

恵梨香がギターの準備をしていると、つくしが傍へ寄ってきた。

「きゃあ！　恵梨香さん、今日はエレキなの！？」

「んっ？　ああ、バンドだからこっちのほうがいいかなって思って」

恵梨香はつくしに自分のエレキギターを見せながら言った。

「凄い！　しぶーい！　なんてギター？　いいなあ」つくしは羨ましそうな表情で言った。

「特注なのよ。形はレスポールだけど、セミアコなの」

「セミアコ？」

「セミアコースティックギター。真ん中に太い芯があって、その周りは空洞なの」

「へえ、すごーい。いいなあ、弾きたいなあ、んー、弾きたい弾きたい弾きたい！」

「あんた、そういやどうしたのよ。その手」

羨ましそうに恵梨香のギターを見ている、つくしに小梅は訊いた。

つくしは「えっ？」と言って小梅を見た後、寂しそうな表情をして恵梨香をちらりと見てから、ゆっくりと左手の手袋を外した。

「えっ！？　なにそれ！？　どうしたの？」

小梅は目を丸くして訊いた。しおんも驚いているようだった。

「本選の前の日に、交通事故にあって……」

「そうなんだ……」と小梅が呟くと、スタジオの中はしいんと静まり返った――。

皆が俯いている中で、つくしは顔を上げ笑顔を見せると、「でも、

私にはこれがあるから！」と声を張り上げて言った。
皆、つくしに注目した。
「じゃん！　マイマイク！　お父さんに買ってもらっちゃった！」
と、つくしは一本のワイヤレスマイクを高々と掲げた。
スタジオの中が、またしいんと静まり返った――。

初めてのバンド練習を終え、バンドのメンバーは、つくしの家のカレー専門店に集まっていた。
「私、カツカレー」小梅がメニューを見ながら言った。
「私、シーフードにしよう」と小梅が見ていたメニューを覗き込みながら、しおんが言った。
「恵梨香さんは？」つくしが水を配りながら訊いた。
「じゃあ、グリーンカレーにする」と恵梨香は答えた。
恵梨香は、つくしがカウンターの中へ入り、父親の手伝いをしている姿をぼんやりと眺めながら、今日の練習の様子を振り返っていた。
恵梨香の感触では、七十点といった出来だった。つくしは問題なし。小梅が意外にもよかったのが、拾い物だったと恵梨香は思った。しおんはまだまだこれからといった感じだが、リズム感だけは抜群なようなので、経験を積めば化けるかもしれないと思っていた。なにより、しおん本人のやる気が凄い。何が何でもプロになりたいといった雰囲気をしおんから一番感じていた。
でもやはり、今ひとつインパクトに欠けているような感じがすると恵梨香は思っていた。
つくしはバックの演奏次第で、無意識に歌い方を変えている。バックがどういう演奏をするかが、このバンドの課題だと恵梨香は思っていた。
「うめー！　このカレー！」
恵梨香は小梅の声にハッとして、彼女を見た。小梅はもうカツカレーを平らげようとしていた。それを見て、恵梨香は慌ててスプー

ンを取った。
（おいしい！）と一口食べて思ったときだった。
「でも、なんかさあ、やっぱ鍵盤が欲しいわね」と小梅が言った。
（鍵盤……。確かに……）恵梨香がなんとなく思っていたことを小梅が口にすると、恵梨香は心の中で頷いていた。
「鍵盤て、ピアノとか？」つくしが、カウンターの中から訊くと小梅は頷いた。
「小梅さんの前のバンドの人は？」
「あのこは、ギターのヤツと出来ちゃった結婚しちゃったのよ」と小梅は言ってから、「そうだ！」と声を張り上げ、恵梨香の方を見た。恵梨香にはなんとなく、小梅が何が言いたいのか分かるような気がした。
「カンナなら駄目よ」と、小梅が言う前に恵梨香は言った。
小梅は一瞬戸惑った表情をして、「なんでよ」と訊いた。
「私とはやらないと思う」小梅の問いに、恵梨香はそう答えた。
「カンナさんて？」つくしが小梅に訊いた。
「エリちゃんの相棒。去年のコンテストで、エリちゃんと一緒に本選まで行ったのよ」
「ええ！　すごーい！」つくしは目を輝かせて言った。そして、「ねえ、恵梨香さん。頼んでみようよ」と恵梨香に言った。
恵梨香は困った。カンナとやりたいのは山々だが、一緒にやることになって、また肉体関係を迫られたらと考えると、素直に頷けなかった。
「あんたたち、どうしてやめちゃったの？」
「えっ……」小梅の問いに、恵梨香は言葉が詰まった。
それでも、「ねえ……、恵梨香さんお願い……」と、つくしが恵梨香の左腕を抱きしめて、おねだりするように言うと、恵梨香はごくりと唾を飲み込んで、頷いていた。
「きゃあ！　やったー！」と、後ろから恵梨香を抱きしめてはしゃいでいるつくしに、恵梨香はなんだか胸の奥がきゅんとなるような

感じがして、戸惑っていた。

＊

「ここがカンナさんのウチ？」と、つくしはカンナの住んでいるアパートを見上げながら、恵梨香に訊いた。
「そう……」恵梨香もアパートを見上げ、あの頃の夜を思い出さないではいられなかった。

「はじめまして、私、石田つくしです」と、ドアを開けて顔を見せたカンナに、つくしは深々とお辞儀をして、挨拶した。
「なにしに来たの？　このこ誰？」と、カンナは怪訝そうな表情で恵梨香に訊いた。
「えっと、あの……」恵梨香はカンナに視線を向けられず、もじもじしていた。
「あの私、恵梨香さんとバンドをやっているんですけど、カンナさんにウチのバンドで一緒にやってもらえないかと、お願いに来たんですけど」
「バンド？」カンナはつくしに視線を移した。
「はい！」つくしは元気よく答えた。
「あの……、無理にとは……、言わないから……」と横から恵梨香が言うと、つくしは「いえ！　どうしても、カンナさんに一緒にやってもらいたいんです！」とカンナに迫った。
「ふーん……」カンナは腕組みをして、考え込むように呟くと、恵梨香の方に視線を向けた。
　恵梨香は思わず視線を逸らした。
「あんた、まだあの男と付き合ってんの？」
　カンナの言葉に恵梨香はどきりとした。
「えー！　恵梨香さん、彼氏いるんだ！」
「いや……、あの……」

恵梨香が戸惑っていると、「まあ、いいわ」とカンナは言ってつくしの方に視線を移した。
「やってあげるわ。バンド」
「ほんとですか！？」
恵梨香が驚いた表情をして、カンナを見ると、カンナはにやりと口元を緩ませて、「あなた可愛いわね、仲良くしましょうね」と、つくしの髪を撫でながら言った。
恵梨香はどきりとした。カンナがつくしを見ながら舌なめずりをしたのを見逃さなかった。

「よかったですね、恵梨香さん！」
帰り際、そう言って喜んでいるつくしに恵梨香は言った。
「つくしちゃん、絶対にカンナと二人きりになっちゃ駄目よ」
恵梨香の言葉につくしは首を傾げた。
「いい！？　約束よ！　絶対に駄目だから」
恵梨香がつくしの両肩を掴んで、必死な表情で言うと、「なんかよく分からないけど、分かった……」とつくしはおずおずと答えた。
それでも恵梨香は、心の中に沸いてくる不安な気持ちを抑えることが出来なかった――。

―6―

夕暮れ時、カンナはつくしの家の店の前に立っていた。店は今日は休みらしい。店の左側の路地を覗くと、自宅の入り口らしい扉が見えた。カンナはそこへ向かって、路地を入っていった。

「カンナさん！」玄関を開けて出てきたつくしは、カンナを見ると驚いた表情を見せた。

「今、大丈夫かしら」カンナは努めて落ち着いた口調で言った。

「はい！　どうぞ！」と、つくしは嬉しそうな表情で言うと、カンナを自宅へ上げた。

「家の人は？」

「お父さんと二人暮らしなんですけど、商店街の旅行へ行っていて、明日まで一人なんです」

「そう……」カンナは冷静さを保とうと、必死になっていた。

（チャーンス！　なんていう幸運。こんなタイミング、絶対逃しちゃ駄目だわ！）

「でも、どうしたんですか？　突然に」

「えっ？　あ……、あの……、ほら、そう……、バンドのこと知りたかったから、つくしちゃんに色々聞いてみたくて……」

「そうだったんですか！　じゃあ、私の部屋へどうぞ！」と、つくしはニコニコ顔で階段を先に上っていった。

カンナは大きく安堵の息を吐き、つくしの後をついていった。先に階段を上がるつくしを見上げ、（ぷりぷりの可愛いお尻……）と、つい涎が垂れそうになるのを必死に堪えた。

「どうぞ！」と、つくしが部屋のドアを開けたので、カンナは部屋の中へ入ろうとしたが、思わず立ち止まった。足元に、小さな犬がいて、自分を見上げていたからだ。

（なにこれ……、パグだっけ？）

「あっ、このこ、チャッピーです。知り合いの人に頼まれて、飼う

ことにしたんです。大人しいから、全然大丈夫ですよ」
　カンナが床に足を崩して座ると、チャッピーは、カンナの太もも辺りにもたれかかるように寝そべった。
（なに、この犬。馴れ馴れしいわね）
「カンナさんが気に入ったみたいですね」つくしはそう言うと、先日バンドの練習をしたときに録音したＭＤをコンポにセットして、カンナに聴かせた。
（へえ……、このこ凄いわ。恵梨香がやる気になるだけあるわ……）
　カンナはつくしに会いに来た目的を忘れて、バンドの演奏に聴き入っていた。
「どうですか？」曲が終わると、つくしはカンナに心配そうな表情で訊いた。
「えっ？　ああ、よかったわ。凄い。びっくりしちゃった。近場にあなたみたいな凄いこがいたなんて、ほんとに驚いちゃったわ」
「ほんとですか。よかったあ……」と、つくしはほっとした表情を見せて言った。
　その後、バンドの話で二人は盛り上がっていた。
「恵梨香とは高校のときからの付き合いでね。しょっちゅうバンドをやろうって言ってたんだけど、結局いい人がなかなか見つからなくて、ずっと二人でやってたの」
「そうなんですか」
「でも、つくしちゃんとやることになって、よかったわ」
「ありがとうございます！　そうだ！　カンナさん、晩御飯食べていってください。店のカレーですけど、沢山ありますので」
「ええ、ありがとう。そうだ、今日私、泊まっていっちゃおうかしら、もっとバンドの話も聞きたいし、お父さんいなくて一人じゃ寂しいでしょ？」
「はい！　ぜひぜひ！」と、つくしが嬉しそうに答えると、カンナは心の中でガッツポーズをしていた。

夕食を終え、暫く雑談した後、先に風呂に入ったカンナは、つくしが風呂から上がってくるまで、つくしの部屋で待っていると言って、彼女の部屋へ向かった。そして、つくしの部屋へ入ると、ウキウキとした表情で、着ていたものを脱ぎだした。
（ムフフ……。ああ、久しぶり。わくわくしちゃうわ……）
カンナは着ていたものを全て脱ぎ捨てると、つくしのベッドに潜り込んだ。
（ああ、つくしちゃんの匂い……。たまらないわあ……。早く来ないかしら。もう、待ちきれない……。んっ！？）
「えっ！？　なに！？　いや！　ああ！　やだ！　凄い！　ああ！　ああ！」
カンナは突然つくしのベッドの中で喘ぎだした。

「ああ、さっぱりした」つくしは、風呂から上がり、水をごくごく飲むと、「そうだ、カンナさんと新曲の話しよっと」と言って、自分の部屋へと向かっていった。
二階の自分の部屋のドアを開け、つくしは目を見開いて凍りついたように、立ち尽くした。
「か……、か……、カンナ……さん……」
カンナが丸裸で、チャッピーを抱きしめて立っていた。
「つくしちゃん！」
「ひゃっ、ひゃい！」
「お願い、つくしちゃん！　チャッピーちゃんを私に頂戴！」
「ひぇっ！？」
「お願い！　私、チャッピーちゃんがいないと駄目なの！」
「お願い！」と、カンナが素っ裸でつくしに迫ってくると、つくしは引きつらせた顔をカクカクと縦に何度も振った。
それを見たカンナは物凄い勢いで、服を着ると荷物をまとめだした。

「それじゃあ私帰るから！」
「へっ？　あの……」
「じゃあね！　バイバイ！」
つくしはチャッピーを抱いて去っていくカンナを、唖然とした表情で見送った。

＊

恵梨香がスタジオへ入ると、カンナと小梅としおんが雑談していた。つくしはまだ来ていないようだった。
「あれ？　カンナんちいったんだけど」
「ああ、私引っ越したのよ」
「えっ？　そうなの？」
「あそこペット飼えないから」
「ペット？」
「そう、つくしちゃんから譲ってもらったのよ。チャッピーって言う、雄のパグ」
「つくしちゃんに？」
恵梨香はカンナがつくしと会っていたことを知り、なんだか不安になってきた。
（あれだけ二人で会うなって言ったのに……）
恵梨香は心配になって、つくしの携帯電話に電話を入れようとしていると、スタジオの扉が開いた。
「お待たせしました！　お父さんが練習見たいってうるさいから、遅れちゃって……」
つくしの元気そうな姿を見て、恵梨香はほっと溜息を吐いた。
つくしはスタジオの中を見渡すと、カンナに声を掛けた。
「カンナさん、チャッピーちゃん元気ですか？」
「ああ、元気よ。でもねえ……」
「えっ？　でも何ですか？」

「んっ？　ああ、普通のバターはあんまり好きじゃないみたいなのよ……」
「バター？」つくしと恵梨香は声を揃えて言った。
「んっ？　うん。でも、ピーナッツバターは好きみたい。もう舐めまくりで、すっごくって、腰が抜けそうになるわ」
（舐めまくり？　腰が？）
「へえ、チャッピーちゃんがそんなの好きなんて知らなかった。今度差し入れしますね」
「ありがとう、つくしちゃん。助かるわ」
（まさか……）恵梨香はカンナとチャッピーの様子を想像して鳥肌を立てていた。
「そうだ！　みなさん！」恵梨香が寒気を抑えている隣で、つくしが声を張り上げた。
「なによ、いきなりでっかい声出して」小梅が怪訝そうな表情で言った。
「新曲作ってきました」
「へえ、どんなの？」しおんが興味深げに訊いた。
「カンナさんが入ってくれたので、ピアノ中心のバラードにしたいんです」つくしは皆に譜面を配りながら言うと、ＭＤを持ってきたコンポにセットした。
　コンポからは、ゆったりとしたアコースティックギターの演奏が始まった。
「誰がギター弾いてんの？」恵梨香が驚いたように目を丸くして訊いた。
「お父さん。びっくりしちゃった。お父さんがギター弾けるなんて知らなかったから。結構上手いんですよ、これが――」つくしは照れた表情で答えた。
「結構いいんじゃない。でも、歌詞がめちゃくちゃね」曲が終わると小梅が言った。

「ＹＵＩ語じゃなくて、つくし語ね」しおんが言った。
「イメージは出来てるんですけど、まだまとまってなくて」つくしはテレた表情で言った。
「じゃあ、歌詞が出来たらやりましょう。それまでは各自がアレンジを考えるってことで」恵梨香が言うと、皆頷いた。

＊

カンナが加わり、数週間がたっていた。この頃は、地元のライブハウスのレギュラーバンドになるために、オーディションを受けようと、猛練習に励んでいた――。
スタジオの中に恵梨香のハードなギターソロが響いている。それを支えるように、しおんと小梅は重厚なリズムを刻む。そしてカンナのメロディーがさらに盛り上げていく。
そんなご機嫌なサウンドで満たされたスタジオの真ん中で、ワイヤレスマイクを握り締めたつくしが額に汗を滲ませて立っていた。
ギターソロが終わりかける。つくしはゆっくりとマイクを持った手を上げていく。
しかし、口元まで行く前に、マイクはつくしの手から滑り落ちた。ごろごろと床を転がるマイクの横に、つくしはどさりと膝をついた。
皆、演奏を止め驚いた顔を見せた。
「つくしちゃん！」床に蹲っているつくしを恵梨香が抱き起こした。
「やだ！　凄い熱！」
「どれ？」と、小梅もつくしの額に手を当てた。
「げっ！　ほんとだ！　あんた、なんで具合悪いのに、練習なんかにきたのよ」
つくしはうつろな目を小梅に向けた。
「だって……。もう直ぐライブハウスのオーディション……、だから……」

「そんなこと言ったって、ぶっ倒れてちゃしょうがないでしょ！」と、小梅はつくしを叱るように言うと、彼女を背負った。そして、「ウチまで送ってくるわ」と小梅が言うと、「私も行くわ」と恵梨香も一緒に、スタジオを出た。

つくしを家まで送り、小梅はベッドにつくしを寝かせた。つくしはぐったりとした表情で眠っている。

「えっと、着替えとかどこですか？」後ろに立っていた、栗雄に恵梨香は訊いた。

「いやあ、まいったな。部屋に入ると怒られるもんでね。どこに何があるんだか……」と、栗雄はおろおろしながら答えた。

「じゃあ、私が勝手に探しちゃってもいいですか？」と、恵梨香が訊くと、「多分、私が探すよりは、そのほうがいいかも。勝手にタンスなんか見たら、暫く口利いてくれなくなるから」と栗雄は申し訳なさそうに言った。

恵梨香がタンスから、着替えの下着とパジャマを見つけ出すと、小梅が水枕と薬を持って、部屋に戻ってきた。

「全く、こういうときに、父親って言うのは本当に役に立たないね」と、小梅はぼやきながら、つくしを水枕に寝かせた。

「まあまあ、仕方がないでしょ。今日は私が泊まって看病するから」と、恵梨香はつくしの額に濡れタオルを乗せながら言った。

「そう、じゃあお願いするわ」

「オッケー、任せて」と言って、恵梨香は小梅を見送った。

つくしに目を向けると、彼女は汗だくになっていた。

「凄い汗ね……」恵梨香はタオルでつくしの顔の汗を拭いてあげると、パジャマに着替えさせようと、つくしの服を脱がし始めた。

絞ったタオルで身体を拭いてあげていると、「んん……」とつくしは甘ったるい声を出した。恵梨香はハッとした。無意識のうちにつくしの胸を揉んでいた。

（やだ私なにやってんの？）

恵梨香は慌ててつくしにパジャマを着せた。
パジャマを着せ終わると、ほっと息をついてつくしの顔を見た。つくしは少し気持ちよさそうな表情になって、すやすやと眠っている。
恵梨香は知らず知らずのうちに、つくしの顔に見入っている自分に気がついて、気を紛らわせようと、つくしのギターを手に取ってみたり、本棚の本を眺めてみたりしていたが、それでも暫くすると、またつくしの顔を覗きこんで、かさかさになっている彼女の唇をじっと見つめて、ごくりと唾を飲み込んでいたりしていた。
（やだ……、私どうなっちゃってんの？）
つくしが寝返りを打って、尻が布団から覗いている。恵梨香はついついその尻に、パフッと顔を埋めたいなどと思っていた。
（やばい！　私なんか変だ！）
恵梨香はその夜、悶々とした時間を過ごした――。

＊

恵梨香は自分の部屋のベッドにもたれかかり、ギターを抱えた。まだ歌詞のついていない、つくしの曲のアレンジを考えようと思ったからだ。
つくしから貰ったＭＤを再生すると、目を閉じてイメージを膨らませようと、つくしの歌声に耳を集中した。
でも、まったく曲を聴くことに集中できなかった。つくしの顔が浮かんできて、しかたがなかった。気がつくと、彼女に会いたがっている。
恵梨香はギターを床に置いて、膝を抱えた。
（どうしよう……、私なんかおかしいよ……）
携帯電話の着信音が鳴った。携帯電話を見ると、健司からの電話だった。恵梨香は慌てて着信ボタンを押した。
健司からの電話の内容は、恵梨香が以前から見たいと言っていた

映画のＤＶＤを手に入れることが出来たので、一緒に見ないか？
という誘いの電話だった。
勿論恵梨香は快諾し、健司を家に呼んだ。
恵梨香は健司が来るまでの間に、部屋の掃除を済ませ、シャワーを浴び、ワインと摘まみの準備を始めた。
摘まみの用意が済んで暫くすると、健司がやってきた。
「こんな時間にごめんね？」暫くぶりに直接聞いた健司の声に、とても新鮮な感じを恵梨香は受けた。そして首を振り、はにかんだ表情を見せた。
部屋の照明を少し落とし、ローテーブルの前に並んで座ると、ワインを飲みながら、二人は映画を見始めた。
治療法がまだ見つかっていない、不治の病に犯された主人公の少女の夢は、歌手になることだった。少女がずっと思い続けていた少年は、彼女の自分に対する気持ちと、彼女の病気のことを知ると、彼女への思いが膨らんでいく。自分に出来ることはないか――。少年は考えた末、いつか訪れる別れの前に、彼女の夢を形に残したいと、必死にアルバイトをやり、稼いだ金で彼女の歌をＣＤにする。少年は出来たＣＤをラジオ局や有線放送局へ送り、放送してもらうように、リクエストを繰り返した。そんな頃、少女は遂にこの世を去ってしまう。向日葵で埋め尽くされた棺の中の彼女の表情は、とても穏やかだった。彼女を失った辛さを乗り越えようと、少年は必死に笑顔を作り、友達とじゃれあうように日々を過ごす。そして――、地元のローカルラジオ局のＦＭ放送から、彼女の歌が流れ出した。少年は彼女の歌声が流れるラジオを抱きしめる。少年の心の中で、彼女が蘇る。彼女は少年の心の中で、まだ生きている――。
恵梨香は、テレビ画面を見つめて涙を堪えた。すると、健司の手が恵梨香の肩にかかり、彼女を引き寄せた。
恵梨香は健司の顔に目を向けた。健司の目は、真剣だった。
健司が顔を近づけてくる。恵梨香は息を止め、目を閉じた。
しかし、健司が口付けしようとした寸前に、恵梨香は顔を逸らし

ていた。健司は驚いたように恵梨香を見ている。
「ご、ごめんなさい！」
恵梨香は思わず健司に背を向けた。
「ぼ……、ぼくの方こそ……」
健司はそう言うと立ち上がった。顔が思いっきり引きつっている。
「ご、ごめん……。もう遅いから、今日は帰るから……」そう言って、健司はそそくさと恵梨香の部屋を後にした。
（バカ！　なにやってんの！　私！）
「バカ！　バカ！　バカ！」恵梨香は床に蹲って叫んでいた。
健司が迫ってきて目を閉じた途端、つくしの顔が浮かんできた。そしてその瞬間、恵梨香はつくしの歌をＣＤにしてあげたいという気持ちでいっぱいになっていた。無意識に健司を避けていた。
恵梨香は自分の気持ちが分からなくなってきていた――。

＊

ギターソロに入った途端、小梅は演奏を止めた。
「どうしたんですか？　小梅さん」つくしは不思議そうに小梅を見た。小梅は不機嫌そうな表情で恵梨香を見ている。
「ちょっと、エリちゃんさあ、何なの？　その気の抜けた演奏は。もう直ぐオーディションなんだけど、やる気ある？」
恵梨香は俯いたまま小梅の言葉を聞くと、ギターを肩から下ろした。
「恵梨香さん、どうしたんですか？」つくしは心配そうに恵梨香の傍へ近づいた。
恵梨香はついつい、つくしの顔をじっと見てしまっていた。
（もう駄目……、ぎゅって抱きしめたくてしょうがない……）
「恵梨香さん？」
恵梨香は思いっきり拳を握り締めると、大きく息を吸って、つくしから目を逸らした。

「ごめんなさい。私ちょっと体調が悪くて」恵梨香はそう言うと、ギターを片付け始めた。
「えっ？　恵梨香さん大丈夫ですか？　ひょっとして私の風邪がうつったんじゃないですか？」つくしは心配そうな表情で恵梨香に必死に話しかけていた。
恵梨香は何も答えずにスタジオを出て行った――。

真っ暗な部屋の中で、恵梨香は膝を抱えて座り込んでいた。自分がつくしを思っていることは明白だった。恵梨香はそのことにショックを受けていた。カンナと関係していたときは自分はあくまでも普通だと思っていた。おかしいのはカンナの方だと恵梨香は思っていた。
（どうしよう……）
つくしの傍を離れたくない。でも、一緒にいると変な気持ちが沸き起こってくる。
（どうしたら……）
玄関のチャイムが鳴り、恵梨香は仕方なさそうに、ゆっくりと立ち上がって部屋の明かりをつけた。
ドアの覗き窓から見ると、つくしの姿が見えた。恵梨香は驚き、急いで玄関のドアを開けた。
「恵梨香さん、具合どうですか？」つくしは心配そうな表情で訊いた。
「ええ、大丈夫よ。どうぞ、上がって？」
つくしは少し表情を和らげて頷いた。
「ごめんなさいね、心配掛けて」恵梨香はつくしが座ると言った。
「恵梨香さん、何か悩み事でもあるんじゃないかと思って……。私なんかじゃきっと何にも出来ないと思うんですけど、なんだかとっても心配で……」
「優しいのね、つくしちゃんは……」

恵梨香は必死に落ち着いた口調で言った。
今、つくしと二人っきりでいるかと思うと、どうにかなってしまいそうだった。
「私、今歌うのが本当に楽しくて――。恵梨香さんのおかげなんです。恵梨香さんがいなかったら、私こんなに歌にのめり込めなかったと思うんです。だから、力になりたいんです。恵梨香さんは……、大切な人だから……」
恵梨香はつくしに目を向けた。
「私に、何か出来ることありますか？」つくしは真剣な目をして言った。
「あるわ」と言った次の瞬間、恵梨香はつくしを抱きしめていた。
「えっ？　あの、恵梨香さん？」
「つくしちゃん……、私……、私つくしちゃんのことが好きなの！」
「えっ？　あの、えっ？」
「私の恋人になって！？」
「えっ！？」
恵梨香はつくしを床へ押し倒した。つくしはもがいて起き上がろうとする。しかし恵梨香はつくしの腕を押さえつけて、どんどん顔をつくしへ寄せていく。
「いや！　ごめんなさい！　いや！」
もう恵梨香は自分を抑えることが出来なかった。今、恵梨香の頭の中にあることは、つくしを奪うことだけだった。

＊

七色にライトアップされた幻想的な噴水広場の片隅のベンチで、恵梨香は一人でぽつんと座って噴水を眺めていた。
つくしと出会った日の記憶が蘇ってくる。つくしの左手を見て驚いたこと。つくしの歌を聴いて感激したこと。二人でこの噴水広場で演奏することに夢中になっていた頃のこと――。

（もう……、終わりだ……）
恵梨香はがっくりと肩を落とした。
結局つくしの涙を見た途端、恵梨香は何も出来なくなってしまった。それと同時に、取り返しの出来ないことをしたと後悔した。つくしに謝ろうとしたが、彼女は直ぐに泣きながら部屋を出て行ってしまった。
ふと足元にパグが寄ってきたのを見て、恵梨香はハッとした。
「いたいた。こんなところに」
カンナの声が聞こえて恵梨香は顔を上げた。
カンナは恵梨香の隣に腰を下ろした。
「あんたもつくしちゃんも練習に来ないからさ、小梅ねえさんがかんかんに怒って大変だったんだから」
「ごめん……」
「んで、なにがあったのさ」
「私……、つくしちゃんのことが……」
恵梨香はカンナに全てを打ち明けた――。
カンナは恵梨香の話を聞くと、腹を抱えて笑い出した。
「なによ！　ひとが真剣に悩んでるっていうのに！」
「だって、ひひひ――。ありえないでしょ？　ふふふ、そんなこと」
「私は本気なの！」
「バカ言ってんじゃないわよ。あんたはそういうタイプじゃないわよ」
「だって……、カンナとは……」
「本気だった？」
「それは……」恵梨香は目を伏せた。
「本物のレズが言うんだから間違いないわ。あんたは全然普通。彼氏と上手くいってないだけよ。目、覚ましなさいな」
「そうなのかしら……」
「そうよ」とカンナは言うと、チャッピーを連れて帰っていった。

恵梨香は暫くぼんやりと噴水を眺めていた後、溜息をついてゆっくりと立ち上がり、重そうな足取りで公園を後にした。
自宅のアパートの前に着くと、健司が立っていた。
「ごめん、こんな時間に……」健司はすまなそうに言った。
恵梨香ははにかんだ笑顔を見せて首を振ると、健司を部屋へ案内した。
「あの……、ビールでいいですか？」
「いや……、話しがあるんだ。真剣な話……」
恵梨香は黙って頷くと、健司の前に正座した。
「あの……、僕は恵梨香さんが好きなんだ。真剣に付き合って欲しいと思ってる」
恵梨香は健司の目をじっと見つめた。
「この間は、いきなりおかしなことをしようとして、本当に申し訳ないと思ってる。どうか、嫌いにならないでほしい……」
「私……」恵梨香は言葉を飲み込んだ。
「あの……」健司は不安そうな表情で言った。
恵梨香は意を決して告白することにした――。
「私……、むかし女性と付き合っていたことがあるんです」恵梨香はそう言うと奥歯をかみ締めた。
「知ってる……」
「えっ？」恵梨香は驚いたように目を見開いた。
「恵梨香さんと一緒にやっていた、ピアノの人でしょ？」
「なんで？」
「彼女から聞いた。私の恵梨香を奪わないでって言われた」
「あの……、それじゃ……」
「彼女と肉体関係があったことも知ってる」
「あの……、いいんですか？　そんな私でもいいんですか？」
「かまわない」
「でも！　私、男の人に抱かれたいって、全然思わないんですよ？　そんなんでも、いいんですか？」

「かまわないよ」
「どうして……」
「僕は……」健司は俯いた。そして、顔を上げると、真剣な目を恵梨香に向けた。
「僕は、不能なんだ」
「えっ？」恵梨香はまた驚いた。
「抱きたくても、抱けないんだ。それでも恵梨香さんを好きな気持ちは抑えきれない。逆にこんな僕でも付き合って欲しい。僕は恵梨香さんが好きなんだ」
恵梨香は健司のことを急激に愛おしくなっていく自分を感じた――。

―7―

玄関のドアを開けると、チャッピーが飛び込んできた。
「チャッピー！」
嬉しそうにチャッピーを撫で回しているつくしに、カンナは訊いた。
「今、大丈夫かしら」
「カンナさんいらっしゃい。はい、大丈夫です」
「恵梨香のことなんだけど」カンナは出されたコーヒーを一口啜ると言った。
つくしはコーヒーを飲みかけて、カップをテーブルに戻した。
「あのこ、なんか勘違いしてるのよ」
「勘違い？」
「そう。本当はつくしちゃんの歌がただ好きなだけなのに、つくしちゃんに恋愛感情を持ったと勘違いしてるのよ」
「そう……、なんですか……。そうですよね？　多分……」
「そう、だから恵梨香のこと、許してあげて欲しいの」
「はい、あの……、私は全然……、ええ、平気ですから……」本当はショックであの日からろくに食事を取ることも、寝ることも出来ないでいた。
「バンド――、やめないでね？」
カンナの言葉につくしが黙って頷くと、カンナはにっこりと微笑んで立ち上がった。
「じゃあ、明日は練習に来てね？　もう直ぐオーディションだから、小梅ねえさんがぴりぴりしてて困ってるのよ。お願いね？」
「はい……、あっ、そうだ！　カンナさんに渡すものがあったんです」
つくしはカンナを玄関に待たせると、奥の部屋からスーパーの袋

を持って戻ってきた。
「これ、チャッピーちゃんに」
カンナは袋の中を見ると、パッと明るい表情を見せた。
「ありがとう！　つくしちゃん！　助かるわ！」カンナは袋の中からピーナッツバターを一つ取り出すと、笑顔でつくしに言った。そして、チャッピーを連れて帰っていった。

つくしは自分の部屋へ戻った。そして、ギターを手にすると、胡坐を組んで構えた。
一弦のチューニングを確認する。
前なら最後にGのコードを鳴らしてチューニングを確認するところだが、今は出来ない。
つくしは目を瞑り二本の指でゆっくりとメロディーを奏で始めた。まだ、歌詞の出来ていない新曲のメロディーだった。
弾きながら、初めて恵梨香の演奏を見たときのことを、つくしは思い出していた。
恵梨香の演奏は本当に感動的だった。恵梨香と一緒にやりたいと心の底から思った。本当に恵梨香を尊敬していた。もし、自分が男なら、恵梨香の要求に素直に応えただろう……。でも、自分は女だ。それは出来ない。
あの日の獣のような恵梨香を思い出し、つくしはギターを弾く手を止めた。そして、大きく溜息を吐いた。
本当に、勘違いだったのだろうか……。

季節は秋も終わりに近づいていた。
つくしは寒そうに背中を丸め、健司の家に向かっていた。恵梨香とのことがあってから、暫くヘレンの散歩をサボっていたが、急にヘレンに会いたくなって、夕食を食べ終わると直ぐに家を出てきた。
健司は留守だった。代わりに獣医でもある、健司の父親がつくし

を迎えた。
「やあやあ、つくしちゃんか」
「すいません。ヘレンの散歩ずっとサボてて」つくしはそう言うと、丁寧にお辞儀をした。
「いやあ、そんなことはいいんだよ。それよりよく来てくれた。実はヘレンがおとといから具合が悪くて寝込んでいるんだよ」
「ええ！　ヘレンが！？」
治療室の片隅のベッドの上に、ヘレンは寝かされていた。
つくしがそうっと覗き込むと、ヘレンはぐったりといった感じで眠っていた。
健司の父親はしんみりとした口調で言った。
「事故の後遺症が今になって出てきたみたいでね……」
つくしは振り向いて、健司の父親にすがりつくようにして言った。
「先生、ヘレンを助けてください。お願いします」
「うん。わかっとるよ。とりあえず出来ることは全部やった。後はヘレン次第なんじゃ」
つくしは真剣な目で頷いて、今晩は看病させてもらうことにした。
ベッドの上でぐったりとしているヘレンの頭を優しく撫でながら、つくしは呟くように語り掛けた。
「ヘレン……、ごめんなさい……。ずっと会いに来て上げられなくて……。これからは、ちゃんと毎日来るからね？　だから……、元気になって？　ねえ、ヘレン？　聞こえてる？」

左の頬をひたひたと何かがくすぐっている。つくしはそれに気がついて、ハッと目を開けた。
「ヘレン！」
ヘレンはくうんくうんとおねだりするような声を出した。
「待てて！　今、先生を呼んでくるから！」つくしは急いで病室を飛び出した。

ヘレンに聴診器を当てている健司の父親の後ろから、もどかしそうな表情をしてつくしは訊いた。
「どうですか！？　先生！」
「うーん、眠いのう……」
「先生！　しっかりしてください！」
「分かった、分かった。ちょっと落ち着きんしゃい」
ヘレンの診察をしている健司の父親の後ろで、つくしはきがきではない様子で、診察を見ていた。
健司の父親は聴診器を外した。
「先生！？」
健司の父親は振り向くと、にっこりと笑って、「もう大丈夫じゃ」と言った。
「先生！　ありがとうございます！」
つくしは礼を言うと、ヘレンを抱きかかえた。
「ヘレン！　よかったね？　頑張ったね？　私も頑張るから！　私、ヘレンのために歌うから！」
ヘレンは嬉しそうに、つくしの顔を嘗め回した。

＊

スタジオの横の小窓から覗くと、バンドのメンバーたちはもう揃っていた。
つくしは大きく息を吸い込み、スタジオのドアの取っ手に手を掛けた。
「皆さん！　お待たせしました！」
スタジオへ入ると、恵梨香が傍へ来た。
「つくしちゃん……、あの……」
「はい！　恵梨香さん！　これからも、バンド、頑張りましょう！」
つくしが恵梨香の手を握ってそう言うと、恵梨香はきょとんとした表情を見せた。その後ろでは、カンナがクスクスと笑っている。

「やっと来たわね、つくしんぼ」
小梅がスタジオの奥のパイプ椅子に座り、腕を組んで貧乏ゆすりをしていた。
「すいません……」つくしは殺気を感じて、寒気を押さえた。
「まあ、いいわ。ライブハウスのオーディションは来週だからね。気合入れてやるよ！」
小梅が言うと、皆きりっとした目になった。

つくしは楽器を準備しているメンバーを見渡して、声を張り上げた。
「みなさん！」
小梅が怪訝そうな表情で、つくしに顔を向けた。
「はあ？　なによ」
「新曲の歌詞が出来たんです！」
「そう、じゃあ早速やりましょうか？」恵梨香が言うと、皆頷いた。
渡された新しい譜面を眺め、しおんは呟いた。
「へレン？」
「はい！　今朝書いたんです」
「ふーん」と言って、カンナは新しい譜面を見ながら、ピアノを弾き始めた。ゆったりとしたバラード風なピアノだった。
つくしは目を瞑り、マイクを口元へ持っていった――。

＊

真っ暗な部屋の中、ベッドの上で横になっている人影があった。
さらにもう一つ、その人影の股間辺りに蹲っている人影がある。
「もういいよ。エリ……」
健司の股間から恵梨香が顔を上げた。
「だめ？」
健司は恵梨香の腕を取って、横に寝かせると、抱きしめてキスを

した。そして、唇を離すと寂しそうな顔をして謝った。
「ごめん……」
恵梨香は小さく首を振った。
健司は本当に不能だった。恵梨香が何をしても元気になる気配もない。
つくしへの思いも消え、今は健司のことを真剣に思っていた。やはり自分は普通だったと今は自覚していた。それだけに、今度は健司が不能なことを寂しく思っていた。
（健司さんは病気なんだ。私が理解してあげなくちゃ……）
恵梨香はそう思うと、健司にキスをした。
「今度、ライブハウスで演奏することになったの」
「そうなんだ、じゃあ見に行くよ」
「うん。自分で言うのもなんだけど、結構いけてると思ってる。ボーカルのこが凄いのよ。マジでメジャーを目指そうと私は思ってるの」
「へえ、そうなんだ。エリが認めるこだったら凄いんだろうね、ボーカルのこ」
「まだ、高校生なんだけどね」

＊

ライブハウスでの初ライブの客の入りは、まずまずだった。メンバーの知り合いも多かったが、つくしと恵梨香のストリート時代のファンもかなり来ていたようだった。
大盛況でエンディングを終えると、アンコールを二曲やり、メンバーは満足気な表情で、ステージを後にした。
控え室へ戻ると、小梅は汗を拭きながら叫んだ。
「うおお！　すっきりしたー！」
その横で、つくしが泣きべそをかいていた。
「なんか、感動しちゃいました……」

そんなつくしにしおんが抱きついて、「私もー！」と叫んだ。
抱き合って感動の涙を流している二人を見て恵梨香は微笑むと言った。
「まあ、合格ね」
恵梨香の言葉にカンナが相槌を打った。二人はいたって冷静といった感じだった。

翌日の晩、つくしの家のカレー専門店で、打ち上げをやることになっていた。
栗雄はカレーの鍋をかき混ぜながらしみじみとした口調で言った。
「それにしてもいいバンドだな。お父さん感動したぞ」
「ええ！　お父さん来たの！？」
「えっ？　行ったけど？」
「なんでよ！　かってに来ないでよ！」
「ええ！　なんで、いいじゃんかよ」
「だめよ！　それに、お店はどうしたのよ」
「店なんかやってる場合じゃないだろ？」
「何言ってんのよ！　今度勝手に来たら、口利かないからね！」
「ええ……、なんでだよ……」
うな垂れて鍋をかき混ぜている栗雄の隣で、つくしは口を尖らせてサラダを作っていた。
夕方、しおんとカンナがやってきてから、暫くして小梅が現れた。
小梅は店の中を見渡してつくしに訊いた。
「エリちゃんは？」
「ちょっと遅れるって電話ありました」
「ふーん、そう、ほんじゃとりあえずはじめましょうか」
小梅が乾杯の音頭を取り、打ち上げが始まった。
小梅はジョッキのビールをぐいぐいと半分ほど飲み干すと、プハーっとオヤジのように息を吐いて、口の周りについた泡を手で拭っ

てから言った。
「最初にしてはまずまずだったわね」
するとしおんが立ち上がって小梅に向かって言った。
「私！　プロになりたいんです！」
「プロねえ……」
小梅はつくしとカンナを交互に見て、「あんたたちはどうなの？」と訊いた。
「私は……」
つくしが口ごもっていると、「こいつは当然プロでやらせます」と栗雄が答えた。
「なんでお父さんが決めるのよ！」
「いいの！　もう決まってるの！」
「なんでよ！　勝手に決めないでよ！」
小梅はなだめるようにつくしと栗雄の会話に口を挟んだ。
「はいはい、分かったから」
その後、カンナは落ち着いた口調で言った。
「私はつくしちゃんとだったらやってもいいわ」
「そうね、つくしんぼがいなくちゃウチのバンドは成り立たないからね」
しおんは必死な表情になって、つくしの手を握り締めた。
「つくしちゃん！　お願い！　一緒にプロになって！」
つくしはどうしようといった表情で頷いていたが、勿論つくしもプロ志望だった。初のライブは感動的だったし、歌うことに喜びも自信も沸いてきていた。
カランカランとドアのベルがけたたましく鳴った。つくしが目を向けると、恵梨香が入ってきた。つくしは声を出そうとして、息を呑んだ。
恵梨香の後に続いて、男性が一人入ってきた。
「先生！」つくしは目を丸くして言った。
「よう、石田。久しぶり」

恵梨香と一緒に来たのは健司だった。
「なっ、なんで恵梨香さんと？」
恵梨香ははにかんで健司を見ただけで、答えなかった。
小梅が怪訝そうな表情で「誰よ、その男」と恵梨香に訊くと、「恵梨香の彼氏よ」と、カンナがふて腐れた顔で代わりに答えた。
「ええ！」つくしとしおんが目を丸くして叫んだ。
「まさか石田がボーカルだったとは思わなかったぞ」
つくしは驚いた顔のまま、健司を見て絶句していた。
ショックで口が利けなくなっているつくしをよそに、しおんが恵梨香に話しかけた。
「ねえねえ、恵梨香さん？」
「さっき、みんなとプロを目指そうって話してたんだけど、恵梨香さんはどう？」
「もちろん、考えてるわ。つくしちゃんの歌なら十分可能性あると思うわ」
「じゃあ、決まりね」と小梅は言って、ビールのジョッキを手に取った。
「ほんじゃ、本格的にプロを目指すってことで、乾杯すんべ」
小梅が言うと、皆グラスを手に取った。
「カンパーイ！」と言ってグラスを合わせあう中に、つくしのグラスはなかった。
恵梨香は不思議そうな顔をしてつくしを見た。
「どうしたの？　つくしちゃん」
「私……」
健司も不思議そうな顔で訊いた。
「どうしたんだ？　石田」
つくしは顔を伏せた。
「私……」
「何よ」と小梅が言うと、つくしは顔を上げた。
「私、別に歌なんて歌いたくないです！」

皆が唖然としてつくしに注目すると、つくしは店から飛び出して行った。

＊

中央公園の噴水広場のベンチにつくしはいた。恵梨香はほっと表情を和らげて、つくしの傍へ近づいていった。

直ぐ傍まで行くと、つくしはハッと顔を上げて恵梨香を見ると、直ぐに俯いて口をきつく閉じた。

恵梨香はつくしの隣に座ってつくしの顔を覗きこんだ。

「どうしたの？」

「……」

恵梨香はふっと微笑むと、口を開いた。

「小梅さんがね、インディーズからＣＤだそうって、つくしちゃんも出したいでしょ？　自分のＣＤ」

「……」

「みんな、心配してるよ」

つくしは横を向いたままだった。

「つくしちゃん？」

「恵梨香さんは……」

「なに？」

「恵梨香さんは、私のことが好きだったんじゃないですか？」

「……ごめん、……あれは……」

「恵梨香さん……、彼氏がいるのにひどいじゃないですか……」

「あの……、あのことは謝るわ……。本当にごめんなさい……。でも、つくしちゃんは大好きよ。恋人になってほしいとかそういうんじゃなくて、本当につくしちゃんと一緒にバンドをやれて良かったと思ってる。つくしちゃんの歌が大好なの」

「本当に私とバンドをやりたいんですか？」

「ええ、もちろんよ」

つくしは恵梨香に真剣な目を向けた。
「じゃあ、先生と別れてください」
「えっ？」
「私は、大好きなギターも弾くことが出来なくなって、そしたら今度は大好きな人も奪われて……」
「つくしちゃん……、まさか……」
「なんで私ばっかり不幸で、恵梨香さんばっかり幸せなんですか！？　ずるいじゃないですか！　一つくらい私に分けてくれたっていいじゃないですか！　私の先生を奪わないでください！　先生と別れてください！」
恵梨香は顔を伏せた。
「それは……」
「もう……、バンドなんて興味ないです！」
つくしの言葉に恵梨香は驚いて顔を上げたが、つくしはもう、走り去った後だった。

＊

夕食を終え、つくしはぼんやりとテレビを眺めていた。ドックフードのＣＭに出ている犬を見て、ヘレンのことを思い出した。恵梨香と健司が付き合っていることを知ってから、またヘレンの散歩をサボっていた。健司に会ってしまうのが嫌だったからだ。
（ヘレン……、元気かなあ……）
玄関のチャイムが鳴ったので、立ち上がろうとしたが、栗雄が玄関へ向かったのを見て、またテレビに目を向けた。すると、玄関のほうから犬の鳴き声がするのに気がつき、つくしは慌てて立ち上がった。
玄関へ行くと、健司がヘレンを抱っこして立っていた。
「石田、少し話があるんだけどいいかな？」
つくしは頷いて健司を自分の部屋へ案内した。

つくしが床に腰を下ろすと、健司も座ってヘレンを床に下ろした。ヘレンは不自由な足で必死につくしの傍へ這っていった。
つくしは膝元へ這ってきたヘレンを抱きかかえ愛おしそうに撫でてあげた。
「ヘレン……、ごめんね……、お散歩サボって……」
「石田が来ないと、ヘレンが元気なくてね……。あんまり餌も食べないんだよ」
「済みません……」
「いや……、石田が来なかった原因は分かるから……」
つくしは俯いてヘレンを抱きしめた。
「恵梨香が分かれたいって言ってきて……」
「えっ？」
「石田？」健司はつくしをじっと見つめてきた。つくしはごくりと唾を飲んだ。
「先生が恵梨香と別れても、先生と石田は付き合えないよ」
つくしは黙って頷いた。
「分かってます。先生……、恵梨香さんと別れないでください……。恵梨香さんを大事にしてあげてください……」
「ああ……、ありがとう……、石田……」
つくしは笑顔を作って健司を見たが、涙が頬を流れたのに驚いて、慌てて顔を逸らした。そんなつくしの頬を、ヘレンはちろちろと小さな舌で舐めた。
「でも私！　先生が好きです！　大好きです！」
健司は立ち上がってつくしの肩にそっと手を乗せた。
「先生も、石田の歌が大好きだ。石田がプロになることを応援してる。頑張れ、石田！　お前ならやれる。だから、バンドを辞めるなんて言うな。みんなお前の歌を待ってるんだからな！」
つくしは鳴き声を必死に堪えて、ただ頷いて返した――。

翌朝、久しぶりにヘレンの散歩に出た。

もう季節はすっかり冬だった。凍てつく空気が身も心も凍えさせるようだった。
つくしは大きく白い息を吐くと、横を進むヘレンを見つめた。
「これからは、毎日ちゃんとお散歩に行くからね」
後ろ足を車椅子に乗せ、必死に前足をちょこちょこと動かして、つくしの横を進んでいくヘレンを見つめ、早く立ち直らなければいけないとつくしは思っていた。
中央公園の野外音楽堂の裏へ出た。
「つくしちゃん！」
しおんが手を振って駆け寄ってきた。
二人は近くのベンチに腰を下ろした。
「つくしちゃん、どう？　元気でた？」
「えっ？」
「なんか分からないけど、カンナさんがつくしちゃんと恵梨香さんが落ち込んでて、暫くバンドは出来ないだろうって」
「そうなんだ……」
「大丈夫？」
「ええ、ごめんなさい……」
「そう、よかった。でも、なんかあったら相談してね」
「……」
「つくしちゃん？」
「しおんさんは……」
「なに？」
「しおんさんは、失恋したことありますか？」
「えっ？」
つくしは俯いて足元のヘレンを見つめた。
そんなつくしを見てしおんは微笑んだ。
「あると言えばあるし、ないと言えばないわ」
つくしは不思議そうな顔をしおんに向けた。
「彼氏……、死んじゃったのよ」

「えっ？」つくしは目を丸くしてしおんを見た。
「交通事故でね……、誕生日だったのよ。私と彼は誕生日が同じ日で、二人でデートする約束してたの。でも、彼は来なかった……。待ち合わせの場所へ来る途中で交通事故にあったの。私へのプレゼントを握り締めたまま……」
　つくしはごくりと唾を飲んだ。
「だから、もう彼に会うことが出来ないけれど、でも……、さよならを言っても、言われてもないわ。だから、まだ私と彼は恋人どうしよ」
「しおんさん……」
「どうしたの？　つくしちゃん、ひょっとして失恋した？」
　つくしは首を振った。
「私のなんて、失恋なんて言わないです。もともと上手くいくはずないって分かってたし」
　しおんは黙ってつくしを見つめていた。
「でも、しおんさんは強いですね」
「そんなことないわよ」
「でも……」
「彼が死んで暫くは落ち込んだわ。激痩せして、お母さんが心配して入院させようとしたくらいよ」
「でも、どうやって立ち直ったんですか？」
「夢があったの」
「夢？」
「そう、彼の夢」
「どんな？」
「彼はバンドでドラムをやってたの。彼はプロを目指してたわ。私は彼がプロになれるように必死に応援してた。だから、私は彼の意思を継いでプロになることを決心したの。ドラムを叩いていると、彼と一緒にいる気分になれるの。だから、今はちっとも寂しくないわ」

「しおんさん……」
つくしは俯いて涙を堪えた。
「やだあ、つくしちゃん」
つくしはすくっと立ち上がった。
「私！　感動しました！　私も頑張ります！　頑張って歌を歌います！」

学校から帰って二階へ上がろうとすると、居間の方から栗雄に呼ばれた。
「なに？　お父さん」
「さっき恵梨香ちゃんが来て、お前にこれを渡してくれって頼まれた」
栗雄は五センチメートルもない短いスチールのパイプをつくしに見せた。
つくしはそれを不思議そうな顔で手に取った。
「なに？　これ」
栗雄は呆れたような表情をして言った。
「お前、ギター好きを豪語してて、スライドバーも知らないの？」
つくしはぷくっと頬を膨らませた後言った。
「なによ、スライドバーって、いいから教えなさいよ」
栗雄は得意げに腕を組んだ。
「ボトルネックとも言うな。最初は酒のビンの口んとこを切り取って使ってたらしい」
「だから、なんなのよ。これって」
「スライドギターって知らないの？」
つくしは首を傾げて言った。
「スライドギター？」
栗雄はつくしの手からスライドバーを取り上げると、つくしを自分の部屋へ連れて行った。

つくしは栗雄の部屋を覗くと、目を見開いた。
「えっ！？　なにそれ！？　どうしたの？　お父さん！」
栗雄は部屋の隅に置いてあった、金色のエレキギターを抱えた。
答えない栗雄につくしはイライラした様子で訊いた。
「ねえ、お父さん！　それどうしたの？　いつ買ったの？」
「ええ？　お前が生まれるずっと前から持ってたよ」
「うそー！　なんで教えないのよ！」
「お父さんが教えようとしたって、お前の方がうるさがって、話を聞こうとしなかったろうが」
栗雄は呆れた顔をして、アンプの電源を入れた。そして、チューニングを確認する。
つくしはそんな栗雄の様子を、固唾を呑んで見ていた。
ガーンと歪んだコードを鳴らすと、ブルージーな短いフレーズを栗雄は弾いた。
すると今度はペグを回しチューニングを変え始めた。
「なにやってんの？　お父さん」
つくしが訊いても、栗雄は答えず、弦を押さえずに、バララーンと弦を弾いた。
「えっ？」つくしは目を丸くした。
「なにそれ？」
栗雄は微笑んで言った。
「オープンDチューニング」
「オープンD？」つくしは不思議そうな顔で呟いた。
「お前が知ってるチューニング方法は、レギュラーチューニングって言って、一般的なチューニング方法だ」
「レギュラーチューニング……」
「いいか、つくし。ギターのチューニング方法ってのはいっぱいあって、こうじゃなきゃいけないなんてことはないんだぞ。このオープンDチューニングってのは弦を押さえずにDのコードが弾けるチューニング方法だ」

栗雄はそこまで言うと、左手の小指にスライドバーをはめた――。

目から鱗が落ちると言うのはこういうことを言うんだと、つくしは思った。

スライドバーで弦を擦りながら弾いている父親の演奏はとても鮮烈で、これなら二本しか指がない自分の左手でも演奏出来るのではないかとつくしは思った。また大好きなギターが弾ける。その可能性に期待を膨らませながら、つくしは父親の演奏を食い入るように見つめていた。

―8―

家の工場での仕事を終え、ふうっと息を吐きながら、小梅は窓の外に目を向けた。空は茜色に輝いている。

「小梅ちゃん、お先に失礼するだに」

「ゲンさん、お疲れ！」

若い職人を引き連れて帰っていく小泉源五郎を、小梅は工場の出口で見送った。

東京の医療機器メーカーからの仕事を引き受けてから、工場の経営は順調だった。新しい職人も雇い、新しい仕事も請け負えるようになっていた。もう、何も心配なことはなかった。

小梅は工場の戸締りをすると、自宅の縁側に腰掛けて、ぼんやりと庭の梅の木を眺めた。工場の方は落ち着いたが、今度はバンドのことで悩んでいた。

どうやってメジャーデビューするか――。

頼りにしていたゾニーミュージックコンテストは来年は中止になったと先日発表があった。とりあえずインディーズデビューして地道に活動しながら、メジャーレーベルなどが主催しているオーディションを受けるしかないと考えていたが、それにしても資金が必要だった。インディーズ版を出すのも、スタジオのレンタル代も馬鹿にならない。小梅意外は皆学生なので期待できないし、小梅が何とかするしか方法がなかった。

はあっと大きく溜息を吐いたときだった。

「ずいぶんとお疲れのようじゃないか。せっかくの美人が台無しだぜ。うっきっき――」

この世で一番聞きたくない男の声だった。

勝手に庭に入ってきた勝を、小梅は睨み付けた。

「何しに来たんだよ」

「おいおい、そんな顔で見るなよ。せっかくいい話を持ってきてや

ったのによ」
「てめえの話なんて聞きたくないね」
小梅が立ち上がって玄関へ向かうと、その背中に向かって勝は言った。
「メジャーデビューしたくねえのかよ」
勝の言葉を聞くと、小梅はぴたりと立ち止まった。
「今度、新しいインディーズレーベルを立ち上げることにしたんだよ。ウチが全面的にバックアップしてやってもいい。ウチのレーベルで人気が出たら、メジャーにいく面倒も見てやってもいい。どうだ、悪い話じゃねえだろ？」
「どうせ、なんか条件があんだろ？」小梅は肩越しに言った。
勝はにやりと笑みをこぼすと言った。
「一晩、付き合ってくれるだけでいいんだ」
「……」
勝は何も答えない小梅の直ぐ後ろに立ち、彼女の尻を撫で回しながら言った。
「一回こっきりでいいんだよ。そしたら後は全部面倒みてやっからよ。悪い話じゃねえだろ？　返事は直ぐじゃなくていいからよ。まあ、じっくり考えてみてくれや」
「……」
勝は「うっきっき」と気味の悪い声を漏らしながら帰っていった。
（チビザルが……）
小梅はぎりぎりと奥歯をかみ締めた――。

＊

ライブを終え、つくしの家のカレー専門店にバンドのメンバーは集まっていた。
カツカレーを食べ終えた小梅の隣に、つくしは座った。
「ねえ、小梅さん？　いつになったらＣＤ出せるの？」

小梅はつくしが持ってきたコップの水を、ぐいぐいと飲んだ。
「まあ、もうちょっと待ってなよ」
「もうちょっとって、いつ？」
「もうちょっとって言ったら、もうちょっと！」
「えー、早くCD出したーい！」
「うるさいね！」
つくしは小梅の張り上げた声にびくりとして、しおんのほうに向いて、泣きべそをかいた。
「小梅さんが……」
しおんは呆れ顔でつくしの頭を撫でた。
小梅はちらりとつくしを見ると立ち上がった。
「ごちそうさま。私、帰る」
恵梨香が小梅を呼び止めたが、小梅は無視して店を出て行った。

小梅は家に帰りシャワーを浴びていた。
そして、シャワーを止め、鏡に映った自分の身体を見つめた。
（一回だけだ。一回我慢すれば……）

小梅は風呂から出ると、冷蔵庫から缶ビールを取り出して、居間のちゃぶ台の前に座り、テレビをつけた。テレビ画面に現れた『猿の惑星』の映画放送を見て、小梅は直ぐにテレビを消し、ビールをぐいぐいと飲んだ。
（一回だけ！　一回だけだ！）

小梅はその晩、猿の惑星の猿に犯される夢を見て飛び起きた。そして、額の汗を拭いながら大きく息を吐いた。
（一回……、一回だけよ……）
結局小梅はその晩、満足に寝ることが出来なかった。

翌日の夕方、小梅は仕事を終え、部屋でバンドの演奏を録音したMDを聞いていた。
つくしの歌は素晴らしい。彼女とバンドをやっていて、メジャーを目指さないことなど考えられなかった。
（女は度胸。この身体を売って済むなら、そうするしかない！）
小梅は携帯電話を手に取った。
電話に出た勝は、何だかおどおどしていた。
「もしもし……、池辺……ですが……」
「松本だけど」
「えっ？　ああ……小梅か……」
「あの、この間の話なんだけど」
「えっ？　……ああ、わりい。あの話はなかったことにしてくれ」
「えっ？」
「わりい俺、今それどころじゃなくて、ほんとわりい、そんじゃな」
「おい！」小梅は叫んだが、電話は切られた。
（なんだよクソザル！　せっかく小梅様がやらせてやるって気になったのによ！）
小梅は携帯電話に向かって怒鳴りつけた。
「ふざけんな！　お前なんかに、もうぜってー、抱かせてやんねえ！」
小梅は携帯電話を放り投げると、台所へ行き、冷蔵庫からビールを取り出して、ぐいぐいと一気飲みした。

台所の流し台の下で、小梅は一升瓶を抱えて眠り込んでいた。
そこへ小梅の父親が、慌てた様子でやってきた。
「おい！　小梅、起きろ！」
父親は小梅の頬をぴしゃぴしゃと叩いた。
「ふが！　んだ、こらー！」
父親は小梅に蹴り飛ばされて、後ろの居間まで吹っ飛んだ。

父親は痛そうに腰を抑えて、また台所まで行くと、鍋に水を汲んで、その水を小梅に頭からぶっ掛けた。
「どわー！」小梅は飛び起きた。
「なにすんだよ！　クソオヤジ！」
「寝ぼけてんじゃねえよ！　大変なんだよ！」
「何がよ！」
「池辺の会社が乗っ取られたんだ！」
「えっ！」
小梅は驚いて目を剥いた。父親は小梅の腕を引っつかんで居間へ連れて行くと、テレビの前に座らせた。
「そんでもって、息子の勝が会社の金を使い込んでいたのがばれて逮捕されたって」
「ええ！」
目の前のテレビでは、勝が警察の車に乗せられていく様子が映し出されていた。勝はがっくりとうな垂れて、情けない姿だった。
池辺の会社は、小梅の家の得意先である、東京の医療機器メーカーに株式を買い占められ、事実上乗っ取られる形となった。そして、社長の池辺ら経営陣は退陣することになり、息子の勝は新経営陣に横領を暴かれ、今日逮捕されたということだった。
小梅はざまあみろという気持ちと、ほっとしたのと、でもメジャーへの道が遠のいたような感じと、複雑な思いでテレビのニュース番組を見ていた。

＊

ライブが終わると、つくしは一人でさっさと家に帰っていった。
小梅はこの間からつくしに避けられているような気がしていた。
小梅が溜息を吐いてベースを片付けていると、後ろでカンナが言った。
「つくしちゃん、最近あちこちのバンドから声を掛けられてるらし

いわよ」
小梅がぎくりとして、手を止めると、しおんが不安そうに言ったのが聞こえた。
「うそー、つくしちゃんウチのバンド辞めちゃうの？」
すると恵梨香が言った。
「そんなことないわよ」
恵梨香の言葉に反論するようにカンナが言った。
「分からないわよ。つくしちゃん早くＣＤ出したくて仕方がないみたいだからさ、他でもうインディーズ版出してるバンドとから声が掛かれば、ひょっとするかもよ？」
「やだあ！　私、つくしちゃんとやりたい！」
「大丈夫だって、つくしちゃんは辞めないわよ」
「彼女は歌が歌えればバックは誰でもいいんじゃない？」
小梅はたまりかねて叫んだ。
「黙んなよ！」
驚いて小梅を見ている三人のほうに、小梅はゆっくりと振り向いた。
「影でこそこそと仲間の噂話してんじゃないわよ。あのこがウチを辞めようがどうしようが、あのこの自由でしょ？　私はどんなメンツになっても、とにかく最高の音楽を目指すだけよ」
小梅はそう言うと、ライブハウスの控え室を出て行った。

とは言うものの、小梅は不安で仕方がなかった。つくしに辞めて欲しくない。でも、先の見通しが立たない。
小梅はぼうっとした表情で自宅へ帰ってきた。
居間へ入ると、父親がちゃぶ台に向かって晩酌をしていた。
「おう小梅、お前もやるか？」
小梅は頷いて父親の隣へ座った。
継がれたビールを小梅は少しだけ飲んでグラスをテーブルに置いた。

「なんだ、元気ねえな」
「……」
父親は不思議そうな顔をして、小梅に封筒を差し出した。
「なにこれ？」
「ん？　ああ、ボーナスだ」
小梅はみるみると表情を明るくさせていった。
（そうじゃん、忘れてたよ。これでレコーディングの費用は何とかなるかも）
小梅が封筒を取ろうとすると、父親はその手を逸らした。
「なによ。頂戴よ」
「いや、あんまり期待されても困るもんでな」
（どういうこと？）
小梅はむっとした表情をすると、手を差し出した。
「えー、こんだけ？」
「いやあ、申し訳ない。借金もなくなって景気もよくなったんだけど、人を増やしたり、新しい機械も入れたりで、工場のほうに金が必要だったもんでな。あと、雅司を音大にやるのにも金が必要だったもんで……。次からはちゃんと出せるようにするから、今回だけは勘弁……」父親は最後に小梅に向かって拝むように手を合わせた。
（もう！　なんでいつも私ばっかり我慢しなくちゃいけないのよ！）
小梅はグラスのビールを一気飲みすると、父親が自分のグラスに注ごうとしていたビール瓶を取り上げて、自分のグラスに注いだ。
そして、また一気に飲んだ。
（あーん、もうどうしよう……。このままじゃ、つくしんぼに辞められちゃうよ……）

工場で仕上げた部品を東京のメーカーへ納品して帰ってくると、母親が玄関で出迎えた。
「おかえり、小梅。お客さんが着てるよ」

客間を覗くとスーツ姿の男性が雅司と話をしていた。
「ねーちゃんお帰り」
小梅は頷いて、男性の正面へ正座した。
「あの、済みません。お待たせしたようで」
「いえ、こちらこそアポイントメントも取らずに押しかけまして」
男性は丁寧に頭を下げた。
「わたくし、こういうものです」と言って、男性は名刺を差し出した。
男は坪田浩二（つぼたこうじ）という、インディーズレーベルの代表だった。
小梅が顔を上げると、坪田は話し出した。
「わたくしたちはこのたび、この近辺で活動をしているアーティストの音楽を広めていくことを目的としまして、新しいレーベルを立ち上げました。本来は参加したいアーティストのほうからデモテープをいただいて、審査した後、レーベルへ登録という手順を踏むことを基本としているんですが、先日松本さんたちのバンドのライブを拝見いたしまして、是非にウチのレーベルへ登録していただきたいと思いまして、本日は突然お邪魔した次第でございます」
「はあ……」小梅は生返事を返した。
「登録の費用などは一切ございません。レコーディングに関しても、専用のスタジオとスタッフがおりますので、それらを無料でお貸しいたします。出来たＣＤはこちらで製品化いたしまして、販売の代行とインターネットでの配信なども、わたくしどもが全て行います。ＣＤの売上から少し手数料をいただきますが、売れなかったとしても、別に手数料をいただくということはありません」
小梅は嬉しさのあまり声を失っていた。
坪田は不安そうな表情で言った。
「ウチのスポンサーとなっている方が、松本さんたちのバンドを大変気に入っていまして、何とかならないかと相談されていまして……、どうでしょう？　ウチに登録していただくわけにはいかないでしょうか？」

小梅はバンドのメンバーと相談してから返事をすると答えた。しかし内心は直ぐにでも了解したかった。
（やったー！　めちゃめちゃラッキー！　なんか最近、ピンチになるとラッキーなことが起こるのよね）
小梅は何だか誰かに見守られているような気分を感じていた。

＊

つくしの家のカレー専門店に、小梅意外のバンドのメンバーが集まっていた。
つくしはそわそわした様子で、窓の外を覗いていた。
「小梅さん遅いなあ……」
そんなつくしに恵梨香が声を掛けた。
「もう直ぐ来るわよ。それよりつくしちゃん、スライドギターはどう？」
つくしはパッと振り向いて、嬉しそうな顔を見せた。
「はい！　バッチリです！　次の新曲はスライドギターでやりますから！」
恵梨香は優しく微笑んで言った。
「そう、楽しみね」
カランカランと店のドアのベルが鳴る音がした。皆が目を向けると、小梅が段ボール箱を抱えて入ってきた。
「お待たせー！」
つくしは直ぐに小梅の傍へ行くと叫んだ。
「小梅さん！　早く！」
小梅はにやりと口元を緩めると、「ジャーン！」と言って、取り出したCDを高々と掲げた。
つくしがそれに飛びついた。
「きゃあ！　見せて見せて！」
つくしはCDを手に取ると、涙目になり、それをしっかりと抱き

しめた。
「やっと念願のＣＤデビュー……」
小梅は優しい表情でつくしを見ながら、落ち着いた口調で言った。
「まだ、インディーズよ。そんなんで喜んでちゃ駄目よ。目標はメジャーなんだから」
つくしは小梅に潤んだ瞳を向けると、口をぎゅっと閉じて頷いた。
そして、もう一度ＣＤを見つめた。
ジャケットの写真には、つくしの愛犬のヘレンが、切なげな表情で写っていた。

―9―

年が明けもう三月だった。
受験休みが終わり、久しぶりに登校したしおんは、教室の窓から三年間を過ごした学校の校庭を見渡した。
去年の今頃は悟との将来を真剣に考えていた時期だった。毎日がバラ色で、悟と会える休みの日を待ちわびて、わくわくした日々を送っていた。
その悟はもういない。彼が死んだときは、何度も死ぬことを考えていた。それでも彼が残してくれたメッセージを読んで、生きる気力を取り戻すことが出来た。
しおんは手帳にはさんであった、悟からのバースデーメッセージが書かれたカードを取り出した。
『しおん誕生日おめでとう。しおんと同じ日に歳を取っていけることが、俺は何だか嬉しいんだ。ずっとしおんと一緒にいたい。死んでも生まれ変わったら、またしおんを彼女にしたいって俺は思うんだ』
しおんは、抱きしめるようにカードを胸に押し付けた。
『しおんが俺のドラムが好きだって言ってくれたことが俺は嬉しかった。だから俺の夢をあげる。俺は必ずプロのドラマーになるよ』
しおんはカードを手帳に戻し、鞄から悟がくれたスティックを取り出した。
右手で器用にくるりとスティックを回すと、微笑んでスティックを見つめ、教室を出て行った。
（悟――、待ってて、私が変わりにあなたの夢を実現してあげる。そしたら直ぐにあなたのところへ行くから。待っててね、悟――）
部室の傍へ行くと、中からドラムを叩く音がしている。
しおんは感心したような表情をして、部室のドアを開けた。

しおんが部室の中へ入ると、ドラムを叩いていた松本雅司が、手を止めて振り向いた。
「珍しいじゃん松本君。ドラムなんて叩いちゃってさ。いつもは頼まないと叩いてくれないのに」
雅司はにっこりと微笑むと、両手でスティックを器用に回した。
「もう最後だからさ、佐山とここで練習するの。最後に気が済むまで叩いておきたくて」
そう言うと、雅司はまたドラムを叩き始めた。しおんは優しい表情で、ドラムを叩く雅司の後ろ姿を見つめていた。その姿に、しおんは悟の面影を見ていた――。

ドラムを叩く手を止めて、汗を拭いているしおんに向かって雅司は言った。
「もう、教えることはないな。スッゲー上手くなったよ」
「小梅さんたちの指摘が厳しいからね。早くみんなのレベルの追いつかないと、クビになっちゃうから」
そう言うと、しおんは微笑んで立ち上がった。
「松本君、本当にありがとう。これだけ出来るようになったのは、松本君のおかげよ」
雅司はにっこりと微笑むと、得意げに腕を組んで言った。
「じゃあ、なんかおごってもらおうかな」

しおんがつくしの家のカレー専門店のドアを開けると、正面のカウンターの中につくしがいた。つくしの向かい側には小梅の後姿がある。
つくしは顔を上げると、嬉しそうな表情を見せた。
「しおんさん！　いらっしゃ……」
最後に口ごもったつくしを不思議そうに小梅は見ると、つくしの視線を追って振り向いた。
「んっ？　雅司じゃん」

「よう、ねーちゃん。なにサボってんの？」
「うるさいわね。バンドの打ち合わせよ。ちょービックニュースなんだから」
そう言うと、小梅はつくしに視線を戻し、怪訝そうな顔をした。
「つくし？」
「……」
「おい、つくしんぼ」
「……」
「こら！　つくしんぼ！」
怒鳴るような小梅の声に、つくしはびくりと小さく飛び跳ねて、小梅に驚いた顔を向けた。
小梅は不思議そうに小首を傾げた。
「なに固まってんのよ」
「いや……、あの……、えっと……」
「なに？」
「いや……、あの……、こちらのお客様は？」
「雅司だけど。私の弟」
つくしは上目遣いで、ちらちらと雅司を見ながら、もじもじしていた。
「こ……、小梅おねーさまの……」
小梅としおんは不思議そうにつくしを見ていた。
雅司は何事もなかったように、小梅の隣に座った。
「で、ねーちゃんビックニュースってなに？」
「んっ？　あー、メンバーがみんな集まってから発表するから」
「ふーん、そう。んじゃカレーでも食って待ってようかな」
雅司はそう言うと、顔を上げてつくしを見た。すると、つくしは真っ赤な顔をして俯いた。
雅司はつくしの顔を覗きこみながら言った。
「ねえ、なにがお勧め？」
「ひゃっ、ひゃい。えっと、本日のお勧めは、えっと……」

つくしが口ごもっていると、しおんが横から口を挟んだ。
「ドライカレーとかも、結構いけるのよ」
「そう、んじゃそれにする」
「はい、ドライカレーでございますデスね？　少々お待ちくださいませデス……」
つくしの言葉遣いに雅司が小さく苦笑すると、つくしは目を剥いて固まってしまった。
そんなつくしを、探るような目つきで小梅はじっと見ていた。
「おい、つくしんぼ？　あんた、まさか」
つくしは怯えた表情で、小梅に目を向けた。
小梅はにやりと口元を緩めた。
つくしは慌てた様子で言った。
「ちちちち、違います！　違いますから！」
「別に照れることないじゃん」
「やめてください！　私、お父さん呼んできます！」
つくしは奥へと消えて行った。
口を押さえて笑いを堪えている様子の小梅を、しおんと雅司は不思議そうに見ていた。

恵梨香とカンナが揃ってやってくると、小梅はカウンターの中の栗雄に言った。
「おじさん、つくし呼んできてもらえます？」
栗雄はつくしを呼びに行き、暫くすると一人で戻ってきた。
「何だか具合が悪いから、これないって言ってるんだけど」
小梅はにやりと口元を緩めると、「仕方がないね。じゃあ、おじさんが代わりに聞いておいて」と言った。
小梅は立ち上がって、わざとらしく咳払いを一つ吐いた。
「発表します」
皆、小梅に注目した。

「実は、ヘレンを映画の主題歌に使いたいという、オファーがありました！」
小梅は皆の顔を見渡して、口を押さえた。
皆、目を剥いて声を失っていた。
小梅が腹を抱えて笑い出すと、皆も次第に顔をほころばして、小さく笑い声を漏らし始めた。
恵梨香は腹を押さえて言った。
「ふふふ……、小梅さんたら、なに言ってんの？　ふふふ……、そんな馬鹿な……、ふふふ……、嘘でしょ？」
笑いの収まった小梅は、すっきりとした表情をしていた。
「嘘じゃないよ」
しおんは目を丸くして叫んだ。
「ほんとに！」
「ええ、本当よ。みんな！　メジャーも夢じゃないからね！」
絶叫するように喜びの声を上げているメンバーを、小梅は満足気な表情で見つめていた。
「やったな。ねーちゃん」
小梅は黙って頷いた。そして、店の奥のほうを見つめた。
「全部。つくしんぼのおかげよ」

店の中は酔っ払いどもで、どんちゃん騒ぎの状態だった。いつの間にか豆造も加わって、栗雄と一緒に盛り上がっていた。
しおんと雅司は酔っ払いには付き合ってられないというような顔をして、つくしの自宅へと上がっていった。
しおんがつくしの部屋のドアをノックすると、中から小さくつくしの声が聞こえた。
「つくしちゃん、具合どう？　入ってもいい？」
「はい……」とまた、か細い返事が返ってきた。
しおんがドアを開けて中を覗くと、つくしは背中を見せて座って

いた。
「つくしちゃんどうしたの？　スカートなんて、珍しいじゃん」
さっき店にいたときは、胸にゴシック体で、『ＲＯＣＫ！』と書かれたピンクのトレーナーにジーパンだった。
しおんと雅司は、顔を見合わせて小首を傾げると、つくしの後ろへ腰を下ろした。
しおんが呼ぶと、つくしはゆっくりと身体をしおんのほうに向けた。
「えっ？　どうしたの？　つくしちゃん、お化粧なんてして」
つくしは俯き加減で、床にのの字を書きながら呟いた。
「女の、身だしなみです……」
しおんと雅司は顔を見合わせて、小首を傾げた。

＊

スタジオにつくしが入ってくるなり、小梅は驚いたように言った。
「なんだ、おめえ！　そのへんちくりんな化粧は！？」
つくしは慌てた様子で言った。
「ええ！？　変ですか！？」
カンナが「ちょっとやばいわよ」と言うと、恵梨香としおんが相槌を打った。
つくしは泣きべそをかきながら言った。
「やだあ……、どうすればいいんですか？」
小梅は呆れたように溜息を吐くと、化粧道具を取り出した。そして、つくしを椅子に座らせた。皆、つくしの周りに集まった。
小梅はつくしの化粧を直しながら言った。
「そもそも、あんた童顔なんだから、変に化粧するとケバ過ぎるのよ」
小梅は口紅を塗り終えると、満足気に頷いた。
「ほい、出来たよ」

つくしは手鏡を覗き込んで、嬉しそうな顔をしていた。
「ありがとうございます。小梅おねーさま」
「全く急に色気づいちゃって、でも早いとこ手を打たないと、雅司のやつ東京に行っちゃうよ」
つくしは目を丸くして驚いた。
「ええ！？　なんで！？」
「あっちの大学に行くのよ」
つくしは放心状態に陥っているようだった。
そんなつくしを見てカンナは噴出すと、小梅に訊いた。
「なに？　小梅ねーさん。雅司君がどうしたの？」
小梅はにやりと口元を緩めると言った。
「雅司に惚れちゃったみたいなのよ、つくしんぼのやつ。いちころだったみたいよ」
カンナと恵梨香は顔を見合わせて噴出した。
つくしは蚊の鳴くような声で呟いた。
「小梅さん……、私……、どうしたら……」
「どうしたらって、告白するしかないでしょ？」
「そんなの無理です……。絶対振られます……」
「女は当たって砕けろよ」
「砕けたくないです……」
恵梨香が励ますように言った。
「大丈夫よ。つくしちゃんだったら、絶対うまくいくって」
「無理です……」
カンナがにやりと口元を緩めて言った。
「男なんて素っ裸で抱きつけば、いちころだって」
「そんなこと出来ません！」
小梅は呆れ顔で言った。
「とにかく、雅司のことは置いといて練習するよ。もう、メジャーデビューは目の前なんだからね」
「無理です……。歌なんて歌ってる場合じゃないです……」

「なに言ってんの！　ふざけんじゃないわよ！　映画の挿入歌も、もう一曲作んなきゃなんないのよ！」
「無理です……。曲なんて思い浮かびません……。今……、彼のことで頭がいっぱいで……」
小梅が真っ赤な顔で目を吊り上げて、わなわなと震えだしたのを見て、恵梨香は慌ててつくしと小梅の間に割って入った。
「とっ！　とにかく！　今日のところは解散ということで。えっと、私が何とかするから、ねっ？　小梅さん、いいでしょ？」
小梅は怒りを押し殺したような口調で言った。
「こ……、今週中に何とかしなかったら……、男女交際禁止にするからね……」
恵梨香は顔を引きつらせて頷くと、つくしを連れてスタジオを出て行った。

つくしと恵梨香がいなくなると、小梅は椅子に腰掛けて、がっくりとうな垂れた。
「全く、あのこは……、メンタル面が全然駄目なのよね。極端すぎるのよ。なんかあると、直ぐに歌えなくなっちゃう……。こんなんで、プロでやってけるのかしら……」
その頃しおんは別のことで悩んでいた。
つくしが雅司に気があると聞いてから、胸の奥が締め付けられるような感じを、ずっと受けていた。
（な……、なんで私……、なんでショック受けてるの？）

練習が中止になり、夜の中央公園で、しおんは七色にライトアップされた噴水を見つめていた。
ふと、腰掛けていたベンチの隣に誰かが座り、何気なくそちらに顔を向けた。
「まっ！　松本君！」

雅司はしおんの声に驚いたように仰け反った。
「何だよ、そんなにびっくりしなくたってさ……」
しおんが思わず顔を背けると、雅司は不思議そうに言った。
「えっ？　なに？　なんか、今日ジムにも来なかったみたいだし、体調でも悪い？」
しおんは黙って首を振った。
「変なの？　……そうだ！　つくしちゃんのところに行こうか？」
しおんは驚いて雅司を見た。
「えっ！？」
「俺、あの店のカレー気に入っちゃってさ。今度は俺がおごるよ」
「だ……、駄目よ！」
「えっ？」
雅司の驚いた顔を見て、しおんはまた俯いた。
「どうしたんだよ……。佐山、なんか変だぞ？」
「そんなにつくしちゃんに会いたい？」
「えっ？」
「そうなんでしょ？」
「いや、別にそんなんじゃないけど……」
「嘘よ！　そうに決まってる。つくしちゃん、可愛いし、か細くて女の子らしいし、ああいうこがタイプなんでしょ？　松本くんは」
「なに言ってんの？」
「私なんかこんなにムキムキの筋肉女だし……、私だって前はもっとスリムで女の子らしかったんだから！」
「いや、知ってるけど……」
「嘘よ！　そんなにつくしちゃんに会いたいなら、一人で行ければいいでしょ！？　松本君が行ったら、きっとつくしちゃん、大喜びするわよ！」
雅司が話しかけようとすると、しおんは立ち上がって走っていってしまった。

＊

食卓の向こう側の棚の上にある、写真たての中の母親の写真を、つくしはぼんやりと見つめていた。

母親の記憶は全くない。どんな声だったのか、どんなものが好きだったのか、母親のことは全く分からない。自分を産んで直ぐに亡くなってしまったので当然のことだ。

つくしは、赤ん坊の自分を抱いて写っている、母親の写真をじっと見つめた。母親はとても幸せそうな表情をしている。

（お母さん、幸せだった？　幸せだったらいいなあ……。私も、幸せになりたいの……）

はあっと溜息を吐きながら、膝の上のヘレンを撫でていると、家の電話が鳴った。

電話はしおんの母親からだった。

『そちらに、ウチのしおんがお邪魔していませんか？』

「いえ、ウチには来ていませんけど……」

『そうですか……、夜分恐れ入りました』

「もしもし！？　しおんさん、どうかしたんですか？」

『それが、まだ家に戻っていないもので……、携帯電話もつながらなくて……』

電話を切ると、つくしは壁の時計を見上げた。時刻は深夜の零時を過ぎようとしている。

つくしは急に不安な気持ちが沸き起こってきて、胸を押さえた。すると、椅子の上でヘレンが急に吠え出した。ヘレンの吠え方は何だか尋常じゃなくて、つくしはますます不安になってきた――。

つくしはヘレンを連れて外へ出た。なんだかじっとしていられなくなったからだ。

いつもは自分の横をちょこちょこと歩いているヘレンだったが、今はつくしを先導するかのように必死に前を進んでいく。つくしは

当てもなかったので、ヘレンを追いかけるように進んで行った。
ヘレンは海岸へ出る砂利道を進んで行こうとした。そこは砂利道だったので、後ろ足を車椅子に乗せていては進みづらそうだった。つくしはヘレンを抱き上げて、その道を早足で進んで行った。
海岸は真っ暗だった。打ち付ける波の音が不気味で、つくしはヘレンをきつく抱きしめた。すると、ヘレンはもがきながら顔を出し、また激しく吠え出した。
「どうしたの？　ヘレン」
ヘレンは海の方を向いて吠えている。
雲に隠れていた満月が姿を現し、辺りが少し明るくなった。つくしは海のほうに目を向け、はっとその目を見開いて息を呑んだ――。
「しっ！　しおんさん！」
海の中へゆっくりと進んでいく人影があった。それは間違いなくしおんだと、つくしは思った。
「えっ？　なんで？　えっ？　なに？　どうしたらいいの？　えっ？」
つくしは携帯電話を取り出した。
「えっと、誰に電話すれば、えっと、どうしたら、えっと、やだ！　どうしたらいいの？」
とにかくしおんの家に電話しようとつくしは思った。しかし、指が震えて上手く操作できないでいた。
「はやく！　早くしないと！」
その時だった――。
直ぐ横を誰かが物凄い勢いで走りすぎて行った。
つくしは驚いた顔をしてその人影を目で追った。あっと言う間に人影は海に突っ込んでいき、しおんを追って水しぶきを上げながら海の中を進んでいく。
つくしは呆然とその光景を見つめていた――。
「佐山！」
その人影がそう叫ぶと、つくしはハッとした表情をした。その声

は雅司のものだった。
「佐山！　なにやってんだ！」
雅司はようやくしおんを捕まえた。水面は腰の高さを超えている。
「放して！」
「ふざけんな！　なにやってんだ！」
「放してよ！」
「死ぬ気かよ！　お前！」
「そうよ！　死ぬのよ！」
「なんで！？　ふざけんな！」
雅司はしおんの腕を掴んで、岸へと進もうとした。
「私が死んだって、あんたなんかに関係ないでしょ！」
しおんは雅司の腕を振りほどいた。
「なに言ってんだよ……」
「……」
雅司はまた、しおんの腕を掴もうとした。
その手を避けて、しおんは言った。
「悟のところへ行くのよ……」
「なに馬鹿なこと言ってんだよ」
「嫌なのよ！」
「なにが！」
しおんは唇をきつくかみ締めた。
「佐山……」
しおんは溢れ出る涙を抑えた。
雅司はそんなしおんをじっと見つめた。
「悟のことを忘れていく自分が、嫌なのよ……」
「なに言ってんだよ。佐山があいつのことを忘れる訳ないだろ？あいつの意思をちゃんと継いでるじゃないか」
「忘れてるのよ！」
「なんで……」
「だって……」しおんは雅司の顔をじっと見つめた。

肩に添えようとした雅司の手をしおんは振り払い、また沖へと進もうとする。
雅司はしおんの腕を掴んで叫んだ。
「いい加減にしろ！」
「放して！　私が死んだって、あなたには関係ないでしょ！」
「あるよ！」
「ないわよ！」
雅司はしおんを引き寄せ抱きしめた。
「俺は……、お前がいなくちゃ、駄目なんだ」
しおんはハッとした表情で、雅司を見た。
雅司はしおんに顔を寄せていく。
口づけしようとする雅司を、しおんは拒まなかった。
月明かりが抱き合う二人を照らし出している。その向こう側の波打ち際で、つくしは呆然とした表情でへたり込んでいた――。

―10―

栗雄は自宅から店に戻ると、心配そうな表情でカウンターに座っている恵梨香の向かい側へ立った。
「ごめんね、恵梨香ちゃん。つくしのやつ、誰とも会いたくないって、出てこないんだよ」
「どうしちゃったのかなあ、つくしちゃん……」
「いやあ、ほんとに申し訳ない」栗雄が頭に手をやりながらそう言うと、店に小梅がやってきた。
「エリちゃん、どう？　つくしんぼのやつ」
恵梨香は残念そうな表情で首を振った。
「どうすんのよ。あさって映画の監督さんに会いに行くのよ！　そんでもって、映画を見せてもらって、挿入歌を作んなきゃいけないんだから」
小梅は頭を抱えて考え込んでいるようだった。そして暫くすると、パン！　と膝を叩いて顔を上げると言った。
「こうなりゃ、雅司に無理やり付き合わせるしかないね」
恵梨香は頷いて言った。
「別に無理やりじゃなくても、つくしちゃんだったら文句ないと思うのよ」
「あいつもどんな女が好きなのか、全然わからないからねえ、でもとにかく、雅司に何とかさせるしか方法がないね」
その時だった。店のドアが開いて、しおんと雅司が店に入ってきた。
「よう、ねーちゃん。またサボってんのか？」
「丁度いいところに――」小梅は二人を見て、驚いたように目を見開いた。
「おめえら！　なに、手なんかつないでるんだよ！」
「えっ？　なんでって」雅司がしおんを見ると、しおんははにかん

だ顔をして俯いた。
小梅は顔を引きつらせて言った。
「まさか、おまえら……」
「俺ら、付き合ってるんだもん。いいじゃん、別に」雅司はそう言うと、しおんの手を引いて奥の席へ座った。
小梅は真っ赤な顔をして立ち上がった。
「ふざけんな！　誰が付き合っていいって言ったんだよ、くぉらあ！」
「うっせーな！　ねーちゃんには関係ないだろ！」
「オオアリクイだこのやろー！」
しおんは申し訳なさそうな顔で二人の間に割って入った。
「やめてください！　喧嘩しないで！」
「ふざけんな！　しおん！　お前が一番プロになりたいってほざいてたんだろうが！　それをなに横取りしてるんだよ！」
「だって……」しおんは目に涙を浮かべた。
雅司はしおんの前に立ち、小梅を睨み付けた。
「しおんをいじめるな。俺が付き合ってくれって頼んだんだよ」
小梅と雅司は睨み合って、一触即発の雰囲気になった。
栗雄はそんな二人を見ると、困った顔をして言った。
「ちょっと待ってよ小梅ちゃん。つくしのことなら俺が何とかするから……」
小梅は不安そうな顔をして栗雄を見た。
「おじさん、大丈夫？」
栗雄は穏やかな口調で言った。
「大丈夫だよ、小梅ちゃん。つくしは歌うために生まれてきた子だから」

＊

自宅と店の間にある小さな庭で、つくしはしゃがみ込んでぼんや

りと地べたを見つめていた。
花を咲かせたタンポポの隣に土筆が生えている。
（私はやっぱり土筆なんだ。一生咲くことは出来ない……）
「春香は土筆が好きだった」
つくしはハッとして、振り返った。
栗雄が後ろから覗き込むように見ていた。
「お母さんが？」
栗雄は頷いた。
「春がやってきたって感じがするって」
「でも、綺麗に咲くことが出来ないじゃん」
「花はいつかは散っちゃうよ」
「そうだけど……、一度くらいは咲いてみたいでしょ？」
「お父さんは、サクラにしようって言ったんだよ。そっちの方が良かったか？」
つくしは地面の土筆を見つめて、暫く考えていた。
「つくしでいい」そう呟いてつくしは立ち上がった。
ヘレンを抱き上げて庭を出て行こうとするつくしに向かって、栗雄は言った。
「お母さんがくれたのは、名前だけじゃないぞ」
つくしは立ち止まって栗雄を見た。
栗雄は微笑んでいた。

栗雄は自分の部屋へつくしを連れてくると、机の引き出しの中からカセットテープを取り出した。そして、それをコンポにセットして、再生ボタンを押した。
スピーカーから流れ出たサウンドに、つくしは直ぐにのめり込んでしまった。
ハードなエレキギターの演奏に、スライドギターのメロディーが絡み合っている感じに心が躍っていた。
（すごい！　なにこれ！？　かっこいい！）

ボーカルの歌が流れ出すと、つくしはハッと目を見開いた。一瞬、自分が歌っているのではないかと思ったからだ。
（えっ！？　誰これ？　めちゃめちゃ上手い！）
左手がむずむずしていた。ギターが弾きたくて仕方がなくなっていた。そのうち、右手もむずむずしてきた。マイクが持ちたくて仕方がなくなっていた。ツーコーラス目には、目を瞑ってステップを踏みながら、一緒にサビを歌っていた。
曲が終わった瞬間に、つくしは叫んだ。
「お父さん！　だれ？　このバンド」
栗雄はにやにやと口元を緩めているだけだった。
「お父さん！？　誰よ！　教えてよ！」
栗雄は微笑んで頷くと言った。
「お父さんのバンドだよ。歌ってるのはお母さんだ」
「うそ！」つくしは目を丸くして言うと、コンポをじっと見つめた。
そんなつくしを栗雄は穏やかな表情で見つめた。
「お母さんの歌、凄いだろ？」
つくしは黙って頷いた。
「お前の歌は、お母さん譲りだ。お前も全然負けてない」
つくしは栗雄に目を向けた。
「お母さんの夢は歌手になることだった。お父さんが必死に頼んで、一緒にバンドをやることになったんだ。そして、今の曲でオーディションを受けた。オーディションに受かって、レコード会社と契約しようとしてた頃だった……」
栗雄は黙って俯いてしまった。
「どうしたの？　お父さん」
栗雄は俯いたまま話した。
「お母さんのお腹に、お前がいるって分かったのが……」
つくしは息を呑んだ。
「私のせいで……」
「お前に責任はなんにもない。お父さんとお母さんの問題だ」

「でも、お母さんは私のせいで、歌手になれなくなったんでしょ？」
「違うよ。お母さんは全然諦めてなかった。お前を産んで暫くしたら、もう一度挑戦するつもりだった。若かったからな。お前を産んだのは、お母さんが二十歳のときだった」
つくしは少し、ほっとしたような表情をした。
「お母さんは大きなお腹を摩りながら、歌の上手い子が生まれてきますようにって、いつも言ってた。お前の産声を聞いたときに、きっとこの子は歌手になるって、お母さんは思ったそうだ」
机の上に置いてある、母親の写真を収めた写真たてを、つくしはじっと見つめた。
「お母さんの思い……、分かってあげてくれないか？」
つくしは写真を見つめながら、黙って頷いた――。

＊

小梅の運転する白いライトバンは、東名高速道路を東へと向かって走っていた。カーステレオからは、スタンリークラークのチョッパーベースが鳴り響いている。
小梅は右手の親指でハンドルをバシバシと叩きながら、ノリノリで車を走らせていた。
助手席のつくしをちらりと見て小梅は言った。
「なにむくれてるのよ」
「……」
「なによ」
つくしは不機嫌そうな顔を小梅に向けた。
「だって小梅さん、ずるいじゃん」
「なにが」
「なんでそんなに今日は綺麗なのよ。メークもヘアスタイルも服もバッチリで、自分ばっかり、ずるいでしょ！？」
「だって映画の監督さんに会うんだよ。ひょっとしたら次の映画で

主役かヒロインでもお願いします、なんてことにでもなるかも知れないじゃん」
「ずるい！　私も映画に出たい！」
「あんたはむりむり。口紅すら満足に塗れないおちびちゃんなんて、相手にされないよ」
「むきー！」つくしは地団太を踏んで、悔しがっていた。

映画の試写が行われるスタジオに着くと、プロジューサーの人が出迎えてくれて早速映画を見ることになった。監督とはその後に面会することになった。
映画が始まった――。
主人公は、オリンピックのマラソンで、将来、金メダルを取ることを有望視されていた仁美と言う女性だった。ある日、仁美は早朝のトレーニング中に、交通事故に遭ってしまう。
その事故が原因でオリンピックの代表を逃してしまった仁美は、卑屈になってしまい、家に閉じこもってしまう。
医者からは、ちゃんとリハビリすれば、普通に歩けるようになると言われているにもかかわらず、仁美はリハビリを拒否し、ずっと車椅子での生活を送っていた。
仁美の家は父子家庭だった。仁美の世話をするため仕事に集中出来ない父親は、足の不自由な仁美を次第に厄介に思うようになる。そして遂に彼女を大阪の親戚の家に預けてしまう。仁美は父親に見捨てられたという思いを抱いたまま、親戚夫婦に世話になることになる。
親戚夫婦は数年前に一人娘を亡くしていた。生きていれば丁度仁美と同じくらいの年齢だったはずだった。だから夫婦は仁美の世話をすることを歓迎した。そして、仁美に対してやさしく接した。しかし仁美は、なかなか心を開くことが出来ないでいた。そんなある日、親戚夫婦が飼っていた柴犬に、子犬が二匹生まれる。一匹は健康で直ぐに貰い手が見つかったが、もう一匹は後ろ足が不自由な雌

の子犬だった。仁美はその子犬に、自分の境遇を重ねてしまう。そして、仁美は積極的にその犬の世話を進んでやるようになっていく。仁美はその犬をヘレンと名づけた。

手先の器用な叔父は、ヘレンのために、車輪の付いた台車のような車椅子を作ってあげる。仁美は後ろ足を車椅子に乗せたヘレンを連れ、毎朝散歩に出かけた。

ある朝、仁美はランニング中の浩二と言う青年と出会う。浩二は仁美を知っていた。浩二もマラソンランナーで、仁美のファンだった。浩二は仁美に恋をする。そして、仁美が歩けるようになって欲しいと願い、彼女を励まし、リハビリを必死に即す。しかし仁美は彼の思いを鬱陶しく思うだけで、一向にリハビリをしようとしないでいた。自分の思いがなかなか伝わらず、浩二は仁美から少しずつ距離を置くようになってしまう。そんなある日、浩二に思いを寄せる女性（雅美）の存在を仁美は知る。知った途端、仁美は浩二に恋をしていたことを自覚するが、浩二とはあまりにも距離が出来すぎていた。仁美はそれでも浩二との恋を諦めることが出来なかった。仁美はリハビリすることを決意する。もう一度走れるようになれば、彼が自分に振り向いてくれるかもしれない。仁美はそう思った。そして、必死にリハビリに励む。

リハビリの効果が現れ、ようやく少しだけ歩けるようになった頃、浩二は仁美がリハビリに挑戦していることを知る。浩二は仁美のリハビリの手助けをするようになる。仁美は幸せだった。浩二の励ましが本当に嬉しかった。仁美は浩二に自分の思いを告白する。浩二は仁美の思いを受け入れてくれる。浩二は仁美に言った『仁美は自分の憧れだった。仁美の走る姿に、ずっと励まされていた』と――。そして、『だから今度は、自分が仁美を支えたいんだ。そして、世界のトップランナーたちと一緒に走る仁美の姿を、もう一度見たい。それが、今の自分の夢だ』とさらに言った。

お互いの思いが通じ合い、幸せな日々を二人は送っていたが、ある日デート先でチンピラ数人と揉め事を起こす。浩二は、仁美にち

ょっかいを出そうとするチンピラと揉み合いになり、後ろから棒で頭を殴られ重症を負う。病院で数日間生死の境をさまよっていた浩二は、ようやく意識を取り戻すが、仁美の記憶がなかった。自分の記憶がない浩二に仁美はショックを受けるが、いつか必ず記憶を取り戻すことを信じ、浩二の介抱に必死になる。しかし、浩二の心は新しく担当になった看護士のほうに向いてしまう。その看護士は雅美だった。浩二は雅美を選んでしまう。

浩二を失い絶望の底へ落ち込んだ仁美を救ったのは、かつての浩二の言葉だった。『仁美がもう一度走る姿を見るのが自分の夢だ』その言葉が仁美を立ち上がらせた。仁美は浩二の夢を叶えることに希望を持つ。

一年強のブランクは仁美にとって大きな壁だった。それでも仁美は浩二の夢のために、過酷なトレーニングを必死に積んだ。そしてその年の冬、大阪国際女子マラソンに、一般選手枠で出場する。

スタートラインに立ち、仁美は思う。このレースで勝っても浩二の心が戻ることはないだろう。でも、このスタートラインに再び立つことが出来たのは浩二のおかげだ。だから、浩二のために必ず勝つ――。まだ自分のことを愛していてくれていた頃の浩二の夢を叶えるんだ。そしてこの恋に終止符を打とう――。その思いを支えに仁美は走った――。

レースは予想外に混戦だった。第一集団は、前回のオリンピックで金メダルを取ったエチオピアの選手を囲むように、日本の選手が三人並送する状態で最後の十キロを過ぎた。仁美はその集団から三十メートルほど後ろを一人で必死に追いすがっていた。

最後の五キロを過ぎた。トップ集団との差がじりじりと開く。仁美は気持ちが折れそうだった。もう、体力を使い果たし、気力だけで走るしかなかったが、それももう限界だった――。別に勝っても、浩二は戻らない……。自分のことなんて誰も期待していない……、別に……、頑張る必要なんて……、ないじゃない……。

ぐっとスピードが落ち、レースを諦めようと思ったときだった。

仁美は目を見張った。浩二が歩道から身を乗り出し叫んでいる。
『仁美！　頑張れ！　諦めるな！』
身体も心も限界を超して、幻覚を見ているんだと仁美は思った。幻覚の浩二は係員に押し戻されながらまだ叫んでいる。
『仁美！　ゴールで待ってる！　必ずトップで帰って来い！』
夢でも幻でもかまわない。仁美は最後の五キロに全てを賭けた――。一気に仁美の走りが変わる。全盛期の仁美が復活したようだった。トップとの差がぐんぐん縮んでいく――。
残り三キロ――、エチオピアの選手がラストスパートをかけた。トップ集団の日本選手が離されていく中を、仁美は一人で抜け出し、トップの選手の後を追う。
浩二が待つゴールの競技場が見えてきた。仁美はトップのエチオピアの選手に迫る。トップ争いはトラック勝負となった。エチオピアの選手も相当息が上がっているようだった。仁美を放すことが出来ない。最後のコーナーで仁美は遂にエチオピアの選手を抜く。観客席の歓声が轟音と化し競技場を揺らす。そんな歓声も仁美は気が付かないほど集中していた。ただ正面のゴールを走り抜けることだけに。その先の光の中で、両手を広げて待つ、浩二の胸に飛び込むことだけに――。しかし――。
最後の直線に出たところで、仁美は突然足を取られたように転んでしまう。ごろごろと転げまわる仁美の横をエチオピアの選手が走り抜ける。観客席から、悲鳴のような声が響く中、仁美は右足を押さえて苦しそうにもがいている。
音声が消え、静かにピアノの伴奏が始まった――。
やがて、語りかけるようにつくしの歌声が流れ始めた――。
スクリーンにはアップで、仁美が血が滲むほど歯を食いしばり、はってゴールへ向かおうとする姿が映し出されている。
そんな仁美を励ますように、つくしの歌声がバックで流れているゴールまであと少し。
仁美は――、薄れていく意識の中で彼の名前を叫んだ――。

恵梨香のギターソロが仁美の心の叫び声のように鳴り響く。それをバックに、担架に乗せられた仁美は救急車へ乗せられる。
ギターソロが終わり、カンナの優しいピアノの伴奏が暫く続く。
病室のベッドに寝かされている仁美は、子守歌でも聴いているかのような、穏やかな寝顔をしていた。やがて、仁美はゆっくりと目を開ける。
しおんのドラムが、サビへと導くようにゆっくりと、力強く響く――。
ぼんやりとしていた、仁美の視界がはっきりとしていく――。
つくしがハイトーンで歌い上げるサビが始まった途端に仁美が見たものは、浩二の優しい笑顔だった――。
「びえーん！」
「うえーん！」
つくしと小梅は滝のような涙を流しながら、エンディングロールの中で流れている曲『ヘレン』を、ぐちゃぐちゃになった泣き顔で熱唱していた。
「私！　感動しちゃった！」
「私も！」
二人は映画が終わると、抱き合ってそう叫んだ。
「どうでしたか？　映画の方は」
後ろから男性の声がして、つくしと小梅は振り向いた。プロデューサーと白髪の男性が後ろの席に座っていた。プロデューサーは隣の白髪の男性を、この映画の監督だと紹介した。
つくしと小梅は立ち上がって丁寧に挨拶をした。
「すっごく感動しました。大ヒット間違いなしです！」小梅は言った。
「なんか、直ぐにでも曲が書けそうです！」と、つくしが叫ぶように言うと、監督はにこにこと微笑んで頷いた。
二人は監督にラウンジへ招かれた。そこでお茶を飲みながら、挿入歌の打ち合わせを始めた。

「仁美がもう一度マラソンに挑戦するために、トレーニングに励んでいるシーンのところに曲を入れたいんですよ」
「はい！　あのシーンならピッタリなのが書けそうな気がします」と、つくしが元気に答えると、監督は嬉しそうな顔で頷いた。
監督は小梅に目を向けた。
「それにしても松本さんは、本当に綺麗だね。演技なんかには興味ないのかな？　役者をやってみたいとか」
「そんなあ、私なんて……、おホホホホ」
身体をくねらせて、技とらしく照れた素振りを見せている小梅を横目で見ながら、つくしは思った。
（めちゃめちゃ演技しとるやないか、このオヤジギャルが）
監督は、カップのコーヒーを一口飲んでから言った。
「お二人のバンドのことは、スポンサーになってくれた会社の社長さんの紹介でね、この映画にピッタリの曲があるからどうですか？と勧められて聴いたんですよ」
「ヘレンをですか？」つくしが訊いた。
「うん、そう。ヘレンと言うのはつくしちゃんが飼っている犬なんだってね」
「はい！　でも、どうしてご存知なんですか？」
「そのスポンサーの方が教えてくれたんだ。なんでも、つくしちゃんのヘレンが使っている車椅子は、そのスポンサーの会社で特別に作ったものらしくて、映画のヘレンの車椅子もそこで特注したんですよ」
「そうなんですか。でも本当はヘレンは、譲ってもらった犬なんです」
「うん、知っている。ヘレンの前の主人の方と、スポンサーの方が知り合いだったらしいんだ。中学校で教師をやっているって言ってたかなあ……」
「ええ！　先生と！？　そうなんですか……」
「どんな人なんだろうね。そのスポンサーの人。とにかく私たちの

恩人だよね」小梅が言うと、つくしは相槌を打った。
「とても若くてね。好青年って感じの人ですよ。あの歳であんな大きな会社を任されているんだから、ほんとに素晴らしいと思いますよ」監督は小梅に向かって言った。
「青年実業家ですか……」小梅はうっとりとした表情で言った。
「後で紹介しますよ。打ち合わせをする約束をしていて、ここに来る予定なんですよ。お二人のバンドのファンみたいなので、紹介したら喜ぶと思うし」
「本当ですか！？」
小梅はそう叫ぶと、慌てた様子で化粧室へ向かった。そんな小梅を横目で見送ると、つくしは思った。
（小梅さん、さては化粧直しに行ってるな。もしかしたら玉の輿に乗れるかも、なんて思ってるよ。むふふ……、甘いわよ、小梅さん。オヤジギャルで、めちゃめちゃ酒癖が悪くて、ゴリラ並みの怪力女だってこと、ばらしちゃうもーんだ）
「おや、噂をすれば来た来た」
つくしは振り向いて男性が近づいてくるのを確認すると、すっと立ち上がった。
スポンサーの男性は本当に若くて、自分と大して歳が変わらないんじゃないかと、つくしは思った。男性に少年のような眼差しで見つめられ、つくしはほんのり頬を赤らめた。
「はじめまして……。わたくし、ボーカルをやっております、石田つくしと申します。このたびは、わたくしたちのバンドの曲を推薦していただきまして、大変ありがとうございました」
つくしは挨拶すると深々と頭を下げた。
「とんでもありません」
スポンサーの男性は名刺を取り出して、つくしに差し出した。
「わたくし、三井と申します」
代表取締役社長の肩書きの下に、三井繁蔵と書かれていた。
「一度ライブを拝見させていただいたことがあるんですよ。本当に

感動しました」
　つくしは嬉しそうな顔をして、顔を上げて三井繁蔵を見た。
「近くで見ると、本当に可愛らしいですね。石田さんは」
「そんなこと……」つくしは腰をくねらせてテレていた。
（さすが青年実業家だわ。見る目があるっていうか、小梅さんというとちょっと霞んじゃうかも知れないけど、私だってこれでも結構美少女なのよ。ああ……、そんなに見つめないで……、ひょっとして……、私のことが……、ひょっとして……）
「大好きなんですよ」
「えっ！」
　つくしは目を剥いた。顔がみるみる赤くなっていく。頭の中では、繁蔵が言った大好きという言葉がこだまし、彼がその後「石田さんの歌が」と言ったのが耳に入らなかった。
　つくしは顔をとろんとさせた。妄想の中で彼女は、きらびやかな電飾を散りばめた玉の輿に、今まさに乗ろうとしていた――。片足を輿に乗せたその直後、小梅の大声を聞いてハッとした。
「シゲちゃん！」
　繁蔵は飛び上がるように立ち上がった。
　小梅が、いつの間にか横に立っていた。そして驚いた表情で繁蔵を見いていた。
　先程まで穏やかだった繁蔵の表情から血の気が引いていき、おろおろし始めた。
「あ……、あの……」
　小梅はまだ驚いた顔をしていた。
「な……、なんでいんの？」
「い……、いや……、あの……」
　繁蔵はゆっくりと後ずさった。
「か……、監督すいません。僕……、あの……、急用が……」
　監督は不思議そうな表情で言った。
「えっ？　三井さんどうされたんですか？」

「すいません！」と繁蔵は叫んで、急ぎ足でラウンジを出て行った。
小梅は不思議そうな顔で繁蔵を見送ると、つくしと監督を交互に見た。
「小梅さんと三井さんて、知り合いなんですか？」つくしは不安そうな表情で、貰った名刺を小梅に見せながら訊いた。
その名刺を小梅は受け取り、目を剥いた。そして呟いた。
「嘘……」
小梅はつくしに名刺を付き返すと、走ってラウンジを出て行った。つくしもその後を追った。
「小梅さん！」

小梅はスタジオのビルを飛び出した。歩道を左右振り返り、早足で歩いている繁蔵の後ろ姿を見つけると、もうスピードで繁蔵を追いかけた。繁蔵は小梅の気配を感じたのか、一度振り返って、驚いた顔をすると、直ぐに走って逃げようとした。しかし小梅の迫る速度のほうが断然速く、小梅は繁蔵のシャツの襟首を掴んで彼を捕まえた。
小梅は肩で息をしながら言った。
「な……、なんで……、逃げるのよ……」
「す……、すいません……」
「だから……、何でって……、訊いてるでしょ？」
「す……、すいません……」
小梅はイラついた表情をして、繁蔵を自分の方へ向かせた。
「なんでいちいち謝るのよ」
「ぼ……、僕……、勝手なことばかりしてしまって……」
「別に何にも怒ってないわよ！　感謝してるのよ！　ウチのバンドを監督に紹介してくれたのも、ウチの工場を救ってくれたことも、――全部、感謝してるのよ！」
「本当ですか？」
小梅は穏やかな表情をして答えた。

「本当よ」
繁蔵はほっとしたような表情を見せた。
小梅は繁蔵を懐かしそうでもあり、淋しそうでもある表情をして、じっと見つめた。
繁蔵はみるみる顔を赤らめていき、俯いてしまった。
「シゲちゃん？」
繁蔵はどぎまぎした表情で顔を上げた。
「私……、待ってたのに……」
「えっ？」
「シゲちゃん、私に気があったでしょ？」
繁蔵は息を飲んだように、目を剥いて固まった。
小梅は優しく微笑んで繁蔵を見つめると言った。
「私……、シゲちゃんが告白してくれるの……、ずっと待ってたのよ」
繁蔵の口元がぐにゃりと歪んだ。そして、彼の少年のような瞳から、大粒の涙が溢れ出てきた――。
「ぼ……、僕……、こ……、小梅さんが……」
小梅は繁蔵を優しく見つめて返した。
「ぼ……、僕は……、こ……、小梅さんが……、小梅さんが！　大好きです！」
小梅は繁蔵の頭を、優しく包み込むように胸に抱きしめると言った。
「私もよ……。私も……、シゲちゃんが大好きよ」
繁蔵は小梅の胸の中で、子供のようにわあわあと泣き叫んでいた――。

小梅から数メートル離れたところで、つくしは立ち尽くしていた。
顔を思いっきり引きつらせ、暫く唖然と抱き合う二人を見ていたが、ゆっくりと身体の向きを変え、スタジオのほうに向かっていった。

（やっぱ、私は筑紫なんだ。一生咲くことは出来ない……）

暫くして小梅と繁蔵は揃ってラウンジへ戻ってきた。監督と繁蔵が次の映画の打ち合わせを始めている間、小梅と繁蔵は時折目を合わせ、笑みを投げかけあっていた。その横でつくしは、ぼうっとした表情で座っていた。

＊

スタンリークラークの軽快なチョッパーベースが鳴り響く車内で、小梅はノリノリで車を西へと走らせていた。

御殿場インターを過ぎ、二車線の区間に入ると、少しスピードを落として、カーステレオのボリュームを絞った。ちらりと助手席に座っているつくしを見る。そして溜息を吐いた。

「ねえ、つくし？」

つくしはぼんやりと、フロントガラスの向こうを見つめている。

「つくしってば！」

つくしはびくりとして、驚いた顔を小梅に見せた。

「なにずっと、ボケッとしてるのよ」

つくしは口を尖らせると顔を背けた。

「なによ。言いたいことがあるなら、言いなさいよ」

「……」

「なによ」

「だって……」

「だって、なに？」

「だって、私がいいって思う人がいると、直ぐに誰かが取っていっちゃうんだもん」

「はっ？」

「ずるいじゃん！　なんでみんな直ぐに彼氏が出来るのよ！」

小梅がふふっと小さく笑うと、つくしはまた口を尖らせて、反対

側の窓の先に目を向けた。
「あんたにだって、ちゃんと春がやってくるよ」
「きたって私は咲けないの！」
「なにそれ？」
「私はつくしんぼだから！」
つくしの言葉を聞くと、小梅はげらげらと大笑いを始めた。
「ひい！　おかしい！　笑わせないでよ！　運転出来ないでしょ！？　ギャハハ！」
「もう！　全然いいことない！」つくしはそう叫ぶように言うと、また膨れっ面を見せた。
小梅は落ち着きを取り戻すと、穏やかな表情で言った。
「でもあんたいいじゃん」
「何がよ」つくしは膨れっ面のまま正面を向いて訊いた。
「えっ？　だってヒロインやるんでしょ？　監督さんが頼んだら、あんた頷いてたじゃん」
「へっ？　なにそれ？」
つくしは驚いた顔を小梅に向けた。
「えっ？　あんた覚えてないの？」
「全然……」つくしは唖然とした表情で言った。
「えー、信じらんない。監督さんがさ、次の映画で歌の上手いヒロインが必要で、あんたがぴったりだからお願いしますって言ったら、あんた頷いたでしょ？　監督さん、よしってガッツポーズしてたよ？」
「ええ！　うそー！　どうしよう、私お芝居なんて出来ないよ！」
「知らないわよ。今から断ったりしたら失礼だからね」
「えー！　どうしよう！　どうしよう！」
つくしは頭を抱えて、地団太を踏んだ。
「そんなに嫌なら私が変わってあげようか？　主役の男優さんが、めちゃめちゃいい男らしいし」
つくしはぴたりと動きを止めた。

「変わってあげるよ。恋愛ものらしいからね。イケ面の俳優さんに、ぎゅってしてもらえるかもしれないじゃん？」
つくしは顔を上げて、小梅を見た。
「なに？」小梅は訊いた。
「駄目よ」
「なによ、さっき出来ないって言ってたじゃん」
「私やる。私が頼まれたの！　その映画のヒロインは、私じゃなきゃ駄目なの！」
小梅は微笑んで正面を見つめていた。
つくしは今、白馬に跨ったイケメン俳優がさっそうと現れて、自分の前にひざまずく光景を思い描いていた。
『つくしさん、君は僕の太陽だ』
（そんな、私なんて……、ただのドジでのろまな亀です……）
『そんなことはありません。どうか僕と付き合ってください』
イケメン俳優がつくしの手を引き、彼女を抱きしめる。
『僕は、君の心に花を咲かせたい』
つくしの目の前に、広大な花畑が広がった――。
（ああ……、幸せ……）

＊

「ハイ！　それでは撮影に入りまーす！　シーン百二十八！　ヒロインの琴美が、主役の直樹に思いっきり振られるシーンから！」
それは、粉雪の舞う、冬の北海道でのロケだった――。
（ううっ！　私の春はいつくるの！　私はいったい、いつになったら咲けるのよ！）

――完――

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。（Y

,

$\underset{\smile}{\mathrm{Z}}$

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4068c/

彼女の恋は……

2010年10月8日15時43分発行